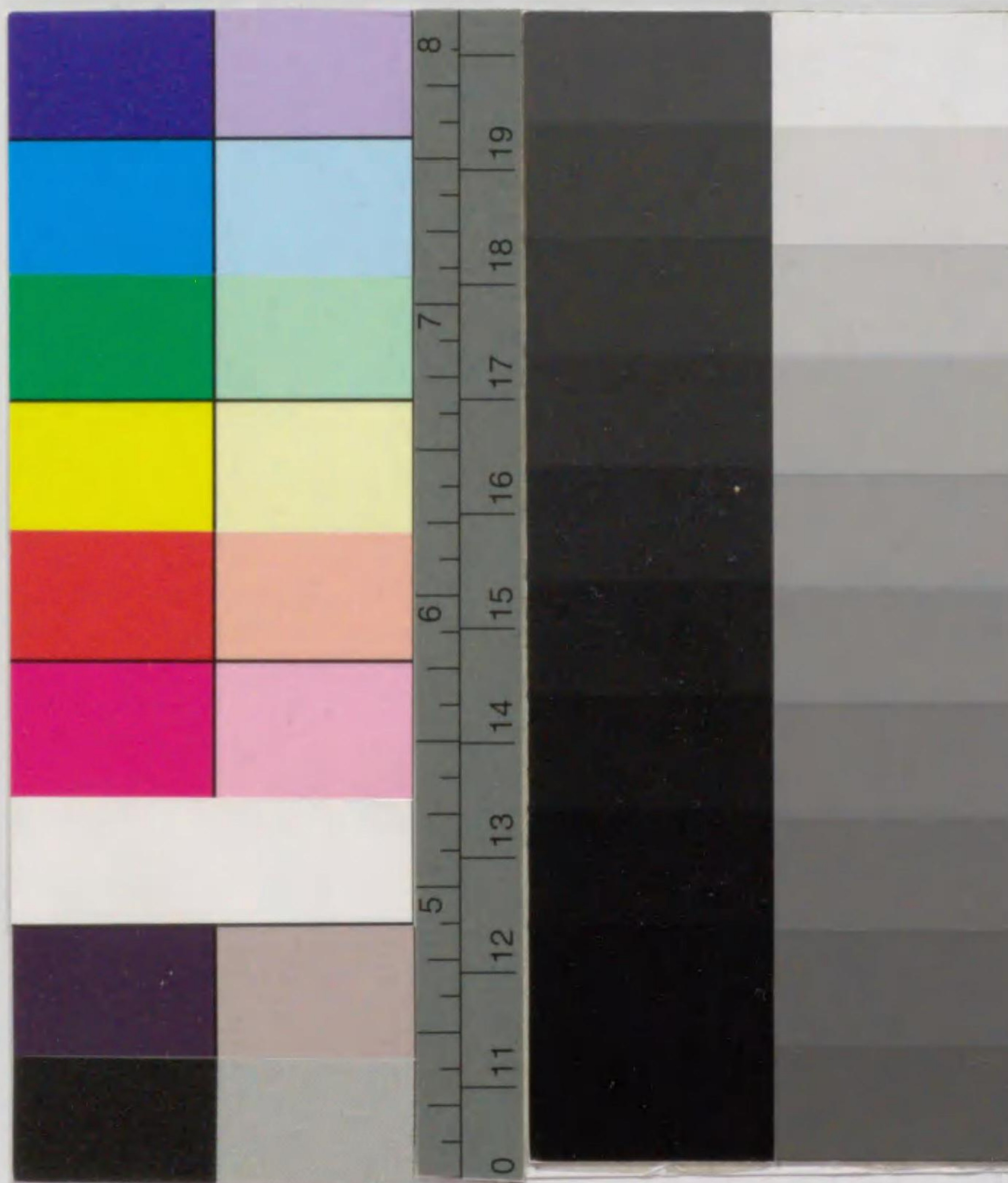
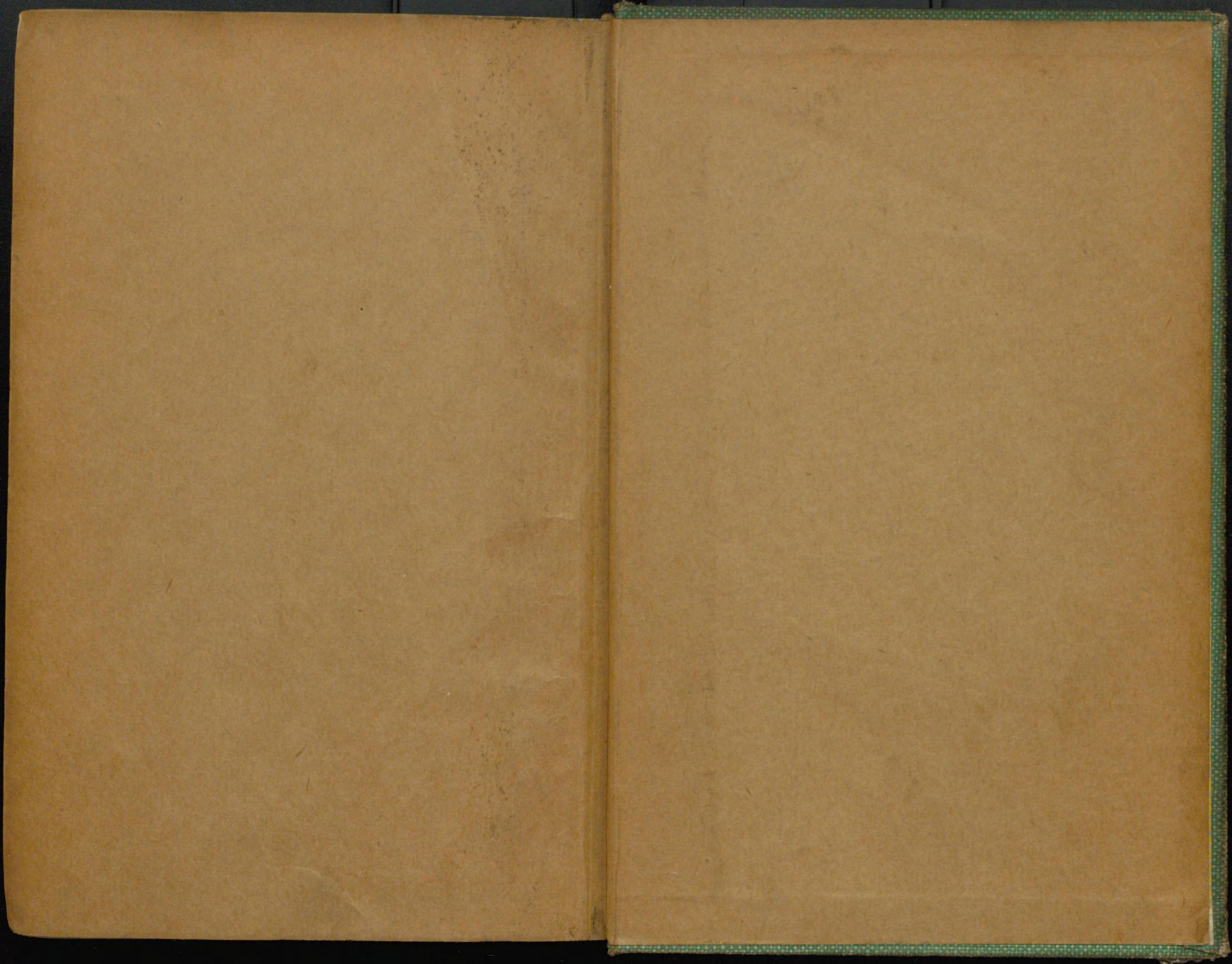


560-9

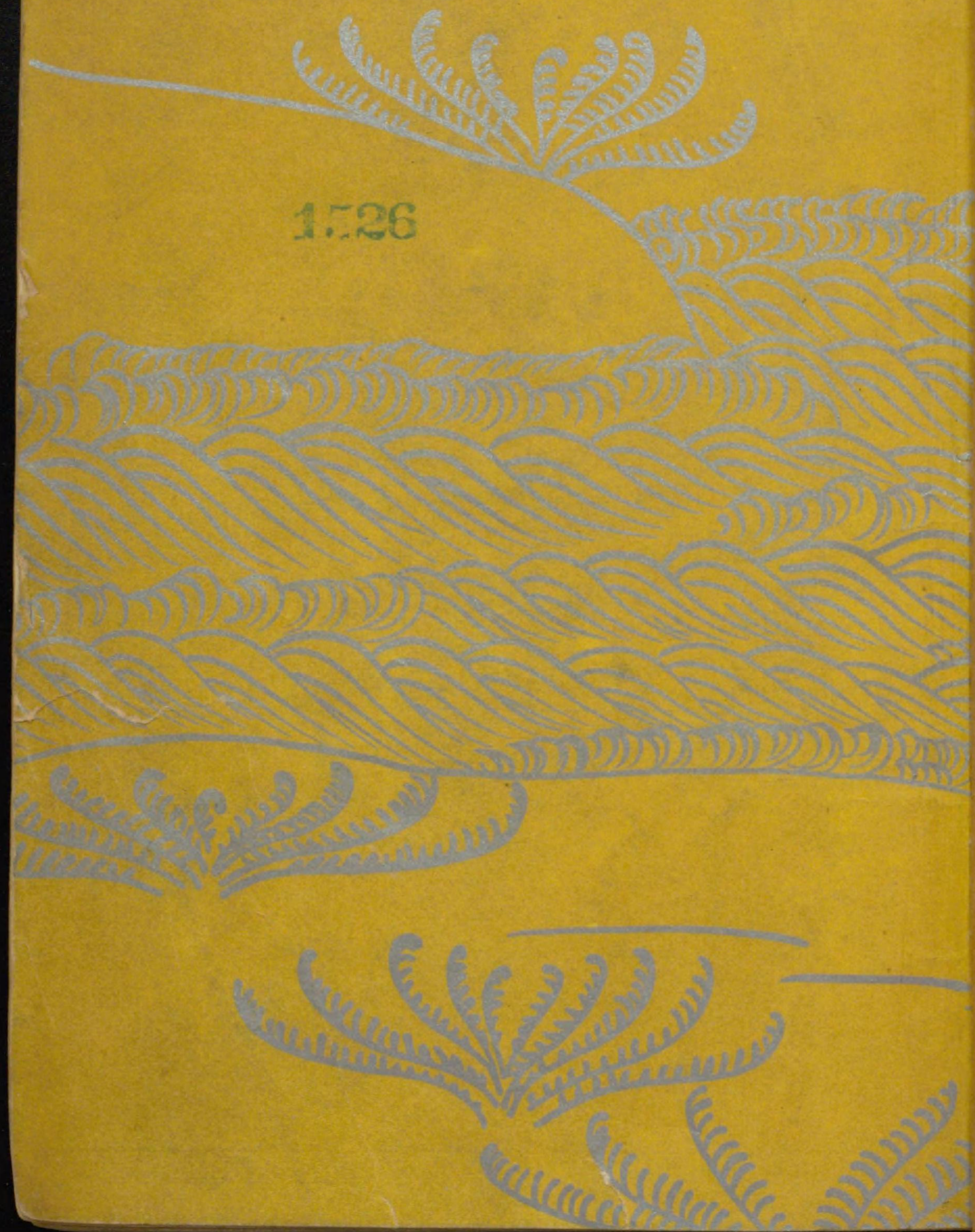


1200501511745





1526





八文字屋集

全





八文字屋集

全





傾城禁短氣插繪

八文圖

合



時 刻 記 録 簿



浮世親仁氣質挿繪





香川縣之風景圖

560-9

代近 日本文學大系 第五卷目次

傾城色三味線

内江島 藤其 自其 笑積 一一七三

序……………三
目録……………四

第四 月に調ぶる琴浦が三味……………七
第五 月に薄雲かゝる情……………八

京之卷

大坂之卷

第一 花の下紐ながと短かと……………九
第二 花を繕ふ柏木の衣紋……………一六
第三 花崎實のる玉の輿……………二〇
第四 花は散れど名は九重に残る女……………二六
第五 花にも負けぬ三五の月……………三〇

第一 梅も松も打交つての大寄……………九
第二 梅よりすいた萩野が一風……………一三
第三 梅の花山にのぼり詰める男……………一六
第四 梅の花笠にふりかゝる時雨……………二〇
第五 梅に名の鳥が啼く東路の別れ……………二二

江戸之卷

鄙之卷

第一 月にも増る高雄の紅葉……………三五
第二 月にも花にもたゞ濃紫……………六〇
第三 月より上に名は高松……………六六

第一 女郎の心中をついて見る鐘木町……………三五
第二 戀の焼きつけ柴屋町の門立ち……………三三
第三 木辻鳴川に深入りする色男……………二四

目次

目次

第四 高洲ちもりに茂る戀草……………一四
 湊之卷
 第一 室の遊女に氣を播磨湯……………一四

風流曲三味線

一之卷

目録……………一七五
 第一 女道衆道並の岡の隠れ家……………一七五
 第二 仕掛のよいからくり塔……………一八六
 第三 一杯喰はして乞食にもらふ命……………一九三
 第四 島原へ御來迎三尊の身替り……………一九八
 第五 色より思ひを掛け奉る曼陀羅……………二〇四
 二之卷
 目録……………二二七
 第一 長老様の婿引出物……………二二九
 第二 中のよい貧家のならべ枕……………二三九

二

第二 燒鳥にする鶉野の仕掛け……………一五
 第三 稻荷町に化けをあらはす手管男……………一五六
 第四 詞に角のたたぬ丸山の口説……………一六七

江島其積 内藤自笑……………一七三―一四五

第三 花に嵐前髪に痘瘡……………一七三
 第四 横槌見て楽しむ後家……………一七五
 第五 心中に浮名のながれ川……………一七九

二之卷

目録……………二六三
 第一 仕過しの天狗仲間……………二六五
 第二 心中時花醫者……………二六九
 第三 牀の軍法女楠……………二七四
 第四 八百兩が夜ぬけ姿……………二八二
 第五 淀鯉水の働き……………二九〇
 四之卷

目録

第一 元服しても子供心……………二九七
 第二 萬福長者二代の大臣……………三〇九
 第三 手代仲間威勢争ひ……………三二三
 第四 帶とかぬ枕物語……………三二九
 第五 一ト思案が金子三兩……………三三七
 五之卷

目録

第一 時の用に立つ金の鶏……………三三七
 第二 筒持たせの裏腹……………三四八

傾城歌三味線

序……………四一九

一之卷

目録……………四一〇
 第一 三國出村ではの利きし……………四三三

目次

第三 善悪を見ぬく主人の眼……………三三七
 第四 名残は盡きぬ涙の酒盛……………三六四
 第五 三百兩にかづき物……………三七〇
 六之卷

目録

第一 抑是れは謠の師匠……………三七九
 第二 錆びたれども形見の長刀……………三八一
 第三 幽霊でも好いた風……………三九二
 第四 再び歸宅の悦び……………四〇〇
 第五 ○神の御利生一家繁昌……………四一一

安藤自笑 江島其積……………四七一―四九九

第二 上手をいうて……………四三七
 第三 あれ／＼あれを見や……………四三三

二之卷

目録……………四三九

目次

- 第一 舅太夫は娘ゆゑ……………四七一
- 第二 それ覺えてか……………四七七
- 第三 二人連れるが嬉しさに……………四八三

三之卷

- 目録……………四九〇
- 第一 立つや浮名の開夫を……………四九二
- 第二 獨り手酌の爛鍋……………四九六
- 第三 一日なりと連添ふが……………四九七

四之卷

四

- 目録……………四九七
- 第一 悪女へ婿の入相の……………四八一
- 第二 月見の夜一九さんと……………四八六
- 第三 粹方も女郎を失うて……………四九一

五之卷

- 目録……………五〇一
- 第一 女郎の腹帯さへ……………五〇三
- 第二 太鼓持の世渡りは……………五〇八
- 第三 親子の縁離れぬ中は……………五一四

安藤自笑……………五二一—七〇八

傾城禁短氣

序

五三三

一之卷

- 目録……………五三五
- 第一 女郎方便の一枚起誓……………五三七
- 第二 三野の女郎安心の身請……………五三七

二之卷

- 目録……………五五五
- 第一 野傾の兩宗あづち論……………五五七

難波の太夫即身根引の成佛……………五五〇

女郎買總同向の鐘木町……………五五七

第二 身揚はくつわの方便品……………五五三

第三 異香薫ずる女郎の内懐……………五五九

第四 女宗にあうて衆道門尻から閉口……………五七七

三之卷

目録……………五五五

第一 巾著山白人寺に弘むる新宗……………五五七

第二 流儀を立つる色の諸末寺友吟味……………五五九

第三 表向は佛の白人金色の花代……………五六〇

第四 情ふかい誓ひの海にお陥りの男……………五六八

四之卷

目録……………五六七

第一 吉原寺四十八夜の夜見世談義……………六二九

第二 紫雲の染小袖女郎の御來迎……………六三三

第三 萬徳圓滿釋迦の私金……………六三三

第四 教への駕籠にのりの道連……………六四一

五之卷

目録……………六五一

第一 難波の新般水揚の新談義……………六五三

第二 外面似菩薩内證は振るに極めたる女郎……………六六〇

第三 女郎の手管に迷ひの凡夫……………六六七

第四 禿も水揚してから即身上物……………六七四

六之卷

目録……………六六一

第一 色里一遍上人大臣共へ色道の教化……………六六三

第二 女郎買ひ大善根の施主の企て……………六六八

第三 不審を打つたる太鼓の善惡……………六九五

第四 女郎買五重相傳一重紙子……………七〇三

鎌倉諸藝袖日記

目次

安藤自笑……………七〇九—七九五

江島其積……………七〇三

序……………七二

卷之一

- 目録……………七三
- 第一 座頭は杖より三味線を引事過ぎた儒學……………七三
- 第二 腐儒の智慧自慢校合の違うた身代……………七六
- 第三 和尚の相撲好きは四十八願の手取……………七四

卷之二

- 目録……………七九
- 第一 茶人の俄慙丸裸の亭主……………七三
- 第二 能囃子を好額の若衆盛り……………七六
- 第三 無に落つる見識は色の水上……………七四

卷之三

- 目録……………七七

世閒子息氣質……………七九

- 序……………七九

- 第一 比丘の五百戒は芝居の看板……………七四九
- 第二 陰陽師の律儀は見せ物の妨げ……………七四
- 第三 劍術の達者二流のあらそひ……………七五

卷之四

- 目録……………七五
- 第一 淨瑠璃物真似も年功のいひ立て……………七六
- 第二 醫者は療治より詞の七加減……………七三
- 第三 細工の上手自慢を謂ひ勝の座敷……………七六

卷之五

- 目録……………七六
- 第一 山伏の墨色を見事な頼み人……………七五
- 第二 繪師の下手は襖に恥をかく山……………七八
- 第三 連歌師の櫛商賣ひいてみる友達……………七九

江島其磧……………七九

一之卷

- 目録……………八〇
- 木賊賣は心を磨く正直な百姓形氣……………八〇
- 勘當は請太刀親の家を鞘走る侍形氣……………八〇
- 取付き世帯は表向を張つて居る太鼓形氣……………八〇

一之卷

- 目録……………八二
- 意見はきかぬ薬心を直さぬ醫者形氣……………八二
- 内證は知らぬが佛有り難い出家形氣……………八三
- 大力は身の疵身體投げた相撲取形氣……………八三

二之卷

- 目録……………八五
- 世閒の人に鼻毛を讀まるゝ歌人形氣……………八五

浮世親仁形氣……………八三

- 序……………八三

一之卷

- 正直な親父を一吞にする上戸形氣……………八四〇
- 勘畧は世帯薬聞き過ぎた始末形氣……………八四六

四之卷

- 目録……………八五
- 女郎の諷に付き廻る大臣形氣……………八五
- 末子が智慧は上々箱入の銀持形氣……………八六
- 怨故に禍ひは身に引きかゝる虎落形氣……………八六

五之卷

- 目録……………八七
- 始に焼かれて火にくばる大名形氣……………八六
- 遊興に草臥れて養生に引込む隠者形氣……………八七
- 福人になる世帯の身の上知らぬ占ひ形氣……………八五

江島其磧……………八二

- 目録……………八四

- 第一 食を楽しむ達者親父……………八七

第二 相撲を楽しむ強力親父……………八九一
 第三 野郎を楽しむ男色親父……………八九四

二之卷

目録……………九〇一
 第一 金を楽しむ高利の親父……………九〇三
 第二 色を楽しむ血氣の親父……………九〇七
 第三 殺生を楽しむ佛嫌ひの親父……………九一〇

三之卷

目録……………九二七
 第一 踊を楽しむ子自慢の親父……………九二九
 第二 飛行を楽しむ仙人親父……………九三三

世間母親容氣

序……………九六五

目録……………九六六

卷之一

卷之二

第一 武勇な母を持ちあぐみたる若者……………九八五
 第二 母親の悪性ゆゑ外戚種の兄弟……………九九一
 第三 嫁が姑と形風流の當言……………九九五

卷之三

第一 繼母の慈悲に羽を反す不孝……………一〇〇〇
 第二 得生極樂芝居の中川……………一〇〇四
 第三 舞子の老いたるは運を開くさし扇……………一〇〇八

卷之四

第一 母から吞込む酒屋の婿殿……………一〇一三
 第二 半季の出替りに氣を紅裏……………一〇一八
 第三 戀の手習とは白髪のお袋……………一〇二二

卷之五

第一 杯より漏れ出し學問上戸……………一〇三三
 第二 三人息子に倦みし母の涙……………一〇三九
 第三 思ひく心は互に乗合船……………一〇四三

第三 酒を楽しむ賢人親父……………九三六

四之卷

目録……………九三二
 第一 藥を楽しむ壽命親父……………九三三
 第二 娘を楽しむ遊山親父……………九三七
 第三 兵法を楽しむ陽氣親父……………九四二

五之卷

目録……………九四七
 第一 獨り楽しむ遍屈親父……………九四九
 第二 經を楽しむ信心親父……………九五五
 第三 老を楽しむ果報親父……………九五九

多田南嶺……………九六三—一〇三七

第一 高雄の紅葉より顔の照るお敦女郎……………九七一
 第二 按摩車廻りのよき萬菊婆……………九七五
 第三 母の口ゆる仕替へらるゝ古手女郎……………九八〇

目次終

解題

文學博士 笹川種郎 卷頭一—三二

解題

文學博士 笹川種郎

書肆八文字屋

八文字屋本若しくは八文字屋物とは、書肆八文字屋の出板したもの、及び同種類のもの併せ稱した名で、井原西鶴の創めた浮世草紙の系統を引いた上方小説である。

八文字屋八左衛門は、氏を安藤と云ひ、京都麩屋町通誓願寺下る所にて、世々書肆を営んでゐた。抑も八文字屋八左衛門と申す草紙屋は、何にて世間へ廣く名を發し候哉、二條正本や（二條通寺町西へ入ル正本屋山本九兵衛）、同じく鶴屋（同所南側鶴屋喜右衛門）は古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は京芝居の歌舞伎本を板行仕候。」と、江島屋其碩の云つた如く、もとは多く歌舞伎本を板行してゐたが、元祿の頃に至り、當代の八左衛門は號を八文舎自笑と稱し、頗る世才に富んでゐたこととて、盛んに役者評判記、浮世草紙を出版して、出版界に牛耳を執り、八

文字屋本は當時の浮世草紙を代表することとなつた。

自笑は延享四年、『自笑樂日記』を出版するまで多くの書籍を刊行した。其の序に、「僕若かりしより狂言綺語を草紙にあやなせること數十部、九十歳に近き長壽、筆とることもいたつき多くは其笑に物ずきして書かせしに、今是を書き納めと思ひ、ふるへる筆に任せ、(中畧)此後其笑が書ける草紙、としごろ僕と共に筆をめぐらしぬれば、常磐の松の色變らず、弘く讀み傳へ給ひなんことを願ふと書きをさめぬ。」と云ひ、同じ書の跋文にも、「其笑は子なり、瑞笑は孫なり、向後の作意彼等に命せぬれば、常磐の松の色かはらず、緑の竹の久しき恵みを仰ぐと云ふ詞を以て、毫を納め侍りぬ。千代に八千代の限りなき濱の眞砂と盡せずよませ給へとなん心を込めて。」とありて、「霜枯はさもあれ龜の長齡草」と一句を題してゐるがごとく、其の子八左衛門即ち八文舍其笑に箕裘の業をつがしめ、延享四年十一月十一日、八十八歳を以て歿した。二條寺町の本覺寺に葬る。孫を八左衛門即ち八文舍瑞笑と稱し、相ついで、戯作の書を著はし評判記を出したが、孰れも其の祖に劣つてゐた。四代目の八左衛門に至りては、其の才遙かに父祖に及ばなかつた。自笑と號して、漸く評判記を出すに過ぎなかつたが、寛政の初年、京都の大火に類焼して家運大いに衰へ、遂に大阪に下りて、心齋橋筋安堂寺町に微に渡世を營みて、評判記を出してゐるが、此の

人歿して後は、其の子某なるもの放蕩無頼の破落戸にて、産を破り家を失ひ、評判記を作る事さへ出来なかつた。然るに四代目自笑が家に子飼より召仕ひたる卯作といへる者、記憶よく、評判記の綴り方を覚え、八文字屋没落後、御靈前瓦町に住して、和泉屋卯作と稱し、梅枝軒泊鷺と號して、新古の芝居繪本番附類の賣買を業とし、時には淨瑠璃の作をなし、芝居の故事來歴に委しきより、専ら評判記を出したが、己一人の名を出さず、亡師八文舍自笑の名を署して、己と合作のごとく記してゐた。天保年間、五十餘齡にて歿した。『南水漫遊』に、「技藝の評書は、西鶴團水の頃より昌んに成りゆき、其碩自笑に移り、其の後其笑瑞笑など其の意を續ぎしときは、評判記といふもの京都を本阿彌のやうに思ひしかど、浪華の二斗庵下物、酒屋鄰馬宿、其外魚丸、泊鷺など評して、今なほ年毎に出板なし、當代にては大阪を本家とす。」とある泊鷺は即ち此の人であつた。

役者評判記

役者の評判記は、もと遊女の細見記に基づいて作られたもので、其の位付も遊女細見記の位付に據つたものらしい。明暦二年板の『役者の噂』が最初のものであると云はれてゐる。然し初期

の評判記は男色流行の世とて、多く姿色に關する品定めであつて、要するに遊女の細見記に對する男色細見記に外ならなかつたのである。萬治二年京板の『野郎蟲』、寛文二年江戸板の『剝野老』同十一年二月板の『垣下徒然草』、延寶二年六月板の『野郎けぢく』、同年、江戸板の『新野郎花垣』、貞享元年、江戸板の『野郎三座託』、元祿四年板の『蓑張草』など、多くはそれである。同五年板の『役者み、かき』から位付を附して、技藝の評に及び、同六年正月板の『雨夜三杯機嫌』、同年の『四場居百人一首』、同十年の『役者大鑑』、同十一年の『役者櫻欄帚』など次第に觀察が銳利に、批評が精密になつて來た。翌元祿十二年板の『役者口三味線』は、初めて八文字屋が刊行した評判記で、これからして、八文字屋は盛んに評判記を刊行した。『三國役者舞臺鏡』『役者舌鼓』『役者萬年曆』『役者談合衝』『役者登はしご』『役者評林咄』『役者畧請狀』『役者二挺三味線』『役者舞扇子』『役者三世相』『役者友吟味』『役者稽古三味線』『役者胎内搜』『役者謀火燧』『役者大福帳』『役者懷世帶』『役者箱傳授』『役者座振舞』などである。

◎ 村山座 玉川千之丞

面體藝いづくを難すべきやうなし。女よりすき好まれ給ふこと五中將にも劣るまじ。されども年の齡、二十

日ばかりの月を見るが如くなれば、野郎の齡も今少しにて一しほ惜しく思はる。花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかはと云ひし人もあれば、又頼もし。

玉容輝四鄰 河畔往來人

千歳一時樂 烝民陷溺身

玉川の流れをたつる身なりとも袖に浪こす人を問はばや『野郎蟲』

松島市之丞 面體美しく、心にくき笑み顔、むくくの肌濃やかに、わけて情けの深かりしとなん、いとなつかし。野文字のおぶすな様と、かはれ給ふは今日此頃なりしかど、人の心は飛鳥川、よのまにかはる習ひとて、とやかくと罵ることうたてく思ひ侍る。よはひ暮春の花の如しと云ふもあり。

いちの上あつたものではならざかや『垣下徒然草』

菊 前河彙之助

一 此君姿美しく、面體籬の内に咲きそふ菊とも云ふべし。但し御目つき竹の子の御番衆とも云はん。されどもいとどしほらしく情け深し。景面白からねど、御最眞の方ありて、取廻しゆへ悪しき事には出られず、さてこそ情けあるゆゑ、心意氣もあるかなと、野郎衆羨む。

波めば汲めげにも薬ときく酒の誰が流れより前河の水『新野郎花垣』

おやま 伊藤小太夫

此君きりやう勝れ給ふ。一目見れば心も空に浮くと、いかなるせうの岩屋のお聖も通を失ひ、一曲の奏で昔は知らず、當代に又と此君の様なる人を見ると、ひとしく有頂天と八幡、侍は武士道、買は申量りも打ち棄てて假の浮世を厭ふさまの御出、ほの／＼と夜明し二日うるたへて御紅顔を拜し申すに、とかう凡夫の口より及びて、難きところに、さるもの申すには、餘りの事にちと御あしちとりよしあし引きの沙汰あり。理屈にはかほど舞の名人いくらも奏で給ふに、舞臺を廻り給はぬは、如何にぞや。但し上方の舞には廻らぬにや。下手のとうごまならんと申すは。げにも心をつけ申せば斯くの如し。御くせ身振にいづれば癖あり。餘り善くなさるゝにや、申すもことわりあり。御きずは口せき今少し洩え給はゞいかならん。御しあはせには折よき時の御くだり、今の女形の開山、こま／＼とはあとよりわざと申残し候かしく。

世の中を何いとふべきさりとては君ゆゑならば棄つる命も(野郎三座託)

村上竹之丞

無二辛度一爲レ勃生

手作出阿親燈

葉媒者腰附物

少聲色神天晴

御色花橋、げい大方の立者にして苦しからず、詞のあや善く聞ゆ。わけのときは堅過ぎて面白からず。いやこ

れがよいといふ人もあり。いのち／＼。(雨夜三杯機嫌)

位付のことは『南水漫遊』に、「評判記に著はす位付の昇進は明暦萬治の頃より相見えたり。それより物に准へ出せる事年々に其數不知といへども、位は上々吉を頭とす。其の後元祿の末より寶永正徳享保の頃に至り、位を六品に分つ

三が津總藝頭 無類 極上上吉 至極上上吉

大上上吉 眞上上吉 功上上吉 至上上吉 大至極上上吉

外に盡の白字褒美附等の故實は好士の知れる所なれば爰に畧す。評書五つの傳の内に寸延尺墮の傳と號して、一寸づ、延びて行く、人に逢つては行く船の岸は跡へさがるやうに見ゆる段ありて、次第に出世すると、老いこむ役者の見合には細評祕事あることなり。」と見ゆ。

江島屋其碩

八文字屋自笑も多少の文才はありしなるべけれど、彼の得意とするところは、其の世才であつた。彼の名を以て著はした評判記にしろ浮世草紙にしろ、おほくは江島屋其碩の手になつたのである。

其碩は通稱を市郎右衛門と云ふ。京都京極通誓願寺は浄土宗の本山にして、本尊は春日佛師の大佛であつた。此の寺の門前に昔より餅を鬻ぐ家ありて、大佛餅とて世にもてはやされ、繁昌して巨萬の富を作つた。其碩は即ち此の家の後裔であつた。然るに豊太閤が洛東六波羅の南に方廣寺を營みて、大佛建立の舉ありてより、他の餅屋新たに其の門前に大佛餅を開いて、繁昌したりしがために、京極通の餅屋は業を轉じ、誓願寺通、柳馬場に移ることとなつた。其碩は家の富を襲いで、驕奢を事とし、遊里に出入して、風流自ら喜んでるたが、文才があるので、自笑に聘せられて、彼の爲に幾多の戯作をものしたのである。然るに自笑と其碩との間には、感情の衝突より遂に確執となり、正徳四年正月其碩は自笑と分離して『役者目利講』を著はし、其の序に於て、從來のいきさつを一切ぶちまけた。自笑に取りては、まことに一大打撃であつた。

東西々々、扱わけて御断りを申しますは、役者評判本は中頃出水通和泉屋八左衛門と申す草子屋板行致し、年古板に書き加へて、或は『役者舞臺鏡』又は『櫻欄帯』などと外題を替へて出し候處に、此の『役者目利講』の作者其碩と申す好き者、三ヶ津を三卷にわけ、一切づゝの序をつけ、御慰みに、上中又は白字の上などと申す位付を致して、『役者口三味線』と題號をつけ、鉄屋町通八文字屋八左衛門方へ遣し申せば、早速板行に致しぬ。それより毎年せがまれ、斟酌しながら年々作り遣し候處に、又二條通り正本屋九兵衛方よりも、一とせ餘儀なく頼まれ已むことを得ずして、『役者一挺鼓』と申すを仕遣し候。しかれども八文字屋と、正本屋兩方をか

け持に、同じ事も成り難く、正本屋は圓水と申す好き人へ頼み、八文字屋方は例年絶えず仕遣し候、五六年以來は評判の所許りは、先格を以て、其年の狂言の當りを見て、自分にも可成事と、評判の仕方を教へ、八左衛門に致させ、外題目録三ヶ津の序を仕遣し候。然るに此作者其碩、一所の江島屋市郎右衛門と申す新本屋と、役者評判本は向後八文字屋と相板に致させ、末々までも入魂させらるゝ様にと、作者色々と申せども、八文字屋一人していつまでも可仕由申切り、不同心にて却つて江島屋方をさして、似せ本又は紛らはしき草紙など出し候と、八文字屋より斷書出し候段、作者身に仕候ては、心外の至に存候。抑も八文字屋八左衛門と申す草紙屋は何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋、同じく鶴屋は古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は京芝屋の歌舞伎本を板行仕候外、さのみ家名を世間に御存知にても無之處作者其碩、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣し、其の語り本を八文字屋へ遣し、板行させ候てより、年々の評判本は申すに及ばず、『傾城色三味線』又は『曲三味線』『禁短氣』『傳受紙子』『色情あひひいな形』『御伽會我』の類、慰みの書數多作り遣はし候所に、各様の御意に入り八文字屋くと、是より浮世本、評判本の名取のやうに罷成候事、八文字屋の功に候や、作者其碩の功にて候や、此段憚ながら世上の人さま御了簡被成可被下候。殊更作者の實名を出さず、作者八文舎自笑と致させ出し候程の深切を顧みず、今にては八文字と名を取り申す上なれば、烏を驚と書いて板行仕出し候ても、八文字屋と申す名にて賣り申すとの所存、高鳥盡きて良弓藏るとやらんにて、功を立

て遣し候作者の申分も用ゐず、作者一所の江島屋をけづり、一人の功に可レ仕存念、是によりて當年より江島屋方に役者評判本板行仕候。已來は毎年仕出候間御求め可レ被レ下候。八文字屋方には、今迄名を取らせ候作者の功を奪ひ、自分の功に仕度存念に有レ之候へば、右の所世間へ披露致す事氣の毒に存じ、歌舞伎本、配りかんばん等に、此方似せ本の、或は紛らはしき本などと小書をして、八文字屋より出し候。右の通に少しにても違ひたることをかく長々敷書き顯し、板行に可レ成ものに候や、紛らはしきと申す小書仕る手間にて、眞實紛らはしき事にて候はば、此長口上をとめ申すが眞にて候。惣じて紛らはしきの似せ本のと申すは、譬へば八文字屋八郎左衛門板などと仕りし出し候はば、紛らはしきとも可レ申候。あの方は八文字屋板、此方は江島屋板と仕候に、紛らはしきと申す譯は無御座候。八文字屋抑もの評判本、又は當世本の作者は、其碩と申すに紛れ無レ之候を、その儘其の作者の仕りたるふりにて新作出し候八文字屋こそ紛らはしきと申すべけれ、近ごろ傍痛い穿鑿、此方は數年お馴染の作者、御佳例の評判本、新規の作の八文字屋評判と御見まがへ不レ被レ遊、御求御覽可レ被レ下候。扱京芝居の評判は、一度づゝ座分に仕候間、御神妙に御一覽奉願上候、追付評判初り、左様に御心得被成ませう。

正徳四年正月

江じまや市郎右衛門

まことに偽らざる告白であつた。其碩は其の子に市郎右衛門の名を譲り、本屋を營ませ、八文

字屋と版權共有の出版をしようと自笑に申込んだのであるが、自笑は頑として聽かず、感情の衝突に加ふるに利害の問題を以てして、遂に此の破裂をしたのである。自笑は狼狽して之れが反駁を試みたが、更に要領を得なかつた。兩書肆は互に競つて評判記を出版し、正徳四年正月の江島屋板『役者目利講』に對して、同年二月、八文字屋にては『役者色系圖』を出し、同五年正月には江島屋板の『役者返魂香』、同月の八文字屋板『役者懷世帶』、享保元年正月の江島屋板『役者我身實』同月の八文字屋板『役者願紐解』、同二年正月の江島屋板『役者賭雙六』、同年四月の八文字屋板『野傾髮透油』、同三年正月江島屋板の『役者職敵』などが出版された。其碩が自笑に加へた打撃は重大なもので、自笑は相當な痛手を負うたのである。然し永年賣り込んだ八文字屋の信用は決して一朝にして覆滅するものではなかつた。『京攝戲作者考』に、「全體其碩が戲作の才は、自笑よりは遙に優れたる者なれども、如何せし不幸にや、其碩一作の書は、世間にもてはやされず、唯八文字屋本をのみ諸人めで翫びぬ。」とあるが如く、其碩は他の出版書肆と聯合して八文字屋に當つたけれど、八文字屋を壓するに至らず、八文字屋も立作者其碩を失つたのみならず、盛んに江島屋初め他の書肆どもに壓迫されるので、根が伶俐な自笑のこととて、遂に和議を申し入れ、兩者の扨格も次第に和ぎて、享保四年正月、兩家の相板にて『役者金化粧』を出し、目出度く手打ちをす

ることとなつた。同書の序文に云ふ、

女は己を悦ぶ者の爲に容り、思はぬものの相手には頼んでもならぬものなり。傾城買のくぜつも我が思ふものとならではせぬものぞかし。爰を以て見た時は、昨日まで譏り合うたも、互に心にかゝるから、かなはぬ筆先で負けまいといさかひしも、今日思ひ直して見れば、夕霧が口舌にひとし。去春より云ひ合うたがくしい顔を作り直し、わつさりと『金化粧』して、いつまでもかはらぬ中の相板、すり上げた額に角の立たぬやうにまん丸額の置墨の、濃い中となつたは、下地がきれぬ心の絲の、引きあうた『口三味線』の拍子にのつて、三ヶ津の役者藝評を弘め初めてより、毎年定めて御佳例となつて、世の人さまのおもて囃しにあづかる此の忝なさを思へば、そちもこちも本望の至り、随分氣をつけて評判に念をいりや、五六年も譏りつけた口故か、ちと此座の評判にも云ひたい所があるが、一不審もつてまゐらうか、ハテそりや春永に、『役者五重相傳』の、二の替りの評判で聞きもいたさう、申しもいたさう。先づ爰は今までと違うて、あらたまりぬる春のめでたさ、中直りの手初めなれば、互に機嫌ようにつこりと笑うて引幕く。

于時めでたい年のうれしい春

作者 八文舎 自笑
江島 其碩

とあり、此の書は、八文字屋八左衛門、江島屋市郎右衛門の相板になつてゐる。然し自笑の厚顔なる、『自笑樂日記』の序に、「僕若かりしより狂言綺語を草紙にあやなせること數十部」と云ひ、同じ書の跋に、「愚老若かりしより、數多の戲書を著すこと、十萬言に過ぎたり、櫻はいつも白雪と見、紅葉は常に錦の詠め、如何に珍らしからしめんとて、夏雪を降らせ、冬帷子の物好は、化物語にひとしく、綺語の中の變體、取るに足らざらんや。『樂日記』を著して、筆を止むるにつきて、はた思ひ出しぬ。昔者『禁短氣』を述べて板行し、其の後『佛原』の狂言によせて、『禁短氣』の後編を書き置きけりしが、校合疎なりしを取り出し、病中に全備ならしめ、『花月論』と題し、一年は『樂日記』を出し、一年は『花月論』を流布せよと、遺事せしめぬるも、子孫長く御最眞に預り、是れより年々我が志を繼ぎて、彫り傳ふる新板物の、いやさかえに御求め下さる、やうにと、一佛乗の因を便りに、大畧は序に記しぬれども、『樂日記』を出したる翌年、『禁短氣』の後の卷と仕立てし、『花月論』を弘めよと申し置きし仔細を、各様へ御知らせ申上度。」と云ひて、其碩の歿後なるを幸に、飽くまでも『禁短氣』其の他の諸篇を自作の如く吹聴してゐる。然し自笑の文才は固より採るに足らぬほどのもので、其碩以後は多田南嶺を八文字屋附の作者となして、相も變らず、八文舎自笑の名を以て刊行したほどであつたから、恐らく、彼自身の著述は殆んど無

かつたであらうと思はれる。

八文字屋物として知られたる浮世草紙は次の如し。

傾城色三味線

諸色見通野白内證鏡

傾城傳授紙子

愛敬昔色好

傾城禁短氣

百姓盛衰記

風流訛平家

丹波太郎物語

寛闊役者氣質

當世名代男

諸國武道容氣

傾城竈昭君

傾城連三味線

風流曲三味線

魂膽色遊懷男

傾城二挺三味線

頼朝三代鎌倉記

今川一睡記

義經風流鑑

野傾旅葛籠

手管仕様帳

世間娘氣質

野傾髮透油

武徳鎌倉舊記

傾城卯子酒

寛闊平家物語

男伊勢風流

傾城繼三味線

傾城杯軍談

西海太平記

世間息子氣質

俗諸分牀軍談

分里艶行脚

風傾性野羣談

國姓爺明朝太平記

役者不斷容氣

野傾咲分色仔

義經倭軍談

風流宇治頼政

女曾我兄弟鑑

商人職訓

互先棊盤忠信

女將門七人化粧

記録曾我女黒船

御伽平家

善惡身持扇

風流東大全

傾城歌三味線

風流友三味線

商人軍配團

解題 江島屋其碩

傾城新色三味線

花實義經記

役者色仕組

商人世帯樂

櫻曾我女時宗

晴明白狐王

大内裏大友真鳥

本朝會稽山

風流扇軍

富士淺間裾野櫻

東大全後の卷奥州軍記

楠軍法鎧櫻

高砂大島臺

三浦大助節分壽

玉椿輪廻薰物

楠三代壯士

日本契情始

千代袖算盤

風流七小町

出世握虎昔物語

頼朝鎌倉實記

開分二女櫻

契情御國歌舞伎

世間手代氣質

曦太平記

那智御山手管瀧

鬼一法眼虎の卷

梅若丸一代記

真盛曲輪錦

風流連理穗

渡世身持談義

武道近江八景

其碩置土產

御伽名代紙衣

丹波與作無間鐘

赤松圓心綠陣幕

女曾我兄弟鑑

龍都依系圖

宇治川魁對杯

名玉女舞鶴

雷神不動櫻

大系圖蝦夷嘶

今昔出世扇

曾根崎情鵲

彩色歌相撲

昔女化粧櫻

義貞艷軍記

優源平歌囊

百合稚錦島

世間長者容氣

賴政現在鶴

花色紙襲詞

契情蓬萊山

當世行次第

柿本人麿誕生記

風流俳人氣質龜友

愛護初冠女筆始

畧平家都遷

浮世親仁形質

兼好一代記

善惡兩面常磐染

武遊雙級巴

當世御伽會我

風流畧雛形

傾白ぬり團

逆澤瀉鎧鑑

刈萱二面鑑

薄雪音羽瀧

弓張月曙櫻

其碩諸國物語

賢女心化粧

自笑樂日記

盛久側柏葉

賴政軍談

花楓劔本地

道成寺岐柳

歲德五葉松

風流川中島

御伽太平記

陽炎日高川

花重連理謂其笑

歌行脚懷視

小野篁甘露雨文秀

風流庭訓往來

風流西海硯

咲分五人媳

諸商人世帶形氣

風流東海硯

忠孝壽門松

花嶽巖柳島

當流會我高名松

野原情雛形

忠盛祇園櫻

善光倭丹前

女非人綴錦

鎌倉諸藝袖日記

契情太平記

阿漕浦三巴

勸進能舞臺櫻

物部守屋錦輦

十二小町曠裳

小野篁戀釣船

教訓我儘育

夕霧有馬松

壇浦女見臺

菜花金夢合

中將姬誓絲遊

河州內助淵物語福笑

今昔九重櫻

源平浮世武壽子白清

風流菊水卷其樂齋

今昔諸國咄自樂

解題 江島屋其碩

萬福富貴自在二世自笑

加古川本艸綱目自樂

孝行娘袖日記同上

焰魔大王日記牒其風

遣放三番續二世自笑

世間旦那氣質同上

世間仲人氣質龜友

月華通鑑其風

禁短氣次編同上

當世談出家氣質二世自笑

當世銀持氣質同上

敵討會稽錦同上

世間姑氣質龜友

笑談醫者氣質同上

浮世一分五厘二世自笑

當世宗匠氣質其風

同三編同上

風流茶人氣質龜友

風流酒吹礮龜友

赤烏帽子都氣質龜友

小兒養育氣質同上

珍術罌粟散國其風

立身銀野蔓卷龜友

太平記祕說其風

八文字屋物と稱するものは、此の外にもまだ澤山ある。又此等の書は八文字屋板、江島屋板のみでなく、菊屋、谷村などの刊行したものもある。

八文字屋物に於て其碩が大立物であつたことは云ふまでもない。西鶴後に於ける最も優れた作家は實に其碩であつたのである。

八文字屋本の初期のものは、多く枕本と云へる横本であつて、傑作は此の種のものに多い。「傾城色三味線」を初頭として、いはゆる三味線物の『連三味線』『曲三味線』『二挺三味線』『繼三味線』となり、『禁短氣』に至りて、其碩の高潮を示し、自笑と分離して、氣質物となり、傳奇物となり、次第に好色物が薄らいで行つた。

其碩の觀察は深刻ではなかつたが、鋭利であり、奇抜であつた。文章も西鶴ほどの精采はよしなかつたにせよ、垢抜けがしてゐて、土臭くなく、流麗にして又洒脱を極めてゐた。彼も亦苦勞人であつただけ、萬事に透徹してゐた。西鶴後に於ける第一人者である。八文字屋物が西鶴以後に流行したのも、決して偶然でない。

其の初に於て其碩は隠れたる作家であつたが、自笑と分離後に於て、初めて其の眞價を認められた。然し其の傑作は寧ろ隠れた時代にあつた。元文元年六月歿す、年六十、其の子を其跡と稱した。

多田南嶺

其碩の後に八文字屋附の作者となつた人に多田南嶺がある。通稱兵部、名は義俊、字は公實、桂秋齋の別號がある。壺井鶴翁に従つて國學故實を學び、また半時庵淡水の門に入りて俳諧に遊

んだ。『女非人綴錦』『鎌倉諸藝袖日記』『教訓私儘育』『世間母親容氣』などは、此の人の作にかゝると云はれてゐるが、まだ此の他にもあらう。『京攝戯作者考』には、「己が才智に誇りし故か、その國學故實の書にも臆説と牽強附會あり、是れぞ英雄人を欺くなるべしとて、識者の謗を受けたり。」と非難してゐる。寛延三年九月十二日、五十三歳にて歿した。

八文字屋本を以て上方文學は一段落を告げたが、後年起つた江戸の小説に八文字屋本の影響は少なくなかつた。

傾城色三味線

枕本五冊、元祿十四年版。

京、大阪、江戸、鄙、湊の五卷に分ち、遊女の細見を附した、一篇づゝ讀切りの小話で、頗る氣の利いたものである。京は花、大阪は梅、江戸は月、鄙には伏見の撞木町、大津の柴屋町、奈良の木辻、和泉の乳守、湊には播磨の室、同國鶉野、下關の稻荷町、長崎の丸山などがある。高雄の全盛を云ふ所で、西鶴の敘事を殆んど其の儘に踏襲してゐるが如き間々無いではないが、才筆縦横にして、前後の文脈が難解なるところも西鶴に似てゐる。稻荷町に於ける安宅の狂言の作

り替へ、それよりして、常陸坊海尊(買損)の洒落となり、轉じて堰かれて逢へぬ戀の逢引に移るなど、息をもつかせぬ面白味がある。丸山の段に三十石の夜船情調を敘するくだりなど、作者の才氣は絢爛として煥發してゐる。

西鶴本の上方板は西鶴若しくは蒔繪師源三郎が挿畫を描き、江戸板は菱川師宣の筆に成つてゐるが、八文字屋本は多く西川風の畫で、西川祐信若しくは其の派の畫家の手に依りて描かれたものと覺しい。此の書の出版された元祿十四年は、祐信が二十四歳の時である。八文字屋本中、果してどれが祐信か明らかでないが、祐信以外には川島重信の描いたものが多く、川島信清もまた畫いてゐる。祐信の畫いた繪本には、『百人女郎品定』『繪本學話鑑』(文章は其碩作)『教戒女家訓』『繪本筑波山』『繪本常磐草』『繪本喩艸』『女中風俗玉鑑』『繪本美なの川』『風俗色めとき』『最明寺殿教訓百首』『繪本有磯海』『繪本つたかつら』『四季形勢歌』『繪本磯馴松』『繪本勇者鑑』『繪本浅香山』『繪本池の心』『繪本千年山』『繪本徒然草』『繪本朝日山』『繪本千代見草』『繪本和泉川』『繪本姫小松』『繪本倭比事』『女教文章鑑』『繪本大和錦』『繪本寢覺種』『繪本武者考鑑』『繪本ひめつばき』『繪本若草山』『繪本福祿壽』『繪本鶴の棲』『繪本都草紙』『繪本貝歌仙』『繪本花の鑑』『繪本十寸見鑑』『繪本武者備考』『繪本勇武鑑』『雜遊の記』『貝合の記』『繪本垣衣草』等

があり、雛形に、『西川ひな形』『雛形都風俗』がある。祐信は寶曆元年、七十四歳を以て歿した。一説には寶曆四年八十一歳にて歿したと云ふ。通稱は右京、文華堂、自得叟等の別號がある。京都に於ける鬱然たる浮世繪の大家で、其の繪本、其の挿畫本の多きは、實に他に比類稀である。其の著『繪本倭比事』第十卷に、畫法彩色法を説いた中に、『畫圖廣可盡類事』と題して、

夫れ繪圖をなすこと天地の開物としてあづからずといふ事なし、されば博く類を推し極めて偏るまじきわざなり。一品をのみ事習ひて衆類に渡らざれば、藝狭くして其の用あるべからず、いはゆる子昂が馬、補之が梅の類は皆畫工の仕業にはあらず、何れも好事の士にして我が好けるものに就いて夫れを畫き、自ら樂しむ事數年にして終に玄妙を得たり。世人其の絶妙を感じて名を後世に舉するものなり。繪を業とするもの豈一事に偏るべけんや。依つて博く物を盡して事習ふべき事なり。上古の繪多く唐畫を師とし學びぬれば、唐流に著して、其の圖する所皆聖賢又は詩人仙客のたぐひのみにして、本朝の人物は稀なり。たま／＼神像などを畫くといへども皆唐流を用ゐ、さながら唐土天竺の人倫の如し、筆法又唐に著して和人に應ぜず、かるが故にたま／＼和人形をかけるも、唐めきて精神こもらず、是れ偏なるにあらずや。此の故に其の得たるところに基きて、和流をいやしめ、圖形をなすにも唐山水唐耕作唐子遊びなど皆唐に歸して本朝を捨つ、是れ遠く他の國を信じて近き我が國を賤しむるの心ならずや。唐土日本筆法別なるにはあらずといへども、少しく違ふ所は、是れ則ち和

漢水土の異なるが故なり。本朝にも古より英士秀才なきにしもあらねど、古人其の人物を圖せざれば、世人見ることなし、此の國にして此の國の風俗を見識せば、豈樂しからざらんや。嘆息せずんばあるべからず。予専ら和畫に心を入れて畫くも此の意にして強ひて偏なるにはあらず。唐様の人物山水等は、先古の妙手より／＼繪きて缺くる事なし、和流の物はやゝ見る事稀なり。今此の書に依つて本朝の故事古今の人物及び山水草木等を摸寫して參見に備ふ。聊か闕けたるを補ふの微志ならんか。蓋し家臺を畫きて人物を其の中に書ける事も、唐土の法は人と家宅との分量大いに相違す。吾が朝の法は人形の所作思ふまゝに書きなされて、しかも家宅と人とのわりふ少しも違はず、本朝畫法の勝れたること此の類をもて量知すべし。惣べて和畫に發明したること枚擧するに違あらず、仍つて普く類に涉り一事に泥み偏るべからずとぞ。

と云へるが如き、其の見識を窺ふべきである。自笑が、作者として其碩、畫家として祐信及び其の一派を自家の藥籠中に入れたところに、其の竝々ならぬ世才が偲ばれるのである。

風流曲三味線

枕本六冊、寶永七年板。

『色三味線』以後、寶永二年に、『傾城連三味線』が刊行せられ、其の後八文字屋の浮世草紙は暫

く絶えてゐるが、寶永七年には、本書の他に、『傾城卯子酒』、『諸色野白内證鏡』、『寛闊平家物語』(一名『永代男』)、『傾城傳授紙子』が、自笑の名に於て述作刊行されてゐるが、いづれも其碩の作たることは云ふまでもない。『魂膽色遊懷男』と云へる豆男を題材としたものは寶永年間の刊行であるが、其の年月を詳かにしない。其碩の作である。一たび『色三味線』が好評を博してから、三味線と題する書の刊行せられたものは少なからず、寶永元年には風音堂作の『風流連三味線』、同五年の西澤與志作『野傾友三味線』、寶永年間の西澤朝義作『傾城伽羅三味線』があり、八文字屋本にては『傾城連三味線』、『風流曲三味線』の他に寶永年間の『傾城二挺三味線』、『傾城繼三味線』、享保十七年板の自笑其碩合作の『傾城歌三味線』、同十八年の同上合作の『風流友三味線』などがある。

寶永年間の浮世草紙作家としては、其碩の他に錦文流、西澤與志、北條團水、白梅園鷺水、森田吟夕、月尋堂、林義端、桃の林蝶麿、善教寺猿算、風音堂、市中軒、涼花堂斧麿等があつた。其のうちで最も多く著作を公にしたのは、西澤與志で、『傾城武道櫻』、『伊達髪五人男』、『野傾友三味線』、『風流三國志』、『茶傾ひそり顔』、『流御前二代男』、『衆道戀慕櫻』、『野傾百物語』、『男傾城文枕』、『傾城伽羅三味線』などは、何れも此の年間の刊行にかゝつてゐる。錦文流の『棠大門屋敷』、『風

流今兼好』、『當世乙女織』、『熊谷女編笠』、『諸士百家記』、『好色手柄咄』も、北條團水の『新武道傳來記』、『晝夜用心記』も、月尋堂の『鎌倉比事』、『子孫大黒柱』、『今様二十四孝』、『兄弟善惡事』、『武道真砂日記』も、白梅園鷺水の『御伽百物語』、『近代因果物語』、『本朝新堪忍記』、『新玉櫛笥』も、森田吟夕の『宇津山小蝶物語』も、市中軒の『美景蒔繪の松』も、善教寺猿算の『色道懺悔男』、涼花堂斧麿の『當世誰が身の上』も、忍岡やつがれの『關東名残袂』も、束の紙子の『和漢善惡男色比翼鳥』も、柳絲堂の『拾遺御伽婢子』も、風音堂の『風流連三味線』も、由之軒政房の『誰袖海』も、書方軒の『心中大鑑』も、此の年間に刊行されたものであつた。

洛西雙ヶ岡の麓に住へる歌舞伎若衆のなれの果てと云へる老爺と、同じ一軒屋を中より仕切つて、老爺とは火の取りかはしもした事のないと云ふ、これは六條三筋町の傾城の果てなる老婆とが、御室の花見に末社四五人召連れてそゞろあるきせる大盡に、過ぎし昔を語ると云ふ趣向で、女色男色取り交せての小説。二人の翁嫗まことは陰陽の神で、男女の道を守る女道衆道二つの穴神、白狐の形を顯はして梅の都へ歸つたと云ふ。

三の卷に、魔道に陥つた一代男世之助と椀久との處が現はれ、心中の腰押をせうとの事に話がまとまつて、九十に近い堅い老爺と今年やつと十四になる絲屋の小女郎とが深い仲となつて、末

には死なうとするを、心中止めの靈藥に依りて、夢の覺めた如くになつたなどの可笑味があり、到るところに才氣が迸つてゐる。

傾城歌三味線

枕本五冊。自笑其碩合作。享保十七年板。

享保四年に、自笑と其碩とが和解して、合作名で著述を公にしてからずつと後の作にかゝる。子までなしたる三國の小女郎と、「たらふくつるてんく夕は格子に松の尾の新兵衛殿」と小唄にまで歌はれた玉屋新兵衛との情事を骨子とし、三國、島原、吉原、新町の郭情調を書いたものである。同じ三味線の物のうちではずつと劣つてゐる。

傾城禁短氣

枕本六冊。正徳元年板。二世自笑が明和二年、次編三編を著はしてゐる。

其碩が得意の作で、又傑作である。佛法の談義になぞらへての命名で、萬事がお説法式に出来てゐる。第一卷に島原、吉原、新町、撞木町の遊女を主題としての小話。第二卷は、男色女色優

劣の談義雙方負けず劣らずの爭論ありて、「其の時判者姪亂居士を始め、満座一同にとつと笑ひ、前髪を切つて男色の形を失ひ、則ち女道色論に勝ちたるし、末の世まで残すべしと、男色方の負けたる者共の中間より揚屋の牀入の間の板敷を楠にいたさせ、末代までも損ぜぬやうにこしらへさせぬ。まことに女色門繁昌の浮世ぞと聞えける。」にて、女色の勝となる。第三卷は巾著山白人寺と題して、白人の内幕話。「本朝色鑑」に、

素人は妓女の種類なり、或は白人に作る、又白拍子と曰ふ。古の素人は皆舞妓なり、以て白拍子の號あり。また攝の浪花、古は風呂屋女を以て素人の如くす。故に今素人を呂州に作るも又宜なるかな。凡そ素人は京師の祇園町、先斗町、宮川町、浪花の道頓堀、蜷川にありて、東武に未だ白人あるを聞かず、餘國もまた此の稱なし。則ち無眉前帯の妓を本詰と曰ひ、有眉後帯の妓を中詰と曰ひ、振袖白齒の妓を若詰と曰ふ。蓋し素人はもと貧家の女、親族の爲に身を賣り、或は行跡正しからざるの姪婦止むを得ずして妓となるの族なり。故に古、其の容は遊女の風を習はず、地女の風俗をなすを以て專要となす。今や其の風大いに賤しく、尤も惡むべし。京師にあるを以て上品となす。味は太夫より稍劣ると雖も、佳なるもあり。風俗は太夫より大いに劣れり、言語正しからず、皆虚を以てす、行跡も又惡むべし。凡そ素人に會するの族を大臣となし、或は客と呼ぶ。客白人に會するに頗る法あり、一日或は一夜約をなす、是れを揚又は約束と曰ふ。又暫く會するを以て切買と曰ひ

或は一座買と謂ふ。大抵午より未の時に至る、是れを大早と曰ひ、未より申に至る、是れを早出と號し、申より酉の前、芝居の終時に至る、是れを晝と曰ひ、酉の前より酉の半刻に至る、是れを暮と曰ひ、酉の半刻より子に至る、是れを夜と曰ひ、子より寅に至る、是れを七と曰ひ、寅より朝に至る、是れを明と曰ひ、或は朝詰と號す。又朝詰より辰巳に至る是れを次と曰ふ。則ち晝夜の約たるや六會を以て之れを約し、夜のみ約たるや、三切を以て之れを約す。唯約に朝詰、次等を入れざるのみ。凡そ客揚屋に至り暫く素妓に會す、是れを切賣或は一座買と號す。廻男の素妓を携へ來り、歸り去つて又迎に來る、すべて是れを一座或は一切と曰ふ。迎ひ來ると雖も素妓を歸さずして留むるを、是れを詰と曰ふ。

とあるものにして、當初の白人状態は本書善く之れを詳かにしてゐる。第四卷は吉原及び大津の柴屋町、第五卷は大阪新町の水揚談義に始まつて、新造が手管の悟を開き、禿の苦患を脱して、上品女郎の松の位に上ると云ふ戀の諸分、手練手管を説いたもの。第六卷は客への談義。女郎買五重相傳と云ふ祕法から、名妓吉野の一枚起請を證據にしての癡話法問。「誠に悟れば粹、迷へば月、八萬寶藏の金を以て此の道をあきらむべし、自ら無量の手管をはかり見る、分知りとはひとりなれり、只夢の浮世に無念無想にして遊ぶ所が極樂々々。」と云ふ大悟徹底に畢つてゐるが、まことに此の書は色道學の講座である。

鎌倉諸藝袖日記

五冊、自笑其笑合作とあるが、多田南嶺の作。寛保三年板。後編として寛延三年板の『教訓私儘育』がある。

座頭の三味線、儒者の息子の色道修行、和尚の相撲、茶人の丸裸、能囃子好きが若衆から女色への移り替り、天地を無と觀じたる哲學者、坊主の破戒、狸の腕の黒焼、下帶のない劍術遣ひ、唐音好きの若者と踊や淨瑠璃に浮身をやつす老爺、下手醫者、細工の上手の自慢、山伏の墨色、すばる流繪所の捕蠅豆、連歌師の櫛商賣など、鎌倉の諸大名が頼朝の前にて滑稽の諸藝を云ひ立てると云ふ趣向。さほどに面白いものではないが、黄表紙の先驅として見るべきものである。

世閒子息氣質

五卷、其碩作。正徳五年板。

氣質物の名稱は、西鶴の『好色五人女』を、『當世女容氣』と改題したに始まつてゐる。然し其碩が自笑と離れて後、一たび此の書を述作し、其の後『寛闊役者氣質』『世閒娘氣質』『役者不斷容

氣』などを著はしてから、氣質物の全盛となり、自笑の『諸國武道容氣』、一洞の『寛濶大臣氣質』其碩の『世間手代氣質』、作者不明の『和漢遊女容氣』、自笑其碩合作の『浮世親仁形氣』、其碩の『諸商人世帯形氣』、九二軒鱗長の『和國小性氣質』、其笑瑞笑の『世間長者容氣』、升瓢の『世間旗本形氣』、永井堂龜友の『風流俳人氣質』、和澤太郎の『世間妾形氣』、無跡散人の『世間學者氣質』、龜友の『風流茶人氣質』、『當世銀持氣質』、増谷大梁、半井金陵合作の『世間化物氣質』、蛙文臺の『世間侍婢氣質』、増谷大梁の『世間傾城氣質』、龜友の『赤烏帽子都氣質』、しら山の翁の『昔私儘形氣』、龜友の『世間姑氣質』、『世間旦那氣質』、『笑談醫者氣質』、『世間仲人氣質』、半井金陵の『當世芝居氣質』、其麗の『當世宗正氣質』などが續出してゐる。流石に他の氣質本とは違つて、其碩作のものは羣を抜いて、趣向も奇抜で、文章もまた洒脱にして流麗である。第四卷第二の冒頭、「扶桑第一の大湊、人の心も大氣にして、それほどの世を渡る難波橋より、西見渡しの百景、數千軒の間丸藁をならべ、繁盛の表藏旭に映りて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豊かなる御代の例、松に音なく、千年鳥は雪に遊び、限りもなく打開き、蜆採る濱までも小借家建續き、それ／＼の家職して朝夕の煙立てける。」とあるが如きは流麗、末段、「今と云ふ今差詰り死なれぬ命是非もなく、三韓退治の花託を背中に負ひ、右の手に神代の杖をつき、左の手に銀閣寺の五器茶碗を持ちて袖乞に出でけるが、此の身に成つても古きを好む心止まず、お助けに古錢があらば一文下さりませ。」は第二卷第三の末段、「三男孫三郎は榮華の餘り、我儘に使うて遊びし人形なれば、操り芝居の間に合はず、抱へて無ければ内證のからくりの糸切れて、やう／＼に小見世物の木戸番に雇はれ、皺枯れ聲出し、さあ錢は戻りぢや、評判の三男孫三郎といふたはけものは是れぢや／＼。」と同じく、作者得意の筆法で、洒落穎脱してゐる。

浮世親仁形氣

枕本五冊、其碩自笑合作、元文元年板。

既に息子氣質あり、豈親父氣質なかるべけんやと、此に此の書は著はされた。『子息氣質』は前出の如く大阪の繁昌を説いてゐるが、此の書にも亦大阪の繁昌を述べてある。

繁昌の難波津や、入江も次第に埋れて、水車も見えずなりにき。水鳥は陸にまどひ、蜆取る濱もつまみ菜の島とは成りぬ。昔棹さして舟ならではゆかれぬ所も、瓦葺の軒高く、白壁づくりの家建てつゞき、色めきたる町も見え渡りて、流れを立つるも、古、川にてありし縁によれるにや、今に粹をはめる商賣の地とはなりける。前出の分が楷書體なれば、これは行書體とも見るべきや、とにかく其碩の文章はどこまでも垢

の抜けた洗煉したものであつた。

世閒母親容氣

五冊、南圭梅嶺(多田南嶺)作。寶曆二年板。

達筆によく書きなしてはあるが、儒者上りの南嶺とて、時々漢語を和譯したやうなところもありて、其碩に比べると、一段と劣つてゐる。第四卷第一の「母から呑込む酒屋の増殿」などは秀逸の方、『浮世親仁形氣』の第四卷第二「娘を楽しむ遊山親父」と對照すると、其のけぢめが見えて面白い。

解題終

傾城色三味線

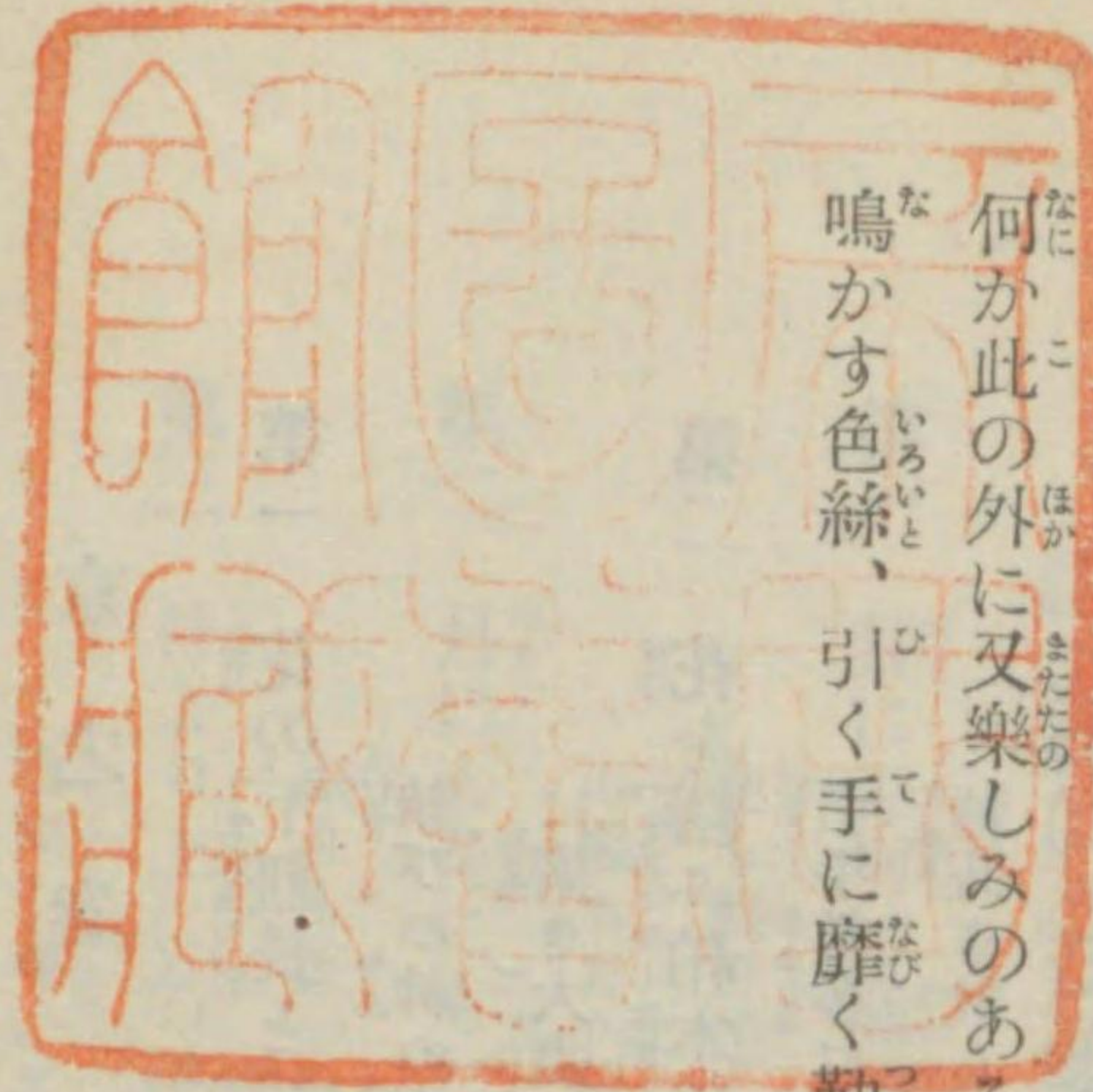
江島其積
内藤自笑

傾城色三味線序

傾城色三味線序

世に聞き馴れたる鶯の花に鳴くも、さのみ身をうつ程にも面白からず、只何時聞いても、魂にこたへて感じ参らすは、島原の投節、吉原のつきぶし、新町の籬節なり。艶顔を少し背けて、紅舌の動く有様、月雪花紅葉に代へられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは、此の分里の契縁、何か此の外に又樂しみのあるべきや。江戸の散茶に戀の寄太鼓、京の引舟、難波の鹿、歌に合はせて鳴かす色絲、引く手に靡く勤め女の、品々替りし諸分を載せて、色三味線と是れを名づけぬ。

八文字屋 自 笑



傾城色三味線序

傾城色三味線總目錄

傾城色三味線總目錄

京之卷

第一 花の下紐長と短かと

結びの神の守り女に奥州が身請の悦び、郭住居も今日ばかりは名残惜しきは朱雀の細道に廣き大盡。

第二 花を繕ふ柏木の衣紋

引手数多に流行獨樂。打つたり舞うたり太鼓女郎、引舟に乗りて沖漕いださわざ、戀の種蒔き散らす金の心中。

第三 花崎實る玉の輿

張合にかゝるわな尾を見せて夜ぬけ大盡、太鼓も鳴りをやめて刃物を鞘に収めた分別心底に曇りのない月を手池。

第四 花は散れど名は九重に残る女

戀の手習、書初ふんどし結び目の堅い男に、ついて廻る巴兄弟一所に身請の沙汰、

第五 花にも負けぬ三五の月

菊川にはまる大盡。移り替る浮世遊び見透して、粹仲間の先ぐり、しやれた月の見所、一入眺めも色深い八鹽の紅葉。

江戸之卷

第一 月にも増る高雄の紅葉

色も照り添ふ江戸酸漿、根引にして我が宿の詠め物、局狂ひは巾著の有り限、緒メの石の強ちな色好。

第二 月にも花にもたゞ濃此茶

振りも振つたり雪の肌に乗掛けてもがき、大盡戀は外になつて義理詰めの身請。

第三 月より上に名は高松

吉原の噂いざ事とはん都鳥、飛ぶより早き二挺立は色狂ひの重寶、巧んだり計案らしき大盡。

第四 月に調べる琴浦が三味

傾城色三味線總目錄

ひつかけて呑む酒の上の約束、當てにならぬ事實正明白二半な手形、色は勝山情は深き海に泳ぎかゝる大盡。

第五 月に薄雲かゝる情

身請の後の京上り、名所の數々面白い夫婦中、詠めは小倉山定家にも劣らぬ小歌知り。

大坂之卷

第一 梅も松も打交つての大寄

九軒の遊びは唐にもないくわらりとした事、神鳴りも心掛ける女郎の臍線金、胸もをどる盆前の付届け。

第二 梅よりすいた秋野が一風

楽しみは我が宿の棚探し、太夫手づから夜食の鹽梅うまい兪索。

第三 梅の花山に登り詰めたる男

半太夫は歌よまぬ小町が、佛移りにけりな、徒女の晝の牀とり揚げられて天竺浪人。

第四 梅の花笠に降りかゝる村雨

人並にない袖を古道具屋、掘出し運を開く封じ文手のよい閒夫狂ひ、戀が積つてお腹に

第五 梅に名の鳥が啼く東路の別れを

色に使はるゝ身は七重の膝を折つて、八重五霧に頼む戀、日の本に例なき唐土が心意氣。

第六 梅の匂ひ吹き渡る大橋

掛り口の大きなせんしやう者、五人一所に對の紋所付けて置く、禿が才覺太夫が付智慧。

鄙之卷

第一 女郎の心中をついて見る鐘木町

濡れ過ぎて今は竹の子笠の骨仕事、命の水をかひほす男、なき人の爲に姿は墨染の里。

第二 戀の焼きつけ柴屋町の門立ち

小唄の聲に焦るゝ女郎、魂通ふ枕元、夢中の誓紙現にも忘れぬ男。

第三 木辻鳴川に深入りする男

まだも一步の角をたふさぬ男、彈いたり諺うたり夫婦諸穆き、我が身の恥を一文づゝに賣り喰ひ。

第四 高洲ちもりに茂る戀草

扱も其の後袖崎から、やつし淨瑠璃語り出すから哀れなる太夫が内證、聞けば聞くほど遣手の種は分別もの。

湊之卷

第一 室の遊女に氣を播磨湯

女郎残らず揃うたり、座敷踊色にかゝつて、身代棒にふるうどやの延助。

第二 焼鳥にする鶉野の仕掛け

御馳走は何かなしに食責め、弾くも唄ふも上方の跡面白いは牀一ツで持った女郎。

第三 稻荷町の化を顯はす手管男

上方にない下の關の女狂言 珍らしきは髮長辨慶、目角の強き小倉の大盡。

第四 詞に角だたぬ丸山の口舌

長崎まで後家を當てに下り舟、戀に利きめの強い朝鮮人參、氣の藥を男。

傾城色三味線 京之卷

第一 花の下紐ながと短かと

身はかりもの 魂は彼の里にいたり大盡

せちべんなる心から、傾城と土風にはあはぬが祕密と、云ひ出せし者の面が見たし。物の哀れも是れよりぞ知る、戀の只中少しの内も、浮世の暇さへあらば、此の美君を眺めまるらせ、揚屋酒に氣を延ばす事、仙家の不老不死の妙藥よりは増りて、命の洗濯水遊びの上盛り、何か此の外に世界の娛しみ又有るべきや。人生七十古來稀なる世に、始末の二字に括られ、儲け溜めて使はぬ人の心が知りたし。今でも冥途から使が來れば、行かねばならぬ身を持ちながら、有る金を我が樂しみには使ひもせで、來年の何月までと切りきつて、金貸す人程大膽なる者はなし。今宵も知れぬは命なりと、一生役體もなう、身を浮雲の天水といふ男、晝酒の酔覺しに、東邊へ出かけぬるに、向うから來る男を見れば、當流の後下りの天窗はやる時、厚鬢にして、然も鬢を巻き立て、神主かとおもへば、赤地の裏を羽織につけたり、又大盡かと思れば續く幫間もなし、芝居役者には色黒し、いか様一癖ある奴と、

近寄りて見れば、是れはく、古目を掛けてとらせし、落語の話をよう夕顔の、五條邊りに住みし、表辻伊勢之助といひて、浦辻まさりと僭上いひし、安筆やの浮氣者なり。扱、「今程は何處に居るぞ。」と問へば、「筆の命毛あれば、又お目に懸る。」と、まだいひかけの口合はやまず、京も住み憂く、多くの借銭も寝て伏見の里に、今は謠の師をして、三人口ゆるりと見事な暮し。「されど此の身に成つてもまだやまぬは御存じの悪性、是れも大方ならぬ因果、鐘木町の龜屋の井筒に深き中、ちと賢覽に供へたし。自然大坂へ御下りあらば、必ず御立ち寄り待ち入るなり。扱今日の出京は、餘計のない謠を教へつくして、外百番を毎日上京まで、一番づ、ならひに參つて、又それを其の日に教ふるいそがしさ。さのみ是れは苦勞にも存せぬが、折ふしお屋敷方の御留守居より、囃子のある時分召し出さる、には困りはつるなり。拍子はいもくの拙者め、鳴物が邪魔になつて、去りとは謠ひにくし。」と云ひさして、互に大笑ひ暫くなりしが、何うやら上から聲高に、鉦太鼓をうちならし、可笑氣なる人形を作り、焼印の編笠を著せて、大勢色紙のさいを持ちて、傾城買ひを送るわ、おくるわくと、聲々にわめいて来る。「是れはしたり、昔から風の神を送るといふ事はあれど、傾城買ひを送るといふこと、未だ年代記にも見當らず、去りとは替つた思付き、いかさま謂はれあるべし。」と、後に下りしさい持つ親父に尋ねれば、「我らがあたりは近年老若共に家業に疎く、島原狂ひに賢くなつて、多くの金銀を

蒔き散らす事砂の如し、それも我が物あつてつかへばまだしもなり、三月延の借り米、返類しの借り錢、買ひ置きして賣り損の金廻し、又は家賃或は連判銀にて、紋日を勤めて、面々杉焼も鯛青鷺ならでは喰はれずと、宿では大唐米に、五斗味噌添へて食ふなりして、伽羅も鹽釜はしたるき所あつて悪しと、黒木たく身代にて、無用の贅をやつて、我が家のとりぶき屋根のさぬけを、葺き替へる力もなく、揚屋の座敷が廣うての逼うてのとのせんさく、みな氣違の沙汰なり。北郷には息子を勘當すると奪く。南郷には主人へ大分の損をかけて、今日請人へ手代を預ける相談。筋向ひには俵が傾城狂ひ故、三代續きし家を人の手に渡すと、母親涙を流し、馴染の町を立ち退かる。其の郷はよい年をして白髪抜くを仕事にして阿房を盡し、子供には古布子さへして著せずに、太夫が所へ小袖してやる目論見。やくたいなしと申さうか、あいだれといはうかと、女房臆怯を燃して、茶椀、茶釜、摺木鉢まで打ち割つての女夫喧嘩。總て町中四十二軒の内、賣家三十七軒、残り五軒も家賃に入れてあれば、是れとても我が物ならず。近所は云ひ合ひしやうに、將某倒れと云ふものに、がたひしに倒れること、皆是れ傾城狂ひより、事起れるなれば、片時も早く、此の傾城買ひの心玉を、人形に移し町送りにして、丹波越さすべし。」と、才覺なお宿老殿の仰せに従ひ、送るわくと、よい年して喚いて行くを、伊勢之介取付き、「近頃それは素人なる料簡、今時の悪性者、仕過してもいかなく、丹波越杯

することにあらす。京の者は江戸へくと下り、江戸の者は上方へ登つて、當所なしに相應に請人屋あつて、悪性者を請け込む家あれば、立身して重ねて又各の町へ、遣ひ崩しに立ち歸るまじき者でもなし。爰が大事の思案所、同じくは兩降り續く水の出ばなに、川へさらりと流したし。是れ水は川へはまるの道理なり。」と、口拍子にのつて云へば、親父横手を打つて、「智慧かな、成程其方の意見に任せ、五條の橋より下へ流すべし、何れも若い衆、是れから五條の橋へ向けて、送らるべし。」と下知すれば、伊勢之介又親父を招いて、「何と其の人形に、各家々より十二燈を一つ宛添へて、我等へ渡されまじきや、さもあらば御町へ、道切の呪ひして參らせん。」といふ。元より愚かに作つたる親父、「是れ忝し。」と、町中の若い者共を片端より、天窗割に十二文宛出させ、「子々孫々まで傾城買ひは申すに及ばず、茶屋狂ひ小宿狂ひもせぬやうに、御祈念頼む。」と、伊勢之助に人形共に渡して歸りぬ。天水我を折つて伊勢之介に向ひ、「汝それを引請けて何にかする。」といへば、「されば是れには深き存じ入りあつての事、私杯に此の人形が取りついて、お蔭で使ひくづす程の身になれば満足なり。わるい女房持ちて田舎商ひすると、獨法師の出あるきとは、留守に密夫と盗人の氣遣ひなきやうなものにて、我らに傾城買ひの生靈取付いた分では、何も遣はう種がないゆゑ、此の人形を煎じて吸うても氣遣ひなし。扱これを貰ひしは、以前私五條に借屋して居りし筋向ひに、鎌倉屋の源と申して、

江戸大坂に店あつて、手廣く商ひせし分限者ありしが、其の身若うして然も兩親なく、自由なる身を持ちながら、色事に一錢も使はず、生まれ付いて客い奴にて、じゆつながら銀共を、箱へ押し入れ押し入れ、内蔵につめるを樂しみにして、一代絹の下帯かかず、口に魚鳥の味を知らず、色狂ひする者を呆氣とぬかして、拙者が身持など見ては、己が苦にもならぬ事ぢやに、向ひの筆屋とつきあふな、あいつ今の間に身代潰す仕果なりと、物憎さうに手代共へ意見の引き事、聞く度に無念重なれども、其奴がいふに違ひもなく、二番目の手代も我らが引導にて、桔梗屋の雲井に登りつめさせ、一年経たぬ内に、親方の手前首尾にさせぬれば、いふも道理とは思ひながら、畢竟誘ふ者に科はなし、其の身器用はだにて深入りして、己と仕損ふなれば、外に憾みはない筈なるに、二日寄合ひの序に會所にて此の噂、ばつと尾ひれ付けて申せしゆゑ、律儀な家主にて、色狂ひする者は、切支丹の頭取程に恐がり、吝い心から半年餘の宿代の滞り堪忍して、宿を替へさせし恨み、偏に此の鎌倉屋の源が、頼まぬ口をききし故なれば、此の人形を彼奴が門に捨て置き、ものの見事な傾城買ひになして、身代揉み潰して見て慰まん爲に、人形を貰ひしなり。まはり遠き事ながら、是れかや厄病の神にて、敵たる思案。」と始終を語り、「只今是れから直に參る。」と、暇乞ひして立ち別れ、それより昔住み馴れし五條あたりの、彼の鎌倉屋の店へ投げ込み、跡をも見ずに伏見の里へ逃げ歸りぬ。抑此の鎌倉屋の源と

申すは、親より家藏諸道具の外に、八百貫目の譲りを請けてより以來、假にも遊樂の道に心を寄せず、世渡りに賢く、朝暮小判を溜める思案をのみめぐらし、何によらず江戸大坂にきくべき物を、見立て聞きたて、買ひ廻しよく店に下し、其の身三十一歳になるとき、二千貫目餘に元手をふやし、溜めては箱に押し入れ、釘付けにして藏につめ置き、つひに揚屋の手にも渡さず、況して野郎宿の花にもならず、一生男を持たずに朽ち果つる美なる娘の如く、よいめにもあはずに、可惜金銀埋もれるこそ悲しけれ。然るに源州ふと暮方より無常心になつて、つらく思ふに今もしれぬは人の身、何時まで慾に身をこらすべき、心に叶ふ娛しみをせんが爲に、金銀ほしき願ひなり、其の望みなくしては石瓦も同然、分別する程分もなき今までの覺悟さらりと改め、思ひきつたる色遊びして、世を心の儘にさわぐべしと、始末せし身を忘れて、俄に男作り、今までは夢に見し事もなき島原に通ひ出し、もの見事な色狂ひ、元より員數持ち餘つて、遣ひ捨つるに分別極めたる大盡、親はなし、女房持たねば子もなし、浮世は暇なり、意見すべき重手代は、近き頃頓死する、世界我が物といふ男、奥州を面白がつて、朝暮通ひしが、上京の大銀持、何程といふ銀の員數計り難しとて、途方なしといふ大盡と張り合ひ、無性に募つて、急に取り出す談合せうち、毎日〇〇〇〇〇〇〇〇をわづらひ出し、里通ひをやめて、四五日養生せし間に、はや奥州は途方なしが根から引き抜き、庭前の花とながめ、我が物に

しての樂しみ、去りとは彼奴にだしぬかれ、扱も無念々々と、切齒をして殘念がれども、今は人の物になれば是非なし、最早此の里も面白からずと、色川原の野郎遊びに、模様替ふる思案せし時、色友達の松原の闇の夜といふ、跡先しらぬ瓢箪の川流れ、浮きにくく男が、源をすゝめて、「奥州がるぬとて、外にも戀はあるもの、仕掛けし女郎狂ひをやめて、野郎狂ひにせんとは、尻も結ばぬ絲なり。針のみ、すより天覗くとは、汝が心せばしく。彼の太夫に美しさ増つて、智慧あつて功者で、一座が面白うて、まだ〇によい所があつて、古今無類の太夫色、是れに情の橋をかけて、今までの女郎と渡り比べて見よ。」といふ。「お名は。」と問へば、「露と答へてきゆる程の君、それは長門の萩焼。」「お茶の呑めるのか。」「それよくその君、すぐれて美しきに、何とて出かねけるぞ、日本國の末社、かたの如く取持ちけるに、今に此の女郎に郭の住居させ給ふは、いかなる貧乏神の仕業ぞ、汝福の神となつて根引にせよ。」といへば、「我も其の君には戀あり、成程つかんで、途方なしにも廿方にも、おそらく負けぬ名を取るべし。」と、それより又色をかへて、長門舟に乗り掛つて、留途のない大騒ぎに、年々うめきし銀箱、あけくれの付けとゞけに、いつともなう皆になつて、家藏許り残りし時、源が懐より、かの傾城買ひの生靈、楊屋酒に酔うて赤色の玉となり、晝中に飛び出で、丹波の方へ驅落しぬ。其の時源は正氣になつて、今までの遊びを夢のやうにおほえ、去りとは我ながら合點のゆかぬ事と、

内蔵へ入りて見渡せば、銀も小判もなかりけり。浦の苦屋の明箱許り二三百、鼠の下屋敷となつて、いかなく包紙も残らず、是れはと、けふもあすもさめはて、足摺して泣いても歸らず、兎角思案に落ちぬ所へ、御意に入りの末社、花笠佐七、按摩とりの道安、御見舞ひ申して、いつもの調子に、「是れ旦那、君よりの御書簡到来、さだめて身請の御事ならん、先づ是れは何としての御延引、又奥州さまのやうに、だしぬかれ給ひて、跡での御後悔見るやうな、なんと道安左様ではないか。中々あのやうな御心底の眞なる太夫様は、日本廣しと申せども、ま一人あらばいうてござれ、此の首水もたまらず進上致す。我らよい身でござれば後ともいはすに抓む事ぢやに、何とて旦那は壽命の洗濯に、日和見て御座あるぞ、早う奥様にして、お中のよいを見ましたい。」と、そやし立てて嵩高な文御前に差し置けど、源は悪性の生靈去つて、正氣最中の時なれば、太夫が文も満足がらず、苦々しき顔して道安に向ひ、「御自分には、拙者共よりはお年かさと申し、殊に御法體の御身として、日頃入魂に申し談ずる甲斐には、不行跡にもござらば、御意見でもなされて下されうこなたが、傾城白拍子等の賤しき者を請出し、婦妻に致せなどは、近頃本意を背いたおす、め、お恨みに存する。」と、常と變つた挨拶すれど、兩人の飛びあがり共まだ氣がつかず、「扱は旦那はしやれて堅い御口上。神ぞ孔子もはだし、諸客〇に入るの門に入れては、朝に曲をして夕に〇〇ますくの、御感をきかでは面白からず、いさ

お出で。」とす、むれば、大盡眼すわつて、「お身達は人を馬鹿にめさるか、神八幡堪忍ならぬというては、ま一言きかぬ男。」と、脇差取りまはすを見て兩人驚き、「こりやならずの森の郭公。」と、こくうに飛んで逃けて行きけり。其の後源は遣ひ捨てし銀のかへらぬ事を悔み、手代共をよせて勘定して見るに、現銀二千貫目、五年半にうつくしう皆になるのみならず、揚屋に五貫七百目の拂ひ残りあり、其の外伽羅屋、吳服屋、兩替屋より當座借の金銀、合三十二貫六百二十一匁三分九厘の負銀、ある物とては居宅諸道具、二十貫目が物はありなしなり。然れば是れを渡しては、手と身とにて退くといふもの、何卒家藏此の儘にて、人手に渡さず續けて行きたしと、種々分別して見れども、兎角分散にせねば濟まぬに究まる時、源智慧を出し、我を育てし乳母が亭主、南都手貝といふ所に居るを呼び寄せ、思案を申しきかせしは、「其の方年恰好人物よければ、今日より我が實の親と頼む。」とあれば、「是れは迷惑千萬。」と、疊へ天窓をすりこむ、「いや是れが身共が仕出しなり、元此の借銀色狂ひより出来し事、誰しらぬ者はなし、去るに因つて負はせ方を残らず呼びよせ、其の中にして其の方我らが親源右衛門と名乗つて、久々江戸の店に罷り在る留守の中に、倅め大分の金銀をつかひ失ひ、剩へ各方まで借り事申し、存じもよらぬ引負ひを致す事、前代未聞のたはけ者、即ち只今勘當致す。彼奴を斬りてなりとも突いてなりとも取つて給はれ、濟ますあてがあればこそ、各々よりかりも買ひもしたで

ごさらう、最早拙者も法體致し、彼奴に諸事を渡し、隠居もいたし、樂々と後生をも願はうと存じた所に、去りとはく情ない事でごさる、見れば瞋恚の炎の種ちやと、此の脇差をぬいて、我等を追ひ走らかし給ふべし。時に手代共左右より取り付き、御尤もくじまひにして此の借銀をまひ納めん。負方の中でむつかしう云はん者は、兩替屋の細かい手代共より外はなし、其の外は呉服屋、伽羅屋、色宿は今まで拂ひし尻残りなれば、勘當せらるゝ上は役にたたぬと、粹共なれば二言と云ふまじ、然らば我らは江戸店へくだり稼ぎすべし、京都は其方手代共心を合はせ、随分仕末し銀を溜めらるべし。」と、此の手にて借銀を云ひ延ばし、それより五年たつて後、大分金銀を仕出し、江戸より都へ立ち歸り、借銀残らず皆済し、二度富貴の家を榮え、鳥原より吹く風は、魚屋の南風をいやがる程に恐れ、太鼓を見ては、雷よりはおちおそれける。

第二 花を繕ふ柏木の衣紋

身を隠し物、姿は酒樽に入りまひのよい親父

昔より今は商ひがないくと、獨りして氣をやむ親父あつて、子供の行末の事まで、無用の思ひおき、是れ其の身愚かにして商賣の道に疎く、身過の種を工夫して、黄金の花さく春を、知らぬから起つての案じ過しなり。されば都の廣き事、小さい心から計り難し。頃日九州より獨樂廻しの小人登り

て、四條川原の小芝居にて、さまざまの曲獨樂を廻し、數萬の人をとつて、歴々の大芝居をすがらせけるが、尙盛んになつて町々に此の獨樂を求めて、家々に翫びし、後は隱居の親父共まで念佛講に參り、持佛堂に御明燈は點しながら、鐘木の先にて曲獨樂、それよりは叩き鉦の真中にてまふ音、其の儘蟬の聲に似て心の涼しさ、何れ餘念はなかりき。なまなか心に利慾の考へして、口にて念佛申さうよりは遙かにましと、佛も時の流行物に氣を移して、是れ許りは叱らせ給ふまじ。去る程に家々に獨樂五つ六つ、或は二十買ひ求めしを、おしならし一町に二百宛と積りて、獨樂一つ十二文宛にして、此の代二貫五百文、凡そ京中三千町にて、獨樂の錢高七千五百貫、銀に直して百五貫目餘なり。然れば商ひがないといはれぬいひ過しなり。爰に人の意見きかぬ氣の大盡あり、銀づまりにて是非なく、彼の里先づはやめ分にて、面白からぬ無色の酒香うで居らるゝ所へ、日頃お目かけらるゝ末社共四五人、飾りたてて參る。「是れは何處へ。」と問はせらるれば、「今日は東山へ獨樂の會に參る。」の由申す。「然らば下稽古に廻して見よ。」との仰せ。承つていづれも上手顔して、懐中せし獨樂取り出しやつて見れど、いかなく思ふ様に廻らず、「是れは我等が手にあはぬ。」とて、さまざま獨樂に難をつけ、地が傾いてまはぬこそ不興なれ。大盡をかくしく、「上手になりたくば、文庫持つておいでなされ、一曲一角つ、で祕傳を教ふる事ぢや。」とあれば、「然らば旦那のお手前みたし。」と申す。「それこそやす

きこと。」と、九州の子供も恥づる程に、さまざまの曲獨樂、何れも我を折り、「可惜お手が旦那にある事、既に我々があの如くまはせば、早速金になる事ぢや。」と羨む。「それは平生の所作を恨むべし。大盡は金をまいて廻す事を得給ふ、末社は廻る役目にして、遂に人を廻して見た事なし、草木心なしとは申せども、此の道理を獨樂も合點して、末社の手にあうては廻りが悪さうな、若し汝等にまはさるる獨樂ならば、よもや大盡獨樂ではあるまい。」といへば、「獨樂は根本の廻し手からが小人ぢや。」と、笑ひ立にして東山へ参りぬ。されば道々によつてさかしき世とは今なるべし。宮川町の子供屋の主、不斷常香盤もる、舞臺藝不器用で暇日の多い若衆に、枕かへし扇の曲、まるるの仇口やめて、同じ慰みならば、獨樂まはしこそ面白けれと、親方許して、黒塗の獨樂を買うてあてがひけるに、渡りに舟と悦び、其の身の腰元役をしまうて、樂屋に入りても一心不亂に獨樂を廻して慰みけるが、下地螺廻しの手利きなれば、其の格をもつて早速上手になつて、初太郎もはぢる程になりしかば、大盡の御機嫌とりに参りし役者共が噂して、若衆は曾て思ひ付きなく、獨樂の曲見ん許りに、諸方より招きて、はききの太夫子よりは、格別流行つて其の名高し。我等もさる暇の女郎に、二三度もお情にあづかりし事あり、其の恩謝に此の狼の思ひ付きをさせて、くわつと流行らし、愈人知らぬよい事に遇ふべし。」と烏帝の忠内と申す幫間が笑みを含む。是れ大きな料簡違ひなり。太夫達狼の曲見たきと

との願ひなれば、何時にても大盡點頭き、早速九州より来る根本の廻し手を金にあかして呼び寄せ、居ながら自由に見せらるれば、今から取り付いて精根盡して廻し習ふが損ぞかし。惣じて色里の事は何によらず、ひすらこけなくおほやうなるが好し。過ぎし頃まで毎年定まつて正月十六日に、人形見世出して、揚屋の門々押し分け難く、いかなる太夫も其の日の大盡の迷惑もかへりみず、我が物いらぬくせに、價に構はず、十兩二十兩が翫びを調へ、暫時の慰みに、人形屋數千兩の商ひをして悦びけるが、郭の中に世智賢き男あつて、前日に人形屋手前より多くの人形を買ひきり、郭中に店を出し一匁の物を百目というても値ざり手のない商ひ。只取りとは是れなるべし。是れ憎き仕事と其の頃の

大盡云ひ合はして、又來る春を待つて、面々手よりの人形屋を呼び寄せ、美を盡したる人形を五兩七兩宛前かたに求めおき、大盡一人に人形屋一人づ、召連れ、十六日の晝から揚屋に來りて、「太夫禿の望み次第の人形、抓み取りぢやが。」と座敷中に蒔き散らせば、金銀の箔の光り家内を照らし、錦の衣裳著そこらきらめき、紅のばつとしたる慰み、又此の外にあるべきやと騒ぎ合ひて、せちな男のまはし者の人形店には誰が一人買ふ者なく、多くの仕込み其の儘に廢りて、大分の損となつて、是れよ

り人形店飾る力もなく今十六日遊び、去りとはをかしからず。冤角色里は内につかむ心ありとも表向きはおほやうにして、大盡を登らせ、そだてて取るが肝要なり。又大盡も世智賢くまはつて、金

銀少なう出して、よい事せうと思ふ氣からは、神ぞ傾城買はる、筈はなし。それよりは諸道具の取り賣りに懸つて、掘り出して遊ぶがましなるべし。惣じて今時の悪賢き大盡、大こといふもの費えの至り、更に身の爲にも、女郎の爲にもならず。きやつに取らする物を溜めて、ひそかに太夫に遣つたがましと、ひすい料簡。こんな氣で太夫にも見事に物やる者にてなし。殊更色町は男つきにも座配にも限らず、金で萬が濟む所なれば、男作るは前方なる僉議と、木綿の仕立著物で出かけぬる人あり。此の心で太夫にあふよりは、〇〇の古きに遠慮なく、面々〇〇におもひ出さして慰むが兩爲なり。女郎狂ひといふは、男も衣裳好みして色作り、伽羅も惜しませず焼きすて、引舟に小歌望みて、それに耳も傾けず、末社相手にいたり話して、金も手づからは遣らず幫間（ばんま）に捌かせ、萬事大名氣になつてこそ、御女郎買ひの甲斐はあれ。百貫目の銀を仕末して、五年に遣うて遊ばうより、半年程に蒔き散らして、名を色里にばつと残し、しやんと早くつかひやむこそ、此の道の粹とはいはれぬ。女郎も宿も悦ばぬ小道な遊びして、隠居の婆様の芋屑揃やるやうに、まだら／＼と銀を細長う遣ふ人の心が知れたし。兎角女郎狂ひの仕末、必ず無用なり。其の銀とて残るものにはあらず、只嬉しがる物やらいでは、をかしからぬ所なり。何ほう高う登つて、位を取り給ふ歴々の太夫達でも、つまる所が金次第で廻りのよい事水車の如し。淀鯉といふ男、此の里の水を呑んで、粹ともいはれし身なりしが、今少し

の事をはしりて、桔梗屋の天職を、親方に斷りいうて年賦にしては請けられしぞ、更に可笑しかるまじき事と思へど、當所のない金遣うて、揚屋の手前不埒にしてしまふ人より遙にましと笑ひぬ。爰に信濃國の住人麻生殿の御内に、下六、藤六とて兄弟の樂助ありしが、金はありても遠國の不自由さ、遣ひすつる遊山所なくて、身を病ものに作りて、兄弟共に都に登り、四條の西に住所定め、さまざまの遊興、金有り餘りて蒔く事に苦のない大盡、わけて舍弟の藤六は産まれ付きての分知り、京著其の儘三二と替名して、柏木に比目の枕を並べ毎日の大騒ぎ、役日も常も外へやらず、前より逢ひ馴れし都男を寂しがらせける中に、半六といふ大盡久しく逢ひ馴れて、互に命きりと云ひ交し、浮氣を去つて實なる中なりしが、いつぞの頃より藤六といふ大盡に隔てられ幾日も／＼差合ひ、さう／＼借りるも品悪くて宿屋夫婦を頼み、愈暮より貰ひて藤六に負けぬ大氣を出して、萬大端に捌き、揚屋一家に満足がる物とらして滅多に募つて出で、人の嘲り世の取沙汰何とも思はず、名高い末社を數十人集め、「天職鹿戀女郎、滅多抓みに抓んで来い。」と、太夫手前の盛に一度に費えの金を撒き、夢中になつて遊ぶ所へ、紺の單物著たる六尺五六人して、一石許り入る酒樽を荷ひ来て、「是れは半様のお口に合ふ伊丹の蘭菊と申す名酒、去る方様より進上。」と臺所にどつかと降せば一家悦び、「大盡様のお蔭で結構な名酒を澤山たべん。」と皆々手をかけ座敷の真中に直し、才覺な幫間が紅裏の著物裏返して

著し、大杯を手にもち、よもつきじく萬代までの酒の大盡と狸々の足元して大盡を祝へば、半更に其の意を得ず、「まづ来た所の先はどこぢや。」といはる、時樽の内に聲あつて、「來所は氣遣ひますな、先は慥な身共ぢや。」と、内より樽の鏡取つて出でたる者をよく見れば、半が親父苦々しき顔して息子を睨み、數度の意見を尻にきかし、野郎狂ひに大分の金を費しける時勘當すべき所を、町衆の訛言故胸をさすつて堪忍すれば、又品をかへて此の里狂ひに、金をあけるやくたいなし。宿にて勘當せんと思へど、又々親類町中の扱ひ喧し、去るによつて此の所にて恥を與へ追ひ失はんと、此の頃爰に尋ね來れども、宿屋がさとくて風をくひ、つひに汝に逢はせぬ故、此の方便にて今月今日、逢ふが親子の縁の切目、未來をかけて勘當なり、手振で傾城買はれうならば、万年も爰に居て、仕度い事して遊ぶべし、揚屋の爺も金取らずに客にしやらば、それはそちの勝手次第、勘當するからは、向後いか程の出入り有つても、身共は必ず知らぬぞや。」と、跡の跡まで念を入れて、座敷を噉んで歸られる。太夫を始め座中の女郎泣き出して、譯もなう成りにける。太鼓持の中に手まりの才助といふ頓瓢者驚かず、大盡に力を付けて、「是れ旦那。男は裸百貫と申す、氣落なされな。親父様も棺桶の試みに酒桶へ入つて御座つた、追付け芽出度く御往生のするさう、去りとは爰が揚屋でなうて、寺でもあらば、一度桶に入つてござつた親父なれば、かへさぬ法ぢやと、こりや見事に生きながら土葬にする事

ぢやに、大盡のお肩が悪うて、寺でなかつた許りに、此の理窟が云はれぬ。」と、頭をかいて悔めば、何れも涙片手に笑ひ出し、是れを肴に亦酒を呑みかけ、責めては半を諫めけるに、はや宿屋にはけんを見せ、手を叩いても返事せず、茶香まうと云へば、兩の手に天目二つ持ちて來て、立ちながら差し出し、歸りさまに、蠟燭消して油火に仕替へて行く。宵からお前に罷り出で、輕薄盡して御機嫌とりし揚屋の男も、勝手から呼びもせぬに、まつかせといひ立てに這入つて後は出でず、臺所には吸物仕掛けか、つた鍋の下をひいて、女郎夫れれに呼び立てる。扱も替るは色宿の習ひ、人の情は金ある内なり、太夫身にしては悲しく、獨り跡に残り涙に沈みければ、半も口惜しさ胸に迫り、命を捨てると極めしが、太夫が同じ道にといふべき事を悲しく、兔や角思ふ中に、女郎色を見濟まし「方様は身を捨て給はん御氣色、近頃夫れは愚かなる思ひ立ち、此の儘にて無理死遊ばしては、恥の上の恥なり。子として親御の勘當受けるが世になき習ひにてもなし、我が身事は如何にしても世に名残あり、勤めはそれれに變る心なれば、何事も逢はぬ昔々、是れまでの御縁。」と立ち行く。去りとは所思違ひ、半も我を折りて、如何に傾城なればとて、今までの好情を捨て淺ましき心底、かうは有るまじき事ごと涙を溢し立ち歸り、其の夜は日比目をかけ置きし卸が方にて明かし、兔角生きては居られぬ所、とても死なうなら心底犬に劣りし太夫奴を刺し殺し、其の後潔く腹搔き破つて、未來までも

付き添ひ、此の恨みをいふべしと、覺悟を極めて身を行水にて清め、死ぬるに思ひつめて、翌日揚屋
 に行きて内儀に逢うて、「先づ親共の機嫌直るまで、江戸の手代共の方へ立ち退くなり、然れば太夫に
 又逢ふ事も稀なれば、暇の杯せん爲參つた、竊かに是れへ呼うで給はれ。」と昨日に變るあいさつ、
 慇懃に述べれば内儀も涙ながら、「去りとは御可愛しい御事、成程太夫様へもお知らせ申すべし、先づ
 先づ奥へ。」と情深う申すに付いて、これ等さへ斯く誠ある志なるに、如何なれば太夫はと、愈に
 くさも増りて、酒も胸につかへて通らず、枕引きよせ世を味氣なう寢るより外はなかりき。太夫其の
 日は風呂屋の作左方に藤六と出で合ひ、何か申し出して甚しき口舌仕出し、互にふんづ踏まれつ杯
 みぢんになつて、かん鍋に小波たつて、座敷は暴風の朝見る如く、分もなう亂髪して、太夫がいふ程
 の事みな無理にして、揚屋一家罷り出で、様々宥むれども聞かず、「冤角方様に飽きました、向後女郎
 替へてあうて給はれ。」と云ふ。そもやそも男たるもの、金でなる女に嫌はれ、何と一分立つものぞ。
 生きては居られぬ所と、藤六ははたし眼になつて立腹する。所へ遣手がまるつて、「半様御越し。」と耳
 語けば、女郎聲高に、「何の面目が有つて、心汗なう半さまには逢ひに御座つたぞ。昔の如くよい身に
 なつて御座らぬ内は、千年立つても逢はぬ太夫ぢやと申すと云うて、歸しましたも。」と、すけなく
 いひ切り、偏に狂女の如くにて、前後揃はぬ事のみ。一座不思議をなして、物慣れたる末社が罷り出

で、先づ大盡を鎮め申す。「是れにはいかさま仔細の有るべき御事、冤角太夫様思召しの一通りを、繕
 ひなしに眞直に仰せられいでは、眼前旦那が生きてござらぬ御心底に極まつたる所、此の里に女早
 はせまじ、お氣に入らぬに無理に逢はうと仰せらるゝ大盡にもあらず、只御心の底を明かして、様子
 よく旦那の一分立つやうにして、此の口舌しまひ納め給へ。さもなくては百年経つても濟まぬ事。」と
 道理を責めて申せば、「さりとはさうぢや。皆私が誤りました。藤六さま、何事も今までの好みに御堪
 忍なされて下さんせ。」と、人目も恥ぢず誠の涙を流して、暫く泣いて申されけるは、「全く藤六様に飽
 きまして申すにあらず。皆も存じの如く、兼て深う逢ひます半様と申すお敵、昨日俄に勘氣を受けさ
 せ給ひ、當座の恥辱に跡先の考へもなく、死ぬ覺悟極めさせ給ふと見しゆゑ、心に思はぬ語を申して
 水臭く思はしまし、去りとは女郎程不心底なる者はないと、おはらたつ氣に連れて身をすて給ふ覺悟
 も變り、死にさへなさらねば彼方のお爲、又私の心中なり。仔細は人の親子を見限りて勘當致すに、
 其の身を匿して此の里まで来て、勘當なさるゝ親御はなし、是れ誠の長き御勘當にあらず。我人身を
 飾る色里に来て、恥辱を與へられしは、此の以後此の里へ是れを恥ぢて、永く足踏し給はぬやうにと
 の、深き親御の御思案にて爲給ふ勘當なれば、暫く我が事を忘れ給ひ御出でなければ、追付け御機嫌
 なほるに知れた御勘氣と見ました故に、つれなう申したなれども、藤六様に今までの如く逢ひまして

は、折角私が半様へお爲に致した不心中が、誠の不心中となるが悲しさに、女郎替へて逢うて下さんせとは申しました。其の所思は、此方様と云ふ幅のある男があるゆゑ、今まで深い半様を見捨てたと世間の人にいはれては、此の云ひ譯成り難し。誠我が身事不便と思召し下されなば、半様御勘氣免され給ひ、昔の如くならせられての上に、御心變らずば今までの如く御不便加へられ下さるべし。此の後變らぬ心底は、毎月文して申し上げべし。御見に入る事今暫しの間遠慮致したし。」と、涙玉をなして語り給へば大盡苦い顔して、「それでは半への心中には成り申さうが、更に身共へのお心入れはないと云ふもの。」と急き心にて言はるれば、「さう思召すも理ながら、世上にて不心中者と我が事悪しく評判致さば、逢うて御座る此方様までが御心ようは御座るまい。但し御念比なざる、太夫が不心中なといはれても苦しうないか、夫れでは御一分弱し。」とあれば、一座是れは尤もと心入れを感じぬ。時にねどひの又右衛門といふ、物事念を入れる素人末社進み出で、「叔太太様には、親の勘當するに、許す勘當許さぬ勘當といふ脈味、何うして御存じ。」と云ふ。「さて親が子に勘當するに所を見立ててすべきや、其の儘お主の内にて何と様にも竊かに勘當の成され様有るべきに、お年寄られて身を酒樽の中に匿し、窮屈な目をして此の里までござつて、大勢の付合ひの中で勘當なさるゝは懲らしとより外見え、夫れも半様が主人懸りにて此の首尾なれば、親方腹立の上にて、責めての腹いせに斯く有るべ

き事にもあらず、左ある時には此方から、半様を進めましてなりとも一所に死なねばならぬ場なり。是れは重ねて立身の當てなし。半様はさにあらず、御親子の中と云ひ殊に御一子と聞けば、暫く此の里遠ざかり給へば追付け昔に歸り給ふ御身なる故なれば、態と今日もつれなう申して逢はで歸しましたも、彼方に氣を持たしまして、無理死なされぬ様に、又此の里を見限り重ねて逢ひに格子へも御座らぬ様に、愛想もなう申しましたは皆彼方のお爲なれど、さぞや今は恨みに思召さん。」と、其の日は一日泣いて暮されける。是等を誠の心中とやいはん。半は此の心底を知らず、落ちたと見て逢はぬと心得、兎角遊女程水臭き者はなし、斯く不所存なる賣女めに浮々と心を盡す所にあらず、さうした冷き女と死しては跡々までの笑ひ艸。此の里通ひも今日限りと、我と合點の仕時遅けれど今は早取り返しもならず、廣き都に身の匿し所もなく、久離切られて便りなき身の悲しさの儘、科なき一門を恨み何も知らぬ町の宿老を譏り、振舞の時大きな焼物据るのがなうて、詫び言して呉れうともせいで去りとは氣の付かぬと、無理な事獨り腹を立てて、歸らぬ昔の奢りの戀風に吹き上げられて、天竺浪人と成る淺ましき今日の日も、早吳竹の伏見の里に、或人悪所の出合ひに、頼もしき言葉を残されけるを便りに尋ね行き、漸う其の處に嘆きいうて頼めば、主見捨てず表の借屋を明けさせ、「先づ取敢へず此の所に身を置き給へ。」と愚かならぬ接待嬉しく、半年餘りも爰に暮せしが、此の門前は大坂街道にし

て往來の人絶えず。或日表の店に出でて通りの旅人を見れば、町入らしき者四五人連れ立ち、「兔角あなたのござる所は、新町近くか道頓堀邊にて有るべし、先づ此の二所を第一に尋ねん。」といふ聲聞けば、皆手代共なり。「是れはしたり何處へ行くぞ。」と、懐しさに思はぬ涙を漏らせば、「お悦び遊ばしませ、大旦那の歸依僧淨土寺の和尚様、色々御詫び遊ばされ、頃日御勘氣を許さるゝに極まつて、諸方へ人を差遣はされ御尋ね遊ばし、我々も大坂へ御迎ひにまゐる所に、幸ひ爰でお目にかゝる事、私共が仕合。」と悦ぶ事限りなく、主にも一禮のべ、半を駕籠に乗せ申し、都の住所の御供申せば、親父の機嫌母の悦び、親類家來出入人まで、祝ひの酒盛賑ひ、夫れより親父は萬事を半に渡して、岡崎に隠居し給ひ、思ふ儘なる仕合、聞くとひとしく藤六尋ね來りて、對面し、「太夫が辛き詞も、今此の時を未然に知つての事なり。」と、具に語り、叔其の後は二人連れにて、同じ太夫に枕を並べながら、下卑て首尾する譯もなく、味な事どもばかり、前代未聞の傾城買ひと、世上に是れ沙汰、事知りとは是れなるべし。

第三 花崎實のる玉の輿

身は捨て物命は無しに打ちつけた太鼓持

五體は違ひなくて、人程變れる物なし、前生にて善き種蒔き置きけるにぞ、たとへば忍び駕籠に乗る人のあるに、まはす人あり。金銀も死すれば瓦石の如くなるが、生ある内は、是れに増れる重寶なり。殊更色里は員數にて派のきく事、一入大盡の威勢も飛ぶ鳥仲間とて、上京に卸こあけの者はや使ひ、江戸に二挺立の小舟、大坂に浮世小路の惡所駕籠、此の如く道の急がるゝ者を拵へ置きぬ。昔は何の書にもない事、今の世の自由さ、次第に人賢う成りて萬に氣をつけ、かかる事まで巧み出せり。とてもものに、雷を地の底でぐわらつかせ、地震を天へ宿替させ、物前借錢乞ひの方から出違ふやうにさせば、世界になにか思ふ事あるまじと、花の都にも大晦日に留守遣ふ太鼓持、風俗恰好願西に似たとて、念西彌七と云ふ素人末社ありけり。折節吾妻の大盡始めて上方見物に上られしを幸ひと取付き、「名所古蹟はお下りしなにも見らるゝ事、先づ女郎の美しい島原といふ色所を御覽じませ。」と、仲間の可笑しき男共七八人招き、まんまと色に赴かせ、何れも伽羅を磨きて、大門口より入り込み、萬嵩高に、氣の取り上る春なれや、陽氣な男共わやくといひて、丸屋が方に押し込み、諸事彌七が承つて、幅廣にしこなし、随分粹自慢して、揚屋へ内證申すは、「先づ金銀蒔に許り態々御上京の大盡、お國にては金も瓦も同じ事、兔角人に物遣らねば氣色の惡うなる旦那なり。叔此の里へは今日が始めての御出でなれば、誰方なりとも御意に入りたる女郎様あれば、おつとつて當年中は揚げ詰めになさるゝ事なり。兔角今も云ふ通り、此の度初上りにて、諸分未熟なお客なれば素い事共あるべし。」

必ず笑はぬ様に、上する女共にもよく云ひ付けらるべし。お金の蒔き時分おそくば、我等まで差し込み給ふ可し。八幡其處等は抜からぬ男、壹歩というた初心な事、頭から小判の花を降らす事ぢやが。」と亭主が悦ぶ上を云へば、「萬事は貴公を頼み奉る。」と、疊へ頭を植ゑて悦び、「扱女郎様は何れにか。」とお伺ひ申せば、大盡仰せらるゝは、「今も彌七がいふが如く、遠國者なれば、重ねて上るもしれ難し。只國方の話の種に、此の所の御太夫様に逢はして。」とあれば、「先づは夕霧さま、柏木さま、長門さま、さんごさま、花崎さま、惣じて斯様の太夫様達、俄にはなりがたし。」と申す。「如何にもさこそ有るべし、併し汝が働きにて、貰ふとやらは成るまいか。先づ是れまで見事な智慧を出し、何卒才覺致すべし。」と、小判一兩投げ出さるれば、「去りとは旦那は京にも稀なお粹さま、どなたなりとも命にかけてもらうて見ません。」と罷り立ち、暫くあつて、「先づ以て大盡様の御仕合、拙者が満足は、花崎様今日は一文字屋方に御座りますが、只今御内證聞かしましたに、ちと様子ござりまして、貰ひがなりさうな。」と申す。「やれ夫れこそ取り遁すな、人橋かけよ。」といらち給へば、畏まつて追々人を遣はし、愈ござるになつて來た、是れありがたの影向やと、一座勇みて待つ所へ、御機嫌よく太夫様入らせられ、のつしりと座に付き給へば、鼻出でて御引合はせ申し、夫れより酒面白くなつて、「押へたしもせい、しめた間、合點か彌左衛門、心得たんほ、嫁菜交りの軽い吸物、春めいて吞めるわ。」

と、無性に呑んで、片端から行きつくを、直にと牀へ片付け、大盡も寢所へ入らせられ、太夫としめやかなる物語、初會のしこなし、此の里の目口かわきのそれしやも、我を折る程の牀の首尾にて、諸事を捨てて此の君ならではと、大方ならぬ打ち込みやう。明日から當月中まで外へ約束無用と亭主に仰せ付けらるれば、「明日明後日は京の大盡様、即ち此所にてのお約束。」と申す。「然らば明々後日から必ず晦日まで堅く極め置くべし。」とあれば、「其の段は明日京のお客様に尋ねましてから、お返事申上ぐべし。」といふ。時に大盡むつとしたる顔にて、「扱は身を田舎者ののび助と思ひ、張合ひをかけ、きしますると見えたり、愛宕、白山、出やうが悪いと聞かぬ氣な男。」と、六ヶしき顔付き。「成程御尤もながら、明日のお客は兒玉黨の何某、立賣の玉中様とて、太夫様とは深い御馴染、此の里に匿れもなき御方、あすの御きけん次第で、當年中もその儘と仰せ出さるゝ事あれば、あなたの御意聞かずにはお約束なり難し。何卒其の日の首尾次第に、又今日の様に貰ひまして進ぜません。」といふ。「いや〜金銀出しながら恩に著て、貰ふなどといふ事、大きにいやなる穿鑿。第一其の男め、戀知らずめな、金銀の威光に任せ、外の戀をさきて、郭に置きながら餘の人の自由になさせず、幅なき大盡共の胸を焦させる段、戀は互といふ事知らぬ癖物に、鼻あかせて、一代思ひをかけて後悔させん。さあ此の智慧出して見よ。」と七八人の太鼓共を近くへ寄せて仰せらるれば、「いづれも爰に一思案。」と宵の酒の醒め

る程案ずるに、「兔角太夫様を引き抜き給ふより外はなし。」と口を揃へて申し上げる。「成程々々、我等が思案も夫れに極め置くべし。」と少しの事に氣を持ちて、ぼつとしたる穿鑿、女郎も夫れ程に満足がらぬ事に、八百五拾兩の内證約束、享主落付く爲とて、紙入に有合はせの小判渡して、再び歸らぬ金子、「残り四五日に才覺して指越すべし、今少しの事にて、跡々にてさもしき噂もいやなれば、此の上二百兩三百兩、餘計の入分は苦しからず、萬事分けあしからぬ様に頼む。」と大場に出でて、扱太夫置所は、樵木町の伊與やうら座敷と極めて、「お内儀、木屋町の家見に何を以て御座るぞ、芝居がてら朝とくより御出でを待つなり、恐らく日本廣しと雖も、初會から受け出すといふこと、我ならでは有るまいが。」と、いづれもよい機嫌で笑ひ立てにして歸りぬ。翌日玉中爰に來りて、様子を聞くより胸塞がり、「去りとは無念千萬、兼て我受出す所存なりしが、今少し心得かぬる所あつて、その心底を見届けるまでと延引して、今の後悔、太夫と我が中、凡そ西三十三ヶ國には誰知らぬ者も無きに、今外の手に渡しては、此の里知りの男共に後指さるゝ所、生きてはゐられぬ首尾、死しては猶又此の上の恥辱。」と大方は亂氣の如く狂はれしを、享主を始め末社ども取付き止めて、「昔より身請けに貰ひといふはなき事ながら、是れ許りにはどうぞ貰ひがなりさうな所あり。」と享主申し出すに力を得、「金銀づくでなる事ならば、郭中に金をしくべし、随分智慧を出せ。」とあつて、當座に見事な御事。「兔角

斯様な事にせいたは悪し。」と、仔細らしく鎮めて申せば、「尤も慥に請けるとの約束ながら、此の容始めてなれば、あながちなづみて引き抜かるゝとも見えず、酒機嫌に少しの事に氣を持ち、せんしやう一遍に請けらるゝ様子なれば、何卒手を入れ、かの大盡の膝元去らずの、彌七と申す太鼓に、内證かからお頼みあらば、十に五つ旦那のお手に入る様に、成るまい者でなし。」と申せば、大盡喜悅あつて、是れは責めても手が、りのある相談、どうぞその彌七に吞込ませやうの才覺あるべき事。」とあれば、「愚かや旦那、其邊は小判で面張るなり。殊に此の者今居る夷川の借宅、居なりに貰ひたきよし、家代二貫七百目の願ひ、頃日大盡へ訴訟の最中、是れさへ遣はさるれば、自身胸をさいて、生肝にても指し上げるは慥な事。」と申し、「夫れは何より易き事、兔角は彼奴に片時も早く逢うて、先様の所存聞きたし。」と、談合半ばへ彌七、次の座敷へ參つて、何か内儀と密かに内談する體、「愈極めに參つた者であるべし、爰こそ件の家買ふ代金。」「皆までいふな、五十兩の小判に寢刃合はせて待つてゐる、早く連れて參れ。」の御意、畏まつて次に立ちて、彌七に逢ふより早く機嫌取り顔にて、「こりや世界の仕合男、家でか金でか望み次第に貴殿が心任せの春ぢや。」と、滅多に登すれば、「さういふ主人が機嫌程迷惑な、兔角口先ではいひ抜けのやうにて一分よわし。斷りは是れなり、何事もこの心底にめんじて、堪忍してくれ。」と、兩肌ぬけば下に經帷子を著し、左の手に珠數を持ち、右の手にて脇差抜く

時、亭主肝を潰して、やにはに取り付き、先づ様子を問へば、「死んで跡で知れる事。」と語らず、冤や角いふ聲に驚き、奥より大盡を始め末社残らず驅け出で、何がなしに先づ脇差を引き取り、「冤角様子を語りての上、冤も角も汝心任せ。」といふ。「然らば仔細を語るべし、昨日供して参りし東の大盡、太夫様を請け出すに極めて歸りしゆる、愈堅めに、只今知恩院門前の旅宿へ参りしに、朝未明に宿をあけて、釜の下の塵も灰もないやうに仕舞うて立ち退きける、左様の大筈者とも知らず、眞實と思ひ入れ、諸事を高高に捌き、各々を我等がちよろまかしたと思はる、手前、如何にしても面目なし。とかくは死んで、我等ぐるみに、欺されたる所を、お目にかけてん。」と、涙を流して申す。各横手を打つて、「これは格別なる首尾、玉中さまのお爲には、またなきお仕合、去りとは彌七いひ出しやうが早し、今少し待ちて、あなたの事を聞きてから覺悟極めれば、兼ての願ひの夷川の家が手に入るものを冤角果報のない曾我耳ぢや。」と、大盡の思召しいれ残らず話せば、彌七死ぬるを止めて、「扱も残念千萬、此方から詫口云はずに、あなたから言はせませす事ぢやに。」と、大笑ひになつて、愈太夫の身請に究まり、千兩の光郭に輝き、榮花の花崎威勢の盛り、幾千代かけて御中よく、太夫さまは九十九まで、相生の松風、小歌の聲で楽しむ。

第四 花は散れど名は九重に残る女

身は賣物心は自由自在にならぬ天神

世に親仁と名さへ付けば、我人恐れて、仕掛けし色話を止めて、當年は麥がようござるのと、手の裏をかへすやうに、話も一調子低うなつて、一座俄にめいること、親仁身にしては迷惑千萬、親仁とても人間の種にあらずや、本悪性人が年のよりたるのが、皆親仁といふ怖きものになれば、あながち滅多に怖がらうものでもなしと、後家おやにかつて、我儘に育ちたる男が、世間に厳しき親仁のある事を知らず申し出せど、恐い親仁は當世の浮氣男とは、格別仕込の違ひし者なり。第一若い時から身過を大事にかけて、かせぐ事には夜を寝ず、氣根つよう勤めて来た目で、今時帳合しさして、遊ぶ事に夜を寝ぬ息子共を見合はせては氣に入らぬが道理なり。昔とても色遊びのないではなけれど、金の使ひ様格別なり。先づ親より譲られし銀など、仇に遣ふ事に非ず。商事に自然の仕合よく、思ひの外に利徳を得し時、まづ冥加の爲とて、お伊勢様へお初尾銀十二匁りと掛けて退けておき、叔旦那寺へ盆正月の禮のほかに、未だ遠き母の三十三年忌の布施まで包み、其の上に今年四ツになる乙娘が、嫁入りする時の心當てに、長持をあつらへ、水風呂より湯風呂が徳なれど、拵へる事を造作に思ひ、四五年も案ぜしに、是れ幸ひとして仕舞ひ、こんな仕合一代のうちに再々はなき金儲けなれば、思ひ切つて、鹿戀女郎只一つ買うて見んと、遣ひ残りし五十匁餘りの銀の内から、随分つきの悪きを

選り出し、十八匁に少し軽うかけて、獨り行くも寂しく、幸ひ參宮せし時分、留守見舞に肴くれられし返禮に、向ひの四郎左を招き、揚屋の夕飯振舞ひませうと、雨の降らぬ日朝とく起きて、朝飯さし急いで、はやり芝居見物に行くにもはやき時分、揚屋に行きて遊びしが、今時の若いものは、此處から彼處の一跨ぎある島原へ、駕籠に乗つて行くけな。あ、勿體ない事許りと、輪數珠繰りく、昔を語らる、年寄あり。されば一切の親仁、皆斯くの如く物堅きかと思へば、去りとは世界は廣し。東の洞院に隠れもなき鱗形屋の徳政とて、有徳なる禪門ありしが、六十已後唐物のあがりを受けて、俄に樂しくなり、それよりいよく借シ銀が働き、内藏にもあまりけるが、若き時より秤目をせりて、朝くれ渡世に油断なく、而も下戸なれば、浮世の樂しみ絶えて、やくたいもない年月を送られしが、ものには時節あつて、此の禪門七十と申す春の頃より、島原狂ひを志し、夢の如く氣を浮かして、頭から一文字屋の名高い太夫になつて、其の頃の至り末社を召しつれ、毎日通はれける。是れかや日暮れて道を急ぐに似たり。撞木杖ついて牀入せられしが、腰は反橋の如く誠の事は思ひもよらず、足の延び屈みさへなりがたくて、齒もないはぐきをくひしぱり、身をもやして無念がり、我せめて二十年前に此の里狂ひの志あらば、仕度い事をして樂しむべきに、今となつて口惜しや、兎角向後牀を止めて、名に聞きし太夫天神を殘らず招き、太鼓におもしろい酒を吞ませて、金に飽かして騒いで

遊ばんと覺悟究めて、人のほしがる物懷より取り出し、出る程の者に五兩七兩づゝ取らされければいづれも悦び、是れは親仁さまに死花がさくと勇みける。其れより次第に粹になつて、一座の酒ぶり味をやられ、輕忽の落話も仕覚え、仕掛の諺を見出し、七十に及んで譯知りといはるゝは誠におんざの初物なり。或時出入の素人末社を召され、「我若く盛んにし、女郎に鉢巻もさする程に勢ひの強き時は、揚屋の小杯をだに手に取らず、さもしくも、金銀溜める事に可惜月日をおくり、今樂しみ至極の色遊びに、肝腎の分の立たぬ時に至つて、此の志の出來し事、返すくも殘念なり。然れば色狂ひの盛りといふは、二十二三より三十五六までなれば、倅政右衛門にも今〇〇〇〇〇〇〇〇、色遊びをさして、人間に生まれし甲斐を知らすべし。是れが眞の親の慈悲なり。汝等依つて此の道を勧め、人にも大盡といはする程の粹にして得させよ。金銀は息子が心當てに、内藏一ツ手を付けずのけて置きたれば、かならず始末せずに、ばつとした騒ぎ致す可し。穢なびれた差配して、親の名までを下すな。女郎は大坂やの若むらか、みやまぢ好かるべし。」と、物馴れたる末社三人御子息に付けられ、親仁金本しての女郎狂ひ、神代此のかたない事と、藏の鑑まゝならぬ息子共が、咽喉を鳴らして羨みけるも道理ぞかし。此の息子當年二十八になつて、器量よく、姿は當世男に生まれ付きけれども、正直にて、諛付くすべをしらず、律儀千萬にして物堅く、我が妻の外には、女の肌といふものをしらず、

姨のもとより給はりし、桃色にそめし株染のふんどしを今にかきて、後生大事と構へたる男なれば、
 末社共が勧め、更に耳に聞きいれねば、禪門氣の毒がられ、冤角當流の末社は、物がたき風にはあは
 ぬ筈と、日頃息子が念頃ねんころに語る、我より下めな友達二三人に大畧を語りて頼み、不食な病人に粥を進
 めるやうに、いろくくと賺し、一つは親仁の氣休めなれば、親孝行と思ひ、永うとはいふまい、責め
 て今年中女郎狂ぢやうきやうひをしてたもれと、やうくと合點させ、痛いものにさはるやうにして、島原に伴ひ
 行き、揚屋へも親仁から此の内證申しつかはされ、常の客とは變り、諸事物堅うしかけ、何卒其の里
 飽かぬやうにしてくれとお頼み、夫れ畏まつて、物に心得たる揚屋の亭主、下袴著し表まで迎ひ
 に出で、座敷に通しまし、「見苦しき所へ忝きお出で。」と、時の旦那の氣に入るやうに、慇懃に手を
 ついて申せば息子大盡、作り付けの人形のやうに畏まり、「私事は東洞院通りに罷り在る、鱗形屋
 の政右衛門と申す者でござる。扱是れなるは同町橘屋、道西老の借屋に居られます、請酒屋の五郎
 兵衛殿と申し、又それなるは、數珠屋の喜助殿とて誓願寺前の人、爰こゝには私南郷に突米屋の茂平次殿
 とて、ほこり商賣でござれども、七人口ゆるりとの暮し。」と、微塵匿さず有りの儘に引き合はせば、
 三人の連は汗をかいで、「さあく酒にせまいか。」と紛らかせば、亭主可笑しさを胸に納めて、「是れは
 詳しいお引合、近頃よい御近付を求めました。」と、臍の緒きつて遂に申さぬ挨拶すれば、「自然町筋へ

御出での折から、驟雨には何時なりとも、下駄、傘の御用には立ちませう。」と、物堅き口上すんで
 扱女郎さまは一文字屋の天職、ともゑといふ若女郎に内證申して、内儀つれまして出でられ、近付に
 致され、それから杯事始まつて、座中酒機嫌にもんさく盡して高笑ひすれど、大盡は膝も直さず、
 杯手前へ來る時は、手習寺でならうた通り、念いれていたゞき、大事にかけて雫も酒をこぼさず、
 一滴七十五粒が所と、過ぎてもあけるといふ事なく、さされた方へ屹度戻し、其の度毎に肴をはさみ
 其の箸を我も戴いて下におき、さまゝ可ぞ笑しき身振、一座堪忍し兼ねて、「こりやならぬわ。」とわら
 ひ出せば、わが事ともしらず、おなじ様に大笑ひ、亭主夫婦も我を折り、「天地開けて、揚屋といふも
 のはじまつてより此のかた、かやうの珍らしきお客はなし。親仁さまとは格別世界。」と申しあへり。
 さて膳出づれば、座のせんぎ暫時して、各膳に向へば、大盡亭主に丁寧なる時宜をのべ、一獻過ぎ
 て、焼鳥蒲鉾を、上する女が見ぬ内に、鼻紙だして手ばしかく包み、袂に入れる時、三人の連興を醒
 して、「冤角此の世の人ではなし、長居する程恥のかきあき。」と牀にも入らずつれ歸りし。世にはかか
 る息子もあれば、世界の事一概にはいひ難し。或時越後の半九と云ふ大盡の元より、澀紙包一つ、職
 人らしき若い男が、あけやへ持參して、「御亭主に直に渡し度い。」と申す。主罷り出で請け取り、「御
 大儀に忝し、御茶でもまるつて休んでござれ。」と云へば、「まづそれをあけて見て下され。」といふ。

事は、今に我人申し出して惜しみ侍る。あゝ夢ぢやものく。

第五 花にも負けぬ三五の月

身は病の入物願ひは先の見えぬ目病みの地藏

秋の夜の長きに退屈するとは、色狂ひせず背から寝る、しはい奴が申せし事なり。千夜を一夜にくり合ひて、其の上に閏月までこめて、晝のない國に生まれても、色さへあれば夜にあくといふ事のない、遊び好きの末社共二三人、御目かけらるゝ大盡、御親類の中に不祝儀な事あつて、一兩日かの里御遠慮につき、不思議に昨日今日揚屋の疊を踏まず、今宵も又無色にて、我が宿での夜の永さ、近頃草臥れ判官靜平入、片岡彌市、伊勢の三ふなど、寂しさに打ちより、今まで見つ合せし色里の噂を仕盡して、是れより末の世の色里のこと推量して見るに、次第に濡れて變つた事のみあるべし。既に今さへ常なる事を、何によらず古しとして用るす、名の木も鼻に付くとて焼物を留めるなど、香りのよきにはあらねど、變つた事をしやれたというて悦ぶ人心なれば、蕎麥切を酢で、温飩を茶で食ふなど味にやる許りにして、手重き事をやめて、萬事を軽く小切目にして、繕ひなくしらづくにしてすぐばけな事のみ多かるべし。然れば女郎狂ひをして、一座が面白いの、器量がよいの、意氣が悪いのといへど極まる所は○の事一つなり。そればかりに一夜の夢に、七十六匁の銀を出せば、是れ第一

の遊興と、大盡御出で其の儘揚屋の亭主が挨拶もせず、先づ牀とつて寢さし、女郎が親方の手前にて、伽羅とめて来るやいなや、直に○に入りて、萬事を仕舞ひて扱○から出たの酒事、是れは今に替らず。面白く呑んで、夕飯にもせよ、夜食にもせよ、喰ひ立ちにして大盡は歸らるべし。女郎も今まで様々の衣裳仕盡し、風俗も袖下の小さい時もあり、寛りとする今もありて、色々に變れば、此の後の物數寄洒落て、髪はかはらず島田にして、平髻に金唐かみをたゝみ、衣裳もくわらりと雷小紋などつけて、廣袖ゆたかに、反古染の上下を著て、素足に沓はいて道中せらるべし。二布は紋紗にして、立居に白く清らなる肌すき通つて、かんじんの所に生ゆる○を、首筋より大事にかけて抜き揃へ、むつくりとした、しゝおきの所へ金箔を押して、○○には勻ひの玉を入れて、一節ぎりの中を掃除するやうに、切々出し入れをして、今までの如く裾に伽羅もとめられまじ。扱状文にも御身のいたはり頼みますなど、舌甘い事はかかれまじ。増して昨日は逢ひましてなどは管なり。あたまから、御歸りの後はとじてかくしてと、其の品をかかるべし。御内の御首尾如何、聞きましたう存じまらするは、千年過ぎてやめられまじ。去りとは是れ許りは氣づかひし給ふが諺で有るまじと、大盡も誠にうけらるゝ事なり。首尾そこねては、現在商ひ旦那を取り失はるゝが實正なれば、傾城買ひの本阿彌に見せても、是れは眞に極む可し。さて物前にやらるゝ文は、成程嵩低にして、封じたる上に此

ば、宿屋夫婦遣手のはつとも、早敵に先をこされ、心にこめし願ひ事の裏をかかれて、呆れて言ひ寄るべき手掛りなさに、「江戸へお下りなさりませうば、太夫様へ嘸置土産がうなつた事でござりませう。」と、いひか、れば、「饒別見まして、其の上の事。」ときよろりとした顔。客でなくば、面へ水がかけたい程に、先ぐり許りに智慧が走りて、本大盡の心の廣きが、次第に少なくなるべし。是れからは我々が商賣とても心元なし、今までの調子に味な手付きして、これ旦那許りいうて、杯の合したり、輕口いふ分では、よもやつれまじ、算用もしたり、目安もかいたり、少し針もたて習ひ、按摩もとつて小料理もきき、小刀細工も得て、大盡牀に入りてござる内に、桃の核にて猿を作つて御目につけて、竹の切にて耳かき拵へ、當座の御用にたてるやうな、かりそめのことに、爲になる事せずしては、太鼓にはつれまじ。かうよつた三人の中、何れも無藝にして、何の取得なく、只酒を呑むと、遊ぶ事に退屈せぬと、物貰ふ事と、かるた業に目がひかると、大盡の不便がらるゝ女郎を、透を見て横を致したがる時、酔うて刃物三味線すると、精進料理が嫌ひと、無事で済んだ事を引きおこして腰もつと、人の嫌がる程の事は好物の男共、思ひ續ける程、此の後の事心元なし。今までの如く、よい大盡がかゝらぬとて、此の身が餘の商ひ物の様に、芝居通に、二十軒茶屋の門口に見世だしもならず、盆でもなにいに、太鼓持はくと、揚屋町の飯時心掛けて賣りにも廻られまじ。まだまだ温まりの有るうらに、貰

ひおきし羽織の一つも、しまつせよといふ、近頃めいりし兪索、太鼓持と金山にかゝる者と、芝居の銀親する者とは、氣をなしてはならぬ商賣。世界に世智賢い、始末大盡許りもあるまじ。昨日伊勢の三大盡の御供して、大和屋の替り狂言見に行きしが、提重申し付けに四條の鯛屋へ立ちより、品々申し渡して門口出づる時、新在家の髻の喜八に行き合ひ、「是れは久しや何處へ行く。」と問へば、「大盡の仰せ付けにて、目病の地藏へ百日の徒足参りする。」といふ。「さてはさんご様の御敵か、慥に此の願成就なり、かく鯛やの門口で逢うたからは、目の好いは知れた事ぢや。」といへば、「近頃満足。此の太夫様を、又出来まじき上作物、ぬり砥にかけても、微塵疵けのない生まれ付き、さのみ酒事に上手をも出し給はず、詞に數なくして、只何となく機嫌よく、角々まで氣もつけられず、如何にしても一座の大様なる所、假令縞の木綿布子著せましても、誰が目にも太夫様と見ゆる、女郎は此の君ぞかし。あはれ人の目がお役に立つ者ならば、我らが兩眼攫み出して、太夫さまの御目御養生なさる、聞掛けがへに進じまして、大盡お手前から眼代として、二百ばい程申しうけ、東寺あたりによい田地求めて、物前しらずに、大晦日の闇も盲目蛇におちず、杖一本で、行きたい所へ行く身になる事ぢやに。」と無用の慾話し、「汝如きの末社の眼をかりて、太夫職を勤め給はば、大盡のよい羽織に目がつき、脱がる、と、すぐに著取の胸算用したり、一杯受けて呑みにくい顔して、花待いやな下心など、取手引

手に、慾で仕揚げた眼なれば、お役にたためがまし。」と笑ふ。「いか様云へば云ふ通り、女郎は無慾で持った者、又大盡も金銀の沙汰なく、賢過ぎた方より、少し鈍き方が大様にしてよし。去れば今日病の地藏へ代参仰せ付けられし大盡は、絲屋町に置れなき、色狂ひの旗頭、熊谷笠の新平と名のつて、島原陣に一度も不覺を取られず、金銀の矢種盡きねば、當るを幸ひに、はらりく時き散らし給へば揚屋一家はいふに及ばず、犬まで見しり奉つて、尾を振つてお出でを喜ぶ。同じ人間と生まれて、斯かる浮世を面白いにあひたまふは、よくく前の生で、よき種を蒔きおきたまひ、今女郎に抜かせらるゝ髭とは、生え出で待るか、高足駄はく行人も、此の大盡を見て、又の世の事頼もしく修行致しぬ。こんな大盡に合はせらるゝ、太夫様は、大果報者といふ者、追付根引の花やつて、乗物の内より東山の春を詠めやり給ふべし。」と、四十末社の者共、大盡の御意に入るべしとてもて囃せば、「去りとは太鼓持には似合はぬ、不物好きな事を申す者共かな、世間の大盡女郎を請出すは、皆吝い心から算用づくで請けるなり。例へば一度に千兩出して引拔けば、當座は大氣に聞ゆれども、揚げづめの算用して見た時は、三年過ぐると只になるなり。我等が物好きは、其の算用づくには構はず、慰みを專にすれば、何時までも此の里において見るが面白し。色里離れて町家においては、常の女の少し取りなりのよい分なり。下屋敷において通ひ女にと思ひよれど、是れも半分は汝等が物になれば、我が逢

ふ内は人に逢はせず、千年も揚げづめにして遊ぶこそ心よけれ。」と、毎日手を替へ品を替へての大騒ぎ。殊更過ぎし名月の遊び、月宮殿にて玄宗と楊貴妃兩吟して、曲拍を舞はされしも、まはり遠き慰み、ほしがる物ばつくと遣つて、人をまはして見る程の遊び、又外にあるべきや。いつもといひながら今宵の爲には、分けて柏屋権右が二階座敷、南うちはれて夕眺め、月は手池にして、太夫のさんご夜中新月の色深く、二千里の外まで廻らせ、色絲ひかせて謠はして、面白過ぎてけうといほどに騒ぎぬ。爰に此の大盡のお友達、「大文字の山様といふを知つてか。」「成程夫れは洒落た事のお好きな一文字屋の井筒大盡か。」「如何にもく、浮世の遊び事仕盡して、萬に洒落た物ずき。酒がちな提重こしらへ、近所ののらを誘ひて、都一番の月の見所を我等案内して見せ申さん。」と、島原の南なる揚屋の、堀の下なる畠の中に、酒事始めて、爰の月のおもしろき事、人は知らざりけるといはるゝ聲、柏屋の二階にきこえ、大盡耳ささくとく、「今の聲は慥かに山ではないか、何として其處には居るぞ、是れへまるつて面白き酒を呑め。」と、詞をかけられしに、「そこへ行けば氣がはつて、慰みに引口あり、心をそこになして爰での月見、堀一重の違ひ許り、物の入らぬ遊興、ねざめ心やすし。」といへば、二階も下もどつと笑うて興になる時、其の座に八鹽居られしが、聲かけて、「是れは替つた出掛けやう、山さま、うまき物を進じます。」と、一重に芋入れて、帯にて下けられしを請取り、「近ごろお氣の付いた女

郎さま、是れ忝し。」とかへし様に、前巾著より錢十五文取り出し、重箱に入れて返されしに、八鹽は紅葉を顔に散らし、赤面して、「此の錢は。」と問はるれば、「慥か當年は一升が十五文かと存じた。」と又大笑ひに腹を痛めし。其の夜の事なるに、ある女郎好物の由にて、臺所にて芋を健かせしめられ、口拭うて二階へ揚り様に、箱階子の中程にて取りはづしての高鳴り、座敷に響き渡り、へ風烈しく、二階のおのく驚き、「女郎様さうなが、天晴見事な秋のゆふべかな。」といふ時、太鼓の吉介下に居しが、頓て女郎の尻を突けば、手を合はして拜まる。すかさぬ男なれば、「合點でござるか。」と、詞をかけて女郎を下して、吉介二階に上れば、「末社の身として人も無氣なる振舞。」と、大勢立ち重なつて胴を打たされて濟みぬ。いで其の時のへを負けし其の返報に、加賀一匹當座に貫ひ、其の上此の女郎の年の明くまで、毎夜錢入らずによい目に逢ふ事、こんな身替りには、我々とても立ちたしと、髭の喜八が咄聞けば、又氣を死なさうものでなし、太鼓がきかすば、随分男作つて、生まれ付きの低い鼻を引き延ばしてなりとも、見せ附きを拵へて、金後家に思ひつかる、仕掛けすべし。さりとは世をせきせばう思ひ給ふな人々と、諫めて其の夜を明かしけり。

傾城色三味線京之巻終

傾城色三味線 江戸之巻

第一 月にも増る高雄の紅葉

智慧をやめて一時なりとも化され徳

月花に心を寄する歌人も、梅が香を櫻の花に勻はせ、柳の枝に咲かせて見たき願ひ、何れよい事は揃はぬものなり。男は優れて、然も分の道に賢く、心も賤しからずして、女郎にかけたならば、初會から打ちとけ、二度目には門まで送りて、人にも光らかすべき器量の男は、揚屋に近づきさへなく、宵から寝て面白い酔ひをしらす。又不男にして片言交りに物いふ親仁、金の威光で歴々の太夫に足按らせ、宿の鼻に酒つがせ、寝ながら呑むもあるぞかし。爰を以て叶はぬ浮世と申すなり。去れば昔より風俗器量は、島原の女郎にして、吉原の張を持たせ、難波の九軒で遊びなば、あつた者ではあるまじと、三ヶの津の色里を驅け巡り、色道一遍上人といふ樂坊主、藤澤を越えて江戸に下りしに、吉原は寂しく見えて、内證の繁昌、菟角金澤山な所故なり。さるによつて女郎の志、自ら強くなりぬ。凡て遊女は其の時々の能き男次第にて、一入色を増す紅葉、高雄は生まれついでの大職、風儀いふ

までもなし。宿に歸りて衣裳仕かへる事なく常なり。如何にしても上方の太夫のならぬ事なり。揚屋の晝を勤め、身仕舞に歸るに、對の禿に三味線を、挾箱の如くにかたけさせて、二行に先へ歩ませ、其の身は道中豊かに、知れる人にも詞掛けず、帶胸高にして、身を据ゑての足取り、眠れる程靜かに位をとつて、機關人形の歩くごとし。後備へは遣手のこはい奴が、何時とても水へ入らぬ布子著て、夕日に紛ふ赤前垂か、はゆきは、太夫と同じ顔して練つて行くも可笑し。扱宿近くなれば連れたる六尺を先へ走らせ、門口より高雄様お歸りと、流行醫者の宿歸りの如く、ばつとしたる事、是れこそ眞の太夫なれ。爰に神風や、伊勢町に數年僅かな錢店出し、一貫と買ひにければ、先づ三百渡して、残り追付あとから進ませせうと、其の銀とつて近所を飛び巡りて、やうく七百の錢才覺するほどなせはしき世渡りにも、戀は分別の外にして、淺草の觀音參りの供に誘はれ、三谷に行きて、前巾著のあるぎり、局あるきして、取留めるを縁にして、少しの間に女郎五六人にあうて、隨分強藏自慢を申し、汝は繪何杯もつたと、所々の流行詞にて、牀に入る事を繪盛りととは申し習はせしが、何處の腎張が申し出せしやらん。都にても一頃うんそどりとひひ廣めし事久しかりき。扱取り集めて十匁に足らぬ銀も皆になつて腰廻りに氣遣ひなく、うつかりと辻に立つて歴々の太夫達の揚屋歸りを見渡せば、花も紅葉も一つに堅めし高尾が歸り姿に、かの小錢屋の助四郎見初め參らせ、局の樂しみを忘れ、禿

に縫りてお名を聞き定め、お手遠き戀の思ひ立ち、雲に棧霞に千鳥足して、其の日は宿に歸り、畢竟銀次第で埒の明く戀とは知れてありながら、商ひの元手さへ微な身をして色々分別して見れども、天から降らず地からも涌かず、冤角此の身で此の世の御見叶ひ難しと人の知らぬ涙を流し、所詮永らへて居る故に斯かる憂き事もありと、戸棚より脇差取り出し、思ひ切つて抜いて見たれども、どうやら小氣味悪く、否々死んでから此の戀の便りにはならずと、先づ刃物を鞘に納めたる智慧を出し、昔より叶はぬ事を神に祈るに、手前の信心次第にて成就せぬといふ事なし。先づ銀さへやれば自由に埒の明く戀なれば、戀の元は銀なれば、福の神を一祈りして祈つて見んと、淺草の稻荷の社に日參、追付お影にて、何ほど遣うても尾の出ぬ程の身代になりて、背のはけたる女郎買、鳥居を越えし粹こつひと、世の人の羨ましがる程になしてたび給へと、小さき鳥居を拵へ、毎日是れを立て置き、肝膽碎き、半年許り祈りし中に、高尾は誰か根引にして、里は紅葉なき三浦の秋の夕暮、寂しかりしが、又珍らかなる花紫に色深い男共がさわぎて、已前變らぬ繁昌と、御町知りが話を聞いて、はつと胸迫り、去りとは其の君故にこそ此の社へも歩み運び、様々心を盡せし事よ。今は浮世に片時も徘徊いて居る事ふつりと嫌と、世を見限り、煮賣する家に入りて、一杯呑うでの上で最後極むべしと、片影の旅籠屋に立ち寄り、小半酒を冷にて見知らし、ほろく酔ひの來る時、向うよりどうもいはれぬ

茶菓子にしんこのやうな物が出でしがと、今思ひ出して胸を悪がるも可笑し。冤角佛神の力にも、銀づくの事は叶はぬと見えたり。此の男も稻荷へ日参を止めて、家業に是れ程精を出せば、近道に利を得る事もあるべしと、大笑ひになつて、日待伽のねぶりを醒しぬ。

第二 月にも花にもたゞ濃紫

百三十里戀を稼ぎに下り大盡

武者振よく生まれついて、るんつう持つて、浮世を隙にして遊ばば今なりと、萬に事の缺けぬ持丸長次とて、上方にての分知り、難波の色善悪を見つくし、都の花も實もある男と、西島にて用ゐられ、二介の太夫を手にいれ自慢して、是れより名に聞きし、武藏野の色深き小紫を見に下り、三谷案内のために、吉原雀の茂吉といふお町知りを先にたて、其の外京大坂の口利き末社共に、皆定紋の揃へ小袖を著せて、此の度此の里始めて一見、よろづ大形に、宿へ黄金の花を降らし、頭から大束に出て、當流の手を盡したる料理、せり箸して、亭主が氣を付けし初物も構はず、諸事引きこなせば、如何なる女郎も位を吞まれ、彼方此方になつて、自ら身に嗜み出来て、見落されぬ氣づかひせらるべきに、流石高上なる事を見盡せし小紫ほどあつて、さつに悪びれたる體なく、詞少なに鷹揚過ぎる程にゆつたりと遣つて、初會過ぎての明の日、成程心よく〇に入つて、すこし我が方から行つて居る

風して〇〇〇か、れば、大盡さこそと、ちと自慢して、鬢などかき撫で、愈あじやりだてを申して手に入れて〇〇〇〇〇〇、小紫むつとして、あまり自由過ぎて、お慰みにはなるまじと、小し身をひねりて、枕のともしにて煙草呑むなど、其の脇顔の麗はしきに、愈〇〇〇〇〇〇なるに、雪を嫉む程の〇〇〇〇見せかけ、ひむくの〇〇〇〇折りかへりて、然も〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、世界の戀の水盡き所、現はに見えて、あじやりだても脇になつて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇と、〇〇して〇〇〇〇出で、流石の大盡手を合はして〇〇〇〇ども、いかなく元の首尾はさせずして、手強き男をなかせける。此の大盡起き別れて、猶戀を残し、其の儘には捨てがたく、翌の日より續けて逢ひけるに、〇へ入るまでは随分客の心に背かず、自由自在になりて、〇〇〇〇の所で男次第にならず、何時とても大盡もがいて素戻り致し、何うやらなりさうなものと、振らるゝに従ひ、今度は〇〇と心引かれて、通ふも通ふ、振るも振る、續けて二十四日といふものは、物の見事に誠の分をたてざりしが、二十五日目に及んで、大盡氣をつかして、打恨み申しけるは、「我遙々所を越えて爰に來り、大事の銀を投げ打ち心を盡すも、そなたを思ふ故ならずや。それに近頃酷き仕方、夫れも馴れ馴染みての上に、互の思ひあまりて、口舌などにて斯うした首尾ならば、可笑しき事もあるべし。然るに初會より今日まで、つひに誠あるお情に預らず、是れは一向我等に死ねとの事か、夫れは太夫さまとも覺えぬ酷き御事。」と、實

事を申し出せば、太夫細かい返答なく、「殿振は好いた風なれども、恐らく味をやると思召す一座のしこなし嫌なり、誠我が事思召さば、我が心の解くるまで通ひ給へ。」と離れ切りたる詞に、大盡興を醒し、「然らば今日より女郎替へて遊ぶ可し。」といへば、「夫れはどうなりとも御心任せ、上方の物やかな女郎をこなし給ふ土氣の落ちぬ間は、打解け參らする事嫌よ。」と、牀柱にもたれかゝりて顔を背け、心を暗の下に納めて、少しも騒ぎ給はぬ風情、惟持の御内儀様見る心地。上方とは格別工合違ひて、手だれの太盡此の張の強さに、弓矢八幡きかぬ氣さしもたよわくなつて、自然と我が方より機嫌取る様になつて、位取る事も上手ごかしも中々及ばず。又分もなう宿に歸りて、爰の太夫を手に入れて、心の如く廻す大盡あらば、近付になりて、女郎の意氣方買手のしこなし、尋ね聞きたしと、吉原雀の茂吉に僉議させけるに、三木といへる三谷第一の大盡、御町我が物にして、今での色知り、是れこそ好む友よと、初対面から互に心安く申し合ひ、いざ是れからといふしほの、引かぬ氣な男共二挺立の舟をいそがせ、目ふる間に悪所の揚り場、船頭共到大儀々々と、詞殘して常の揚屋にいり、「今日は珍らしき一座、下り大盡上らして、是れまで誘引致した。扱お馴染は小紫殿とや、お隙いりあらば、太夫殿に内證申して、何卒今日のお客へ斷り申され、此方へ御來臨あらば、一入有り難からんと、申し參れ。」といひ出すより、萬のしなせ、上方とは格別なる事共、隨分京であぢやうり自慢の男、三木が幅

におほはれ、満月の前の星の光にて影がなく、する程の事初心に見えて、我ながら可笑しかりき。しばらく色なき里の心地して、先づ何がなしに呑み出して、素人末社が半太夫節の習ひのない淨瑠璃、悉く皆染物屋の繪本見るやうな事を語りだして、長々しく待つ中のてんがうに、太夫が來るか來ぬかと疊算、半ばに當つて、七つの鐘の鳴る時裾ふきかへす紅裏、ばつとした姿にて、太夫様お出で。先づは嬉しし。此方へと上座に直せば、坐するまで詞なくして、先づぼつやりと笑ひ出し、「去りとは變つたお出合ひ、今日お約束申せし此方のお客は、奥筋の頑なお方にて、お斷りも申し難き首尾なれども、方様と長次様と御一所に御越しの由、參りませすば、お二人ながら、枕物語せし大切なるお敵さまだちなれば、差合の一座と遠慮して來ぬかと、上方のお客は格別、先づ此方様の、必ずこんな事に惡推まはすお方ゆゑ、いかう來にくい所をよう呼びにお越したな。そんな初心な太夫かと思つて、二十四五度も逢ひました長次さまを、ようぞ連れましてござんした、近頃恥ぢ入りました。私か心の底の底まで知つて居ながら、憎や男奴。」と、三木が太股に跡の付く程抓めくせられ、痛い程忝な過ぎて、按りく、「夫れは太夫の粹ばまりといふもの、今日長次を同道せしは、一つは其方を思うてのことなり。抑長次上方にて、小紫といふ名を聞きて戀にし、遙々の海山を越えて、其方に逢はん爲許りに此の里に來り心を盡すを、いかに風儀が逢はぬとて、二十四五振るといふ事、情を知らぬ

酷き仕方、懇する我までも心よからず。其の上長次は上方一番の分知り、且は京大坂の聞えも悪しければ、今日は拙者仲立致し、心よく長次に逢はせんため連立ちて参つた。此の心を無にして、我等手前を思ひ遣りて、逢ふまいなどと未熟な儀仰せらるゝと、忽ち今日切りといふ男、さあ返答は」と酒氣もなくして誠を申せば、太夫感涙をながし、「それ程までに私事を思召さるゝ御心、鎌倉に獨りある母を誓文にいれて、如何程かゝ忝し。長次様を振りましたは、我が事聞き及ばれて、美君多き京を捨て、遙々のお下りとの御事、今の世にはあんまり謹らしく、頭から思はれたいとの仕事と悪推まはり、誠か諛かの御心底を見極めん爲、情なくも多くの日を振り参らせし悔しさ、何がさて其方様御一座の上は、逢ひませいでおきませうか。」と、改めて長次と杯事して、はや〇〇らせて、三木様〇〇ぞやと、何處やらに詞残して、長次が手を探り、是れ戀男ぢやと手をとれば、長次は晝からの酒に心亂れて、言ふほどの事前後して、偏に現の如し。太夫も三木も氣の毒な頭を搔いて、二人が今日の志の無になる事を悲しみ、酔ひの醒める藥など舐めさせて、聲に物いふ如く、兩方より様々いひこめば、ぎよろりとして人心地なければ、「去りとは是非に及ばぬ仕合、今宵は爰にとめて、酔ひの醒めなば、彼が心に叶ふ様に慰めてくれるべし。我等は是れより歸る。」と立たんとするを、太夫引き止め、「今日見れまでの御誘引にて、御連といふ名があれば、貴様御一所にあらすしては、金輪際逢ふ事

せぬ。」と申しきる。「然らば今日が限りぢやが、中々假令此の世は扱おき、永き來世まで御見ならぬとても、御一座でなくしては、御合點の上なれども、我が身にしては後暗き事ふつゝ嫌。」と心底極めて申せば、三木も道理に責められて、重ねていふ言の葉もなき時、長次むくゝと起きて涙を流し、「去りとはお江戸の色遊びのいきかた、傾城買の聖人も申すべし。我も實は過ぎぬ酒に酔ふべき筈はなけれども、兩人の心入を感じ、態と正體なく見せて、思ひ合はせし各を牀に入れべしと、暫時狂言をいたした。向後此の戀止め申す上に一つの願ひあり。とても事に三木聞いてたもるまいか。」
 「して止めての上の願ひは。」
 「去れば其の事、勿論兩人の心底を感じ、一旦思ひ切るといへど、戀慕の道は根深き者なれば、此の里に太夫を置きては、根が賣物といふ心にて、又ふと心迷ふまい物でもなし。願ひとは爰の事、貴殿太夫を今日の内に受出し、流れの道をたつて、御内儀様と人に呼ばしてくれなば、我が思ひ速かに晴れて、永く物思ふ事あるまじ。此の願ひを聞き入れず、りんじうぎたなく心の残るべきやと、一夜は逢はして其の上の事などと、深切過ぎたる心遣ひあらば、只今爰にて自害致す。」と、刃物を取り廻して、誠に思ひ切つたる眼色。三木聞き届け、「爰は下手くろしういふ所にあらず、先づ我等のためには十分よい事、冤も角も。」と、即ち私宅へ、事の自由に働く山吹色のものを、馬二駄につけさせて、只今参れと申し遣はし、早速の身請。情知りの寄り合ひと、見し事を今申

出し、女郎も、とりんばうも、普く色道の鑑といたしぬ。

第三 月より上に名は高松

散茶に振られて喉のかわく男

世の中に、無分別者と銀の利程はきものはなしと、朝比奈三郎が悪所銀の利におはれて、物前にてんくと、舞鶴のひた、れも汗にしはたれ、鐵の門は破れども、銀なくては、力業にも預り手形の判は破られずと、自慢の髭も縮み上つて、當所のない銀を必ず遣ひ給ふなど、九十三騎の親類中へ随分懲りて語りしは尤もぞかし。今時は身代柄よりは、遊び花麗になりて、思ひの外の仕過し多し。其の爲に身代相應の遊びを、色里にも拵へておけば、細元手の人太夫格子に及ばぬ戀をせうよりは、氣骨のをれぬ散茶に戯れ、又は近き頃の仕出しうめ茶で、咽の渴きをやめ、當座拂の氣散じ、夫れから五寸三寸新町がしのかきなうれんは、定まつて百宛轉りと寢て咄した所、さらに生男抱いてねるやうにはあらず。內衣も絹物して、はし切りの鼻紙、口すほめて物いふ風情、末々にても御町の仕出しは格別なり。爰に本町傳馬町の店に、旦那の爲になる手代共十人許り寄り合ひ、命の洗濯講といふを始め、先づ頭に一人前より金壹歩づ、出し、是れを元手として、毎月一人に三匁づ、出し、格子女郎をまはり番に、一人づ、買うて慰みける。是れよりして頭掛けを、世間に枕がけと申すは、此の因縁

と承る。又無盡といへるも、無いなりをして、盡したがる者を、同じ心の友うち寄りて講を取り結び、盡さる、程に身上取り立て、大盡にしてやるより起つて無盡とも又は戀親母子とも申すぞかし。其の中に店預りの少し大氣なる男の申すは、「とも此の講思ひ立つからは、今少しの事なれば、太夫を買つて慰むべし。」と、そろく奢りを申し出せば、「成程それも取り結ぶ前方に、一相談致せし事なり。上方と違ひ、爰の太夫職は、初會などには身仕舞浮浪々々として、やうく八ッ前に揚屋に来てそこくくに杯廻して、又も御見と牀なしに立歸るの由。然れば、此の講中どれども回り番にして毎月買手の人かはれば、いづれが逢ふも初會なれば、銀出しながら、年中祕佛の光堂へ参つた如く、有り難いと思ふ許りで、尊い肌も拜ます歸りて、何が面白からん。」と云へば、店預り我を折り、「去りとは太夫といふもの、端銀にて買はれぬもの。」と、今までのを掛け捨てにして講をのきける。いか様夫れ一つの思入れでゆく客に、初會なればとて寢道具さへ出さず素戻りさするは、何程か心残りにして、銀拂ひの時、養子親の借錢なすやうに思ひ、出し兼ねけるも理ぞかし。兔角女郎は賣る身なれば、其の日の男に嬉しがる事飽く程〇〇〇、然もなづみたる顔付仕掛け、役日の外まで勤めさせるが商ひ上手なり。客も是れより思ひ付き、彼の美しい姿の、高家方の息女なら、金銀にて叶ふべき物にはあらず。其の道の者なればこそ、親にも見せぬ〇〇〇〇〇〇〇〇て、柔かなる〇を自由に物しける。是

れには何か惜しからじと、ある程は參らせ上げける。三浦大助といへる末社の老人申しけるは、「昔の女郎は、何心もなく形を麗はしく作るを専にして、叶はぬ聲にても唄を謡ひ、三筋の絲さへ鳴らせば太夫と呼ばれて、其の日の男上戸なれば酒面白く酌み交し、または淨瑠璃好きなれば、嫌ながら、度々聞き馴れし十二段の忍びの所、永閑節の可笑しげなるを、折々に三味線引きかけ、是れは細かにお語りなさる、などそやしける。思へば病人に伽するに變る事なく、夫れはく心の苦しみなるに、今の世は又好いた男ぶりを、氣に入らぬ顔をして位をとり、様々に心を悩ませ、務めなればこそ、こんな男に人中ではある、者かと、思ふ程の嫌らしきにも、ひたたくと持つて參り、身をそれが物になせる仕掛け、假令天眼通を得られし羅漢も、一泳ぎは泳がさる、程の賢さ、女郎の智慧の盛りとは、今此の時かや。爰に三鳥、三木とて二人の分知り、色道の傳授事までしりぬいて、凡そ三個の色里にかくれなし。抑三木の内、川な草と申すは、流れの女の誘ふ水あらばと、客次第になるを、根のない草に譬へし事なり。おかさまの木といふは、松も根引きにせられてお内儀様になる事。又三鳥の中、の呼子鳥と申すは、迎への男の聲などの様に世間では申せど、夫れは傳授せぬ人のいふ事。利口な末社が上方より糟漬の生鱈を貰ひましてござる、是れ一種にてお出でとよぶ時必ず行かぬ物なり。霜先の無心いはる、は切なき物と、未だ前方なる素い大盡衆へ大事を語りぬ。此の三鳥といふ大盡、都の

末社の名鳥始めて下り、此の里にて十三がはりを嘯りしを聞いて、近頃面白き色口説、是れ珍鳥と悦び勇み、爰の諸分を見せばやと、先づおつとつて京にない圖、二挺立ちに打ちのせて、あれなる都鳥とは汝が事よといへば、あの如く終には粹が川へはまる事、打見には豊かなれども、水の中にて足鳥の忙がしさ、我等の身上も去りとは彼の鳥に變らず、内の苦しさと、はや耳訴訟。爰の大盡は随分氣が長うて、急に物やる心つかず、何事もさう心得たがよしと、的面に持つて參つて、中々はけしき男氣、上方の大盡とは格別の違ひと口をあきけり。扱今日の趣向は都の名鳥といふ男を、上方の歴々の大盡に仕立て、三谷の粹どもに手を探らして一興と、三鳥、三木申し合はせて、其の旨名鳥に申し渡せば、假初ながら色里にて、歴々の大盡になる事、萬事につけて六ヶし。此のなり賃に上方へ上る路銀、御意に掛けられたらばと、早慾を申せば、夫れこそ安き事と、三鳥懷中より金子五兩取り出し早速くるれば、忝しと紙入に納め、兩人が挾箱より、用意せし替衣裳出して、船中にて、俄に本大盡に作りたて、舟つけば各揚りて、何時もの揚屋に行けば、皆待ち顔に撥音を止めて、二階より下りる者共は、兩人が常に連れる若い者共、津輕才助、出額萬吉、平太蜘蛛の勘助、其の外可笑し仲間共、「お先へ參つて、御出では遅し、今まで騒いで居りました」と、何れも下座に固まる。時に兩人の大盡名鳥を正座に直し、「彼等は拙者共が、常に遊山所へ召し連れて參る末社共なり。我々兩人同然にお

目懸けられて下さるべし。」と、扱手をついて慇懃に申せば、才助を始め何れも、「旦那さへ彼の如く、結構なる御挨拶をなさるゝからは、只の御方にてはあるまじ。」と、一度に首を疊に摺りつけ、巻舌にて御返事申す。斯くて三木宿の噂を近く招き、小聲になつて、「あれなるは我等兩人を、御引廻しなされ下さる上方のさる御方様、此度ふと御下りあつて、竊かに忍びの御遊山、常の客とは格別なり。何事も都は和かにして、花車を專にする所なれば、物事しめやかに、何れとも定めず、太夫格子を六七人つかめ。」と、小倉、勝山、初尾、大橋、きてう、八重霧、山の井交りに、酒も大方なるときまで、名鳥も上方にてよい事見盡せし物師なれば、成程横柄を捌き兼ねず、切々手水にたつて、有る水を斟みかへさせ、潔く遣ふ時、山の井といふ女郎、「私かけて上げません。」と、杉柄杓とりてかけ参らすれば、「近頃氣のついたる女中、お名は。」と問へば、山の井と申す、「理かな、結ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人にと、貫之がよみし歌の心にも叶ひ侍る。何れ俊成卿の忠岑が、有明の歌にもをさをさ劣るまじと、賞美し給ふ歌の程あつて、幾度吟じても面白し。」と、打ちあがつたる歌ばなしなど申し出し、随分味をしこなす所へ、勝手から宿の男が丸裸になつて、總身を金箔でだみて、其の儘黄金の佛の奉加々々と膝行りて罷り出る。是れは一興なると皆々笑へば、「今朝朝酒に飲べ酔ひ、表の二階から落ちまして、總身をしたゝかに打ちまして、難儀致せしを、金は打身の薬とて、臺所で皆がよ

つて、斯様に此の世から佛には致してくれましたれども、奉公を引いて養生致す飯代の奉加々々。」と無遠慮に座敷を膝行り廻る。「是れは不便なる儀、今日の大盡へ取り付きて嘆きを申せ。酒興の上なれば、御許さるゝぞ。お懐中へ手をいれ、あつつか、つて申し請け。」と、兩人許せば勝つに乗り、「是れ旦那お逃げなされな、愛宕白山手が悪い。」と、膝行りながら袂にしがみ付き、懐中に手をいれ、船中にて貰ひし五兩の小判に手をかくれば、名鳥辛なく、「こりやならぬ。」と、女郎の手前も恥ぢず、「大盡止める。是れがあつてこそ。」と置頭巾をとれば、扱は今日の大盡は繕ひ物かと、女郎末社腹の痛い程笑うて、又酒になして遊びぬ。裸佛は云ひじらけになつて、責めて白毫になるほど露がねにても欲しやと、膝行つて勝手へはひるを呼び返し、兩人手前より一兩と投げ出せば、「近頃殊勝な御志、永代裸佛の藥代の施主におなりなさるゝ事。」と、戴いて立ち入りける。其の後三木は中松屋の高松に深く馴れての上に、引きかいて宿の花となして詠め暮しぬ。三鳥はかかるよい事もせずして、無性といふ者になりて、何時も有るもの様に遣ひ捨て、差引残らぬ揚屋へも内證手薄くなれば、自ら身にひけ出来て、我が方から行かれぬ氣になり、止まば今なれども一日も色を見ずには居られぬ性にて、やうく一角才覺して、しり腹止まずに散茶に係り、其の儘昔の氣を出して、薄雲、勝山など自由せし盛り話耳に立てて、散茶女郎むつとせしをおし沈めて、牀に入つて此の返報を以て参るべしと、帯

の結目堅くして、あちら枕にひんとした寐姿、近頃あつた物でないとお身に近寄り、耳の邊へ口を寄すれば、酒臭いとて夜著の襟へ顔を指し込む。去りとは憎き仕方。昔は歴々の太夫格子にもこんな事はさせざりしに、無念千萬とは思ひながら、世に連れて一分の金が惜しく、振られては先づ差當つての損と、随分律儀に息遣ひ止めて、「お手が外へ出ました。」と勞れば、「夫れ程の事は覚えがござる。」といふ。男今は堪忍袋の口を明けて、「是れは歴々の太夫達のなさるゝ振るとやらいふ事でござるか。拙者初心者でござれば、散茶とは振らぬといふ心なりといへる名によりて、振られぬ合點で参つたが、散茶の振らるゝは、扱はいるまど御出でなさるゝか。」といへば、「私が名を薄雪と申せば、振ります。」といふ。「近ごろ冷い心意氣、是れは北國筋の大雪よりは強い振りやう、ちと櫓に乗つておして見ませう。」と、いひしなれつき、難なく首尾して立ち歸り、去りとは散茶にさへ振らるゝ身になり下りて、無用の色狂ひと、我とよく得道して、最早今日ぎり心誓文立てしが、明くれば又身も掴み立つる様に思はれて、人目も恥ぢず通ひけるが、後には何になつて何處へ行きしか果てをしらず。去れば昔の薄雲、花鳥など打寄りて、賢さ勝れたる勤め物語の序に、心の眞の意見を聞くに、夫れは左もこそあるべけれ、總じて買手俄に遣ひ榮る時は、頓て燈火の消ゆる戀の闇路とは知れて悲しく、其の人愛しく、御宿の不首尾を意見して、少しは遠ざかる様に仕掛けぬるは、神ぞく微塵偽りのなき所な

れども、男は悪しく聞きなし、猶しきつて毎日出で、事によつて外の女郎に變りて、此方へ見せる全盛に、せいでも苦しからぬ大騒ぎに、程なく身代疊みければ、是れ許りによい程といふ程はなし。冤角取らるゝ程はばたくと取つて仕舞ひ、まだしき時に分別さすれば、差替の一腰も、茶入の一つも残る者ぞかし。べんくと遣り繰りする内に、一色々々皆になし、手と身となつて納まりは、お札納めの下組、願人の袋持坊主になれるより外はなし。よく心得て深入りせぬが粹なりと、随分戀に取り詰められし男の語りし。

第四 月に調ぶる琴浦が三味

酒に強きこと燗鍋の綱

女郎は昔より一座賢く、酒事情別味やつて、謔も男の好ける様にいうて、慰みになる事今ぞかし。されども勤め日の外、物前の無心、我も人も忙はしき中へ、迷惑ながら商賣の差引は捨て置き、色町の付け届け身の一大事と覚えぬ。是れ一ツに限らず、此の道に足を踏み込みて、深入りをする人皆ぞかし。爰に麴町に請酒商賣する者ありけり。其の身上戸なれば、他所へ買ひにやらず、年中呑むだけ延びにして、朝暮酒の微なる世渡り。此の酒家の家主が昔を知る人のいへるは、彼は生國宇都宮にて、彌三郎といへる大盡の果てなり。今こそあれなれ、以前はいんつう過分に、持つて開いて花を

やつたる男、其の時は三浦の琴浦にうらなく契り、互に命切りと申し交して、通はぬ日はなし。一日逢はねば、女郎も思ひに沈み、晝夜に十二の一時文、若しや御心地にても悪しきやと、外の勤めも中心に染まず。名のたつ程に思ひ合ひしが、斯かる深き中も、變らば變れ川の瀬と、浮氣男の心は一時の内を知らず、頃は七月始めつ方、そろ／＼秋風の吹いて來る時、或女郎に惚れ掛つて竊かに宿を頼み、文して色々口説けども、御志は嬉しけれども、琴浦様のおほし召しも迷惑、此の戀ざらりと御止め下さるべきとの返事。是れは一通り女郎の作法なれば、斯うある筈とは元來合點して、惚れ出したものなれば、今更止める男でない。此の戀首尾よく取持ちなば、どなたでも小判の山を築いて、屹度御禮申す事ぢやと、宿の夫婦若い者共末社まで申し渡して、深く頼めば、末社の中に、近野といへる三寸局の年の明きしを女房に持つて、女郎の心意氣を、知つた顔する鹽釜の長兵衛といふ男、彌三大盡の惚れられし女郎に、桐屋市左衛門方にて、一谷のお客と御供せし時一座いたし、大酒の上にてよき首尾を見合はし、竊かに彌三郎が、所思を語るに、「私もあなたならばと飛び立つ許り思ひますれど、如何にしても琴浦様の手前あれば」と、大和心になつて大きに和いだる口上。扱はなりよつたる商ひと、上手を盡して申すは、「近頃それは初心の至り、町屋の實事にさへ勝手づくとして、兄の死跡へ弟を入る、もある習ひなり。ましてや色里の情を商賣になさる、御身として、外の所思思召すは、



前方なる穿鑿、戀は仕勝ち」と申せば、洒落て此方から惚れてゐた男、「今日は名譽の出合ひ、今から可愛がらざ掴めるぞと、開化けて御逢ひなされなば、去りとは名譽の女郎と情知りの名を探り給ひ、今の間にすさまじき御全盛見るやうなり。殊に此の事、宿の夫婦を始め、我々共まで深く隠密に致せば、中々狼狽へた神も御存じない事」と口の酸なる程味をやつて云ひ廻せば、「然らば外へ沙汰さへなされぬ事ならば、竊かに彌三様に逢うて進じません。此の心底御傳へ頼む」とあれば、長兵衛悦び其の座をそこ／＼に勤め、其の日のお客にお暇申し、直に彌三郎方へ参りて、「旦那小判の山をお築きなされ、仕おほせて参りました」と、茨木が腕を取りし程の勢ひも酒機嫌にて、燗鍋の綱といふ武士と、勢ひか、つて申せば、大盡折節末社を集めて、御町話して、無色の酒も呑める者ぢやと、餘程の機嫌なりしが、「長兵衛が只今の口上、何とも其の意を得られず、如何にしても、思うたより靡きやう早速なれば、逢はぬ内には小判の山も築かれず、そのよい返事の温まりの醒めぬ中に、違ひなく何時頃逢うてくれらるべきとの、太夫自筆の慥かな手形とつて参れ。さうない内は汝が詞頼まれず」と、忠が不忠になつて、何とやら積るやうに思ひ入れられ、申し出してもとねに仕兼ね、爰は一生の大事の場と心を沈め、「成程太夫様に御好みの通り、書かせまして参りません。其の替りには、又旦那からもお手形とつて参つたらば、小判何程下さるべきと御墨付を頂戴したい」と申す。「是れはよい念の入れ

所、如何にも書いて遣はすべし。十日より内に逢はうとならば、金子五十兩とらすべし。二十日の内ならば三十兩、來月へ掛らば十兩、夫れより延びなば此の手形反古たるべし。」と、早速書いてたびければ、長兵衛は手形賜はりて御前を立ちて出でけるが、立ち歸り方々は、我が心を陸奥の會津の蠟にあらねども、流れを立つる女郎に好みの手形を書かせずば、二度太鼓持たせぬ法もあれと、高言はいて宿に歸り、先づ鼻に酒の爛申しつけ、機嫌よくして、「人の仕合は何時直らうも知れぬ者ぢや、物前とさへ言へば出違ひ、其方に許り苦勞さするに、今度は内に居て、當り前の事はおいて、古借錢まで拂うて、久しぶりにて掛乞の笑顔を見すべし。先づおつとつて、旦那から五十兩の御合力、違ひのない所は如件。」と、手形を出して戴かせ、夫婦盆仕舞ひ、落付いたる心地にて、「去年の鯖は小さかつた、蓮の飯の米は白きに飽きがない。今年は餅米二石許り買うて、大屋殿の確借つて、前方から踏ませ置くべし。」と、よろづ大名氣になつて悦ぶ所へ、家主の若い者案内なしに内へ入つて、「長兵衛殿不思議に内にござる。何時参りてもお留守とあつて、大分宿賃の溜りの算用をなされぬ。それ故旦那腹立致し、今日は右宿代を殘らず皆濟なさるゝか、さなくば今日のうちに家を明けて、何方へも御出でなさるゝか、二つ一つの埒をつけに参つた。後程と申す様な手延びな愈議でござらぬ、お返事が悪うござれば、只今諸道具掴み出し、請人方へ運ばせ申す。」と、苦り切つて申せば、「徳右衛門殿、それ

程厳しう仰しやられずば、今時の店借りは薩張とは濟ましますまい。なる程悪うは承らぬ、久々延引いたした代りに、滞りたは申すに及ばず、先づ當年中の宿代は進じて置きませう。拙者もちと此の頃はよい仕合を致し、歩にもまはる屋敷もござらば、求めも致さうかと、存するほどの身になつてござれば、今までの如才屋の長兵衛ぢやとは思召して下されな。後ほど夫れへかるめなしに宿代持参致すべし。」といへば、徳右衛門耳に入らず、「此方の後程と紺屋の明後日とは、かんざう彌平で受付けない。」と、頭振つてまうす。「去りとは夫れ程までに御見立に預る所、近頃心外に存すれども、負うたが定でござれば、是非に及ばぬ。我等僞り申さぬ印には、先づ銀子持つて参るまで、是れを代りに進じおく。」と、一腰を渡せば、徳右衛門とくと改め、「然らば必ず違ひなう、追付銀子御持参あるべし。先づ夫れまでは此の脇差我等預りおき申す。」と、暇乞して歸りぬ。兎角差當つて急しき方なれば、遣つて仕舞うて一腰を取り戻し、其の後三谷へ行くべしと思案極めて、材木町の木曾屋の清平といふ、日頃目を掛けらるゝ大盡、度々御無心申し掛けて愛想をつかして、此頃は呼びにも下されねども、分知りにして頼もしき御方と、彼の大盡の許へのき、大盡に御目に掛り、件の手形取り出し、彌三郎の戀の次第、女郎の返事の様子つぶさに語り、「随分悪い仕合にして、來月までの中には二十兩貰ひますには極つたる御手形、是れを質に留めおかれ、來月まで金五兩御借し。」と歎きを申す。清平手形を開

き見て、「尤も是れに偽りはあるまじ。然し其の女郎慥かに彌三に逢はうといふに證據なければ、何とも心元なき證文なり。五兩取り替へてやつた上に、若し其の女郎彌三に逢はずば、勿論此の書物反古となつて、現金出して損する者は我ら一人なり。こんな事に金を貸さうよりは、請のない半季居の奉公人に、一年分の先金貸したが、まさつと慥かさうな物ぢや」といへば、「成程女郎も逢はるゝ筈に、今日堅う口を堅めて参りましたれども、旦那念者で、愈逢はうとある一札とつて参つたらば、逢ひ日の極り次第に、此の通りの金子くれらるべき證文にて、只今是れよりすぐに、此の女郎に一札書かせに参ります。此の一札さへ旦那へ探つて進ずれば、私は金を早速貰ひます契約、跡は逢はれうとも逢はれますまいとも、夫れからは拙者構ひませぬ。」と申す。「然らば此方より、手代を一人汝につけて三谷に遣はし、其の女郎の口もきかし、一札も見せての上には、如何にも貸してとらすべし。」とあれは、「是れ忝き御事や」と悦び勇み、木曾屋の手代と同道し吉原にゆけば、はや暮に及びて、桐屋のお客もお歸りなされ、太夫様も身仕舞に御宿へござつたが、今晚は鎌倉屋へ御出での由市左衛門方の男が申す。扱はと鎌倉屋方に行きて先づ御内儀に對面し、彼の女郎の事を聞けば、今方御出にて座敷にござりますとの事。「女郎のお爲によい事申しに参つた、鳥渡是れまで呼びまして下され。」といへば、心得たとて早速通すれば、自由に立つふりして勝手に入つて、「是れは鹽釜殿、なんとしてござん

した。」と立ちながらの挨拶。「先づ下にござりませ。晝仰せられました深切の段々、彌三様へ温まりの醒めぬ内に、直に持つて参つて聞かしましたれば、お悦びとも満足とも、神八幡餘念はござりませなんだ。然し全盛の御身なれば、ふと其の内に引きかいてのける客があるまい者でなし。然らば焦れ死に死なうも知れず、冤角情の上からなれば、とてもものに急なる御見を頼み奉るとの、御返事がてら御使に参りました。」と、少しでも早きが價值のある約束なれば、太鼓は早めて申しかくる。女郎ぎよつとしたる顔つきにて、「長兵衛殿はつがもない事いはんす。思うても見さんせ、彌三様は琴浦さんと深い事は誰知らぬ者はなし。其のお方にそもやそも、どう逢はるゝものでござる。此方も太鼓持つて此の里へ年中はひり込んで居る様でもない、愚かな事に使用する人ぢや。夫れも琴浦様と口舌でもなされて手が切れての上に、此方から琴浦様へ、退かしやりやうの段々聞きに遣はし、付け届け濟んでの上は、又逢ふも例ひなれど、是れともに取持つて、お馴染と中直し、元へ戻すが女郎の作法でござる。そんな事も辨へずに、ようもく太鼓はなさるゝ、厚皮な。」と、目を据ゑて腹を立てらるゝ。「是れは以ての外の相違、今日晝此方様には、沙汰さへなされずば竊かに逢うて進せうと、彌三様へ御口傳を、大誓文で仰しやつた。扱は我らをお廻りなされたか、事によつては、女を相手にせまいものでござらぬ。」と、大きにせいて申せば、「去りとは笑止や、先づ太鼓持は何が役目ぞ。素いお客、我儘

大盡杯の無理な事を云はんすか、又は色里の諸分を知らずに、馴染の女郎ありながら、此の様な恍惚れなど遊ばすを、竊かに止めまし、其の大盡の名の出ぬやうにさしやるが第一の役目でないか。既に大盡の仕方が悪ければ、歴々の太鼓衆が付添ひながら、不調法と此方外叱らぬぞや。其の上今日のお客は、此方も付いて御座つて知つてゐるさしやる通り、一谷の蛇の助様というて、朝から翌くる夜明まで呑み續けにさんしても、きよろりとしてござる大上戸、そのお相手になつて大分酒に酔うて、現で居た私を捕へて、ざ、やかしやるとは思つたが、何いはんしたやら何いうたやら、神ぞく、覺えませぬ。かき暖簾掛けてゐるさんす艶様達さへ、夫れく、に差合はくり給ふ。まして私ら身の上の事、酸いも甘いも知つて知る此方の、假令酒興にいへばとて、誠にさんすが聞えませぬ。はて斯ういふが無理ぢやと思つて腹がたたば、公事になりともみやになりとも心次第になされ、エ、素人らしい。」といひ捨てて座敷へ立ちて行かるれば、長兵衛呆れて、今は悔みても埒の明かぬ手形を取り出し、廣けたり疊んだりして何とも不首尾千萬。木曾屋の手代見兼ねて、こんな所に長居は無益とて、無骨となつて居る長兵衛を引立て門口へ出づれば、遣手の龜が来るに行き逢ふ。「是れは長兵衛様色が悪い。お内儀様へ、氣に入り様が過ぎる物であらう。」と笑へば、「そんなよい機嫌でない。」と、腹立ちさうな顔可笑しや。今日晝桐屋にまさつと御勤めなさるゝと、見事な目に逢はしやる所を、兎角早きお歸り残り

多し。私共は蛇の助様より、いびつなりな物貰ひました。」と、よい事許り申して這入る。扱々はれ程埒の明かぬ事に身を使うて、現金にとれる鳥を遁したと、仲の町邊では腰が抜けたと、轉けさうなるを抱へ、大門過ぎて駕籠を才覚し、夜來て終に今時分返つた例がないに扱と、涙を流して宿に歸り愈證文役にたために極まり、脇差一腰家主へ渡しただけの損となつて、家を立ち退き金杉邊に、何をして送るやら微な暮し。其の後琴浦も彌三が心底を見限り、女郎の方から隙入れ申して逢はざりしが、靈岸島の七ことやらに請けられ、奥様となつて三年續けて、年子に男子を三人まで設け、世に不足なき暮し。兎角人の身の上はしれぬものなり。彌三郎は愈無性といふ者になつて、始めの勝山に戀を仕替へて、跡先の思案なしに、いかなく金子一兩も残らぬ程に遣ひ捨て、古郷の宇都宮も、鼻もちもならぬ程悪い首尾にて寄せつけず、是非に及ばぬ仕合。昔の悪所友達、富田の酒大盡の御蔭を受けての酒商賣、是れも儲けよりは大分呑んで果し、不斷狸々の如く酔うて暮し、夜晝なしに寐て花をやる、麴町に今あの姿、是れもましなるべし。

第五 月に薄雲かゝる情

銀ぎはになつて酔ひの醒める十人の殿原

世に心元なきものは鮫の腸喰ふと、風吹きに駕籠の中で煙草のむと、密男の手柄咄となるべし。い

はねば腹脹る、とはいへど、只何事もいはぬに越した事はなし。爰に政都とて、唐人流の按摩採つたり、三味弾いたりして、大盡といふ大鳥の羽がひの下にて、育つ座頭ありしが、旦那衆に連れられて大方吉原に這入り込で、随分腹立てぬ坊ちやと、女郎共に可愛がられて、毎日食悦いたしぬ。ある女郎少し頼むとて、肩を脱ぎかけて、美しき所を按らせけるに、政都は後より思はず心動きて、○○○○○○○○、是れ○○の如し。女郎不便を掛けられ、よく／＼思へばこそと、人の氣のつかぬ時、ちつと○○○○○○、外へ語るなと口を堅めけるに、宿へ歸りて早此の事を話せば、男早りはあるまじ、己にそんなよいめをさするものか、偽り坊主がいひなすと、其の後は大盡共言ひ合はせて、慰み所へ連れて行かざりければ、無用の手柄話に、其の身の遊山を缺くのみならず、日待にさへ呼ばれぬ程になつて果てけり。大盡の御機嫌とつて、世を渡る者の心得悪き故ぞかし。太鼓の智慧立てすると、色宿の亭主が客に横柄などは、皆呆氣の沙汰にして、是れをよいと申されず。兔角色の道に掛つて、身を過ぐるの人、利發をやめて、足らぬ顔して、大盡にまかれるが上手なり。都の色茶屋の亭主に、随分智慧自慢して、客お出でといへば、花車押し除けてまかり出で、「是れは旦那、よい衣裳付でござります。而し素見る茶は今時世間に流行り過ぎて、我らが様な粹仲間目にしみます。兔角何時見ても、山の端染に七子織の羽織でなければ、本大盡とはいはれませぬ。ちと物好を替へて

御覽じませ。」と、客のお蔭で過ぐる奴が、来る程の大盡をおしこなして、「是れは三四様には此の頃お出でを見かけませなんだ。盆前が近いと思召しての身用心と存する、そんな小さい心では、磯せりも御無用々々々。」と、まだ座敷へも上らぬ先に赤面させける。世間は廣し、こんな所に何が見込みあつて結局外よりは流行りぬと、此の茶屋でうち込まれし者江戸に來ての物語、聞けば爰元にも夫れに毛頭違はぬ末社あり。飽くまで粹立てを致し、大盡高う上れば、旦那も餘程よい所あれど、折々あせんしやうでくさると、然も大勢の付合の中で高々と申す。女郎勝手入りを繁くして出づれば、節々勝手への御見舞、「酔かけの鮓に湯づけ飯は、必ずあたる者でござります。」と、よういふ顔にて太鼓の口から罰の當つたる事と、皆人憎みて連れざりしが、今見れば所々の開帳場へ出でて、古編笠きて、大盡粹になるやうの相傳書とて、何やら封じたる物を賣つて口を過ぎける。何をか書いておきけるかと調べ見れば、「粹には金許り遣うてなるものにあらず。始めから事知りの末社を連れて、諸事是れが粹なるしこなしを見習ひ、夫れに氣をつくれれば、つい粹になる事なり。騏の尾に取り付く蠅は一日に千里を行くが如し。無性に金を蒔き散らし、陰で笑はれ給ふな。」と、扱も己が太鼓持つた時智慧立てを致して、夫れががいになつて今彼の様になりても、まだ賢だての止まぬこそ笑止なれ。何程末社が粹なればとて、太鼓のざはいを大盡が見習うて何の役にたつべき。太鼓の粹と申すは、無慾な顔

して大盡に思ひつかれ、彼方から心のつく様に仕掛けるが粹なり。こんな事大盡が知つて、其の心になつてよいものか。又粹な女郎に逢うたらば、馴れてから酒事の面白いはずみを見覚え、座配もよく氣もこなれて、自然と粹になる事あるべし。然し畢竟此の道の極意は只金銀なり。必ず粹になつて、色道に於てはよく鍛錬したる男、えては揚屋の門を、夜も編笠著て通る様なが多きなり。然れば何れもあんまり粹になる事を、よい事ぢやとおほし召すな。粹になると金が皆になるとが一時ぢやと、大笑ひ致せば、其の内に大商人の心の廣き、武藏野の色里、縦横十文字遣手の初が、私金の取つて置所まで覺えたる男のいへるは、「粹にもせよ野暮にもせよ、兎角銀始末しては、片時も面白くない所なり。世間に商ひがないといへど、爰のぐわりとしたる事、神鳴も虎の皮の禪解きかけ、太鼓打つては大豆買ふ氣になり、散茶の見せかけ姿を眺めて、あはれ一角あらば、今宵一夜の稻妻にせんと天にかへるさを忘れて、終に天竺浪人となる太鼓の可愛い事なり。況んや地を歩む人間、偶全盛の世に生まれ、金銀づくでなる戀を、思ふ儘せぬは無念なり。色里も次第に金の位詰になりける。此の程家質に銀借るさへ、大方の吟味にては貸さざりしに、爰で遣ふ銀は何處で借り出して使ひけるぞ。世にない物かと思へば、澤山に成る物は銀ぞかし。此の前吉原の太夫、其の身の重さに目替へにして代銀渡し請出しけるさへ世界の取沙汰、又もなき事といひしに、今の世の薄雲随分花車作りな女郎に

て、十三貫目はありなしの姿を、金木の三郎重家といふ大盡、金子千兩にての身請、銀につもれば六十貫目なり。五度目にかけての銀子なり。時代とて是れにもさのみ肝を潰さず、此の大盡薄雲請出して、二年半目に算用して、右の六十貫目揚げ詰にして相濟み、今より末々大分の銀儲けと悦び、一日も長生するが徳と、随分身の養生を專にして、浮世をしまうた屋の氣散じは、薄雲願ひにて、上方見たきの由、夫れこそよい氣のばしなりとて、同道にて都に登り、祇園清水嵯峨愛宕、土器投げも、郭にて聞きしよりは興ある眺め、頃は春ながら、昔朋輩に聞きなれし名なればゆかしく、高雄に立ち寄り紅葉の秋も思ひやり、なき名のみ高雄の山といひたつると、太夫古歌を思ひ出づれば、大盡取敢へず、君は愛宕の峯の薄雲と、斯かる花車なる事のみ申して、毎日所々に出掛け、よい中の眺めありき、又なき樂しみと聞き傳へて羨みぬ。此の大盡の舍弟龜井六郎三といふ男。是れまた兄に負けぬ大盡。殊更若くして氣盛んなれば、人の下手につく事をせず、萬事は嵩にばつとしたる遊び手、不斷末社十人づ、召し連れ、是れを十人の殿原と名づけ、其の身は小栗判官と名乗りかけての大酒。鬼鹿毛といふ口の強い遣手にも、小判の轡をかけぬれば、前膝をりて忝いの二三三百も申しぬ。今日も又例の殿原伴ひ、何時もふせた屋にて晝から呑み出し、夜に入るほど酒事染みて、よい機嫌過ぎる時、禿蠟燭の心を切るとて誤つて火を消し、勝手へ點しに行くうちに、池の庄助といふ太鼓頭、すかさぬ

男にて、酔ひ紛れに、大盡可愛がらせらる、女郎の内懐○○○○○、○○○○○、○○○○○、○○○○○、先の届くを、憎や男奴と、其處なる煙草盆引き寄せ、煙管の鴈首引き抜き、煙草の膏を左の頬へしたたかつけて、大盡へ此の品を竊かに叫び、燭火明らかにならば、左の頬先に膏のつきたる男こそ私を迷惑がらせし者と、よういふ顔して告げられければ、大盡思はれけるは、誠に美しい上を、我人の好く様にこしらへたる色なれば、人として是れに迷はぬはなき筈を、太鼓持つ役と家業を大事に思へばこそ堪忍も致せ、十杯機嫌の上では、李下に冠を正さずと謹み給ふ聖人も、人の買ふ女郎にふと抱きつかれまい者でなし。こんな所を改めぬが分知りの第一と、座中の末社共に向ひて、「汝等此の暗き中に、左の頬先に早く膏の塗つた者に、金一角はづむべし、運びとならぬぞ。」と宣ふ聲を聞くと面々に長徳寺の仕事と、左の頬先に手早く膏を塗つて、此のしむこと壹分には安い物ぢやと大笑ひする所へ、勝手より火を點し參つて蠟燭へうつせば、一座夜の明けたる如く、何れも我先に罷り出で、「私は左の頬は残らず念いれて塗つた。」と申せば、拙者は左のかけがへに、右の頬まで斯くの如くと、面を出してかしまる。是れも一興と、約束の如く一角づゝ下さるゝ。何になる事やらと、人此の事を知らず過ぎけり。其の後大盡正月の事、氣策に受合ひ給へど、重手代意見最中の時にて、手前銀自由ならざれば、日比の末社共を竊かに召され、此の金才覺の内談、何れも彼の里へお供申す

時の様に心得たとは申さず、先づ承り合つて御返事申し上げんと、猿丸大夫の顔して、何とも明りの見えぬ談合。大盡氣の毒の頭をわつて案じられしに、さあ無い段になつては、前市著に二朱が一つなかりき。末社頭の池の庄助御笑止に存じ奉り、諸方を韋駄天の如く聞き歩き、色々智慧を出して小田原町より、調ふ口を聞き出し命にかけて働き、漸う才覺致し正月買の間に合はし進じければ、大盡喜悅限りもなく、「十人の中に優れて汝一人此の働き、末に至りて家買うて貰ひたき願ひありや。」と問はせらるれば、「如何なく、左様の願ひ存じも寄らず、何時ぞやふせた屋にて、酔ひに浮れて女郎の懐へ手を入れ、左の頬先へ膏を塗られし男なり。其の時の御情を報じ奉らんと存じて。」と、涙を流して申し上げる。大盡此の心を感じ、手前よき首尾の時分、彼の女郎を請けて下さるべきとの御企て、「近頃忝き御事ながら、其の女郎、如何にしても其の夜の仕成し情あるとは申されず。勿論惚れては居りますれど下心嫌。」と申す。「夫れは粹なる汝には不料簡なるべし。我等不便がる内、又汝がいふに任せて後暗い事あらば、今以て厭といふ筈なり。其の時は我を大切に思ふ心から、汝が心まかせにならぬ所。婦妻にしては、宿を出歩く太鼓の女房に打つて付けた事、留守の中に手むさい事があるまじ、ひらに持て。」とあれば、庄助重ねて申すは、「其の夜の事、大盡手前をおほし召して、拙者心の如くなり給はぬところはよし、然し夫れも嫌ならば嫌にて、我が心一つにて治めおかるゝ筈なる

を、惚れたといふ男に印をつけて、旦那の耳に入れらる、心根如何にしても酷し。情しらぬ大盡なれば、即座に隙下され、重ねて連れられぬには究つた事。思へばこそ惚れも致せ、夫れを辛き目を見せんとは戀知らずなり。畢竟拙者大盡より、優つたる襟の厚き者にあらば、私銀の才覚男にと思召して其の夜も情あるべきが、いうても太鼓の身なれば、打つても叩いても、物にならぬといふ所を合點して、大盡への注進だて、先づは慾の深い心からなり。」と、嫌に極めて申せば、龜井も尤もの事に思つて、夫れよりして女郎替へて、今の小倉に逢ひ染め、斯かる太夫に今まで逢はずに、過ぎ行きし月日を惜しみしも理ぞかし。兎角千人の中に優れし所あればこそ、多くの數女の中より太夫職とはなり給ふなり。色あつて情あつて、面白い事あつて、床に誠あつて、よい事揃うて、何時までも變らぬ御心は松の位にありと、買ひ覺えし男の申しぬ。

傾城色三味線江戸之卷終

傾城色三味線 大坂之卷

第一 梅も松も打交つての大寄

郭では口舌宿では女夫いさかひ

色遊びの面白といふは、今此の時津浪打ち寄する大港、人の心もうち開いて、小道なる事をしらず、是の所繁昌の故ぞかし。大氣に生まれついたりとも、儲けなくば自ら遊びも小さかるべきに、抓み取りの心覺えあればこそ、おつびらいたる愈索、越後町扇風方の大寄、太夫は泉屋のみよしの、茨木屋のことうらかをる、丸屋の小ふぢ、天職は背山、山のる、八重山、ありま、大崎、其の外鹿戀女郎十九人、手の續く程色絲弾いて、小歌は蚊の鳴く如く、禿共は手替りの踊稽古、正身の大神も岩戸をひらいて出で給ふべし。おもしろいといふは大抵の事なり。暮れてはそれ／＼の牀の取り所、斯かる揚屋の手廣き事、他所には見もせぬ事なり。此の家のみにあらず、九軒の住吉屋には、八鹽、江口、みやまち、小藤、浮舟、小太夫、名高い太夫職かれこれ六人、梅はあり原、井筒、藤崎、其の外しらぬ鹿戀女郎五六人、次の間は遠柳風の小歌、利兵衛節のかけ物揃ひ。抑此の御佛と申す

は、淨飯大王の御子悉陀太子と申せしが、十九才にて御出家ありと語り出すより、去りとは釋迦は若い時から、無分別な如來ではあつたぞ。此の面白い事を捨てて、何の當てがあつて、だんどく山へは夜ぬけにせられしぞ。其の身大王の御子なれば、よもや金に事缺いての事ではあるまじ。」と、酒機嫌で申し出せば、其の座に坊主墮の西念といふ按摩取が申すは、「今の世界にも金銀大分持ちながら、此の里の有難き道をしらす、あつたら日を談義参りして暮し、無用の僧を養ひ、又は突鐘の寄進して、衆生に戀の別れを嘆き悲します、其の罪逃れ難し。只慈悲心におもむくの第一は、死に一倍の請判をして進ぜまし、此の所へそ、のはかして、御供申して参つて、色にす、むるを大善人とはいへり。昔衣かけて出飯の文となへて、食いたゞいて喰うた時を知つて居る者もあるに、時々商ひ口を申して、旦那の御機嫌を取りける。總じてかやうの繁昌の所に勤め給ふ女郎は仕合ぞかし。常さへかくはやらせらるれば、物日は嘘お隙があるまじ。三箇津の内にては、此の里の女郎許りは、借銀の事はおいて、年中に餘程宛延びがあるべし。臍線銀があらば、竊かに内證で歩を安うして借りたい。」と萬に細かい開帳場へ、錢見世出す細元手の男、大盡に連れられて、酒呑みを樂しみに宵から参りて、何の役にも立たぬ事を歴々の太夫殿に尋ねか、れば、「あのいはんす事わいの。物日紋日役日を勤めて貰へばとて、其の揚錢は親方の爲とこそなれ私が徳にはならず、衣類の外的身拵へ、禿の仕出し親里への

合力、其の外昔に變りて人のしらぬ氏神會索、京の祇園會を大坂にて渡し、堺生まれの女郎は、大寺祭を喰うてはたされ、新紋日十二日は三津寺の樂師、二十八日は北野の石不動、これ等まで賣日になりて義理思うての身あがり。殊更近年世に連れて、至り留木も人のききしれる名の木を焼かねばならず、十種香源氏の道具、楊弓の一流、讀までも二十一代集、字治に壺を遣はし、見る事もならぬ能芝居の棧敷をとり、知らぬ國の筑紫に石の鳥居が建つ、東の淺香山とやらに、裸形の阿彌陀が出来るのと、見ぬ神佛のことまで、縁を求めて奉加帳、いやとは言はれず、信心なる顔付して一角づ、投げ出すも悲し。夫れに限らず高うはいはれませぬが、町よりわせる太鼓衆、染め出しの浴衣などとなるは、惜しき心にも憎からず、たゞ無理に悲しきは、脇指を拵へるとて、柄鮫を貰ひかける、女にかやうの迷惑度々なり。かかる事にて勤めの中に、太夫といはる、程の全盛なる女、私に限らず皆借銀となるなれば、今時の女郎、する分貫はではすまぬ算用。」と、あり體を語る、〇いか様もあるべし。去年の七月十日の暮方に、さる女郎、ねんごろなる宿小座敷に入つて、揚屋の鼻には十露盤おかせ、遣手に手帳をつけさせ、盆の事共を仕舞はれしを、襖ごしにきくに、その節の客七人ありしに、皆無心いはる、程の馴染、十兩五兩三兩取りあつめて、四十八兩もらはれしに、是れにては中不埒と、大方の拂ひは半分濟ませとの内談。されども毎年の御つかひ物、奈良晒二十五匹、大鯖二

百三十指、錢七貫、索麵百把、箔の團扇五十本、ほゞつき挑灯三十は、火の雨が降つても調へずにはおかれず、太夫様の外聞」と、おつ取つて遣手がいふ。聞くにむつかしき付届け、町屋にて手前よろしき人の、世間もつばらにするも、是れ程の事にはあらず、色道なればこそ、今此の貸借の不自由なる銀を、ようはやる事なり。貰うて女郎の身にはつけず、冤角今程女郎のむつかしき事なし。義理は武士の如く立て、内證さぞ苦しかるべしと、氣を慰めに参りて、世界の狭うなるやうな咄を仕出し、次第に調子びくになつて、三味の音たえ、聲賣る女郎も小歌機嫌はなくて、連歌座敷の如く、一座しめりて、氣のつきる所に、その夜の太夫、何か女郎と花々しき口舌仕出し、とかく心底のみこまぬといふ時、習ひの涙をこぼし、その上に小指切つて投げつけ、跡は永々としたる恨み。これはどうでも旦那のが無理さうなと、末社共取り扱ひ、ざつと酒にして歸りしが、其の中にかの錢見世出す細かい男、此の口舌に氣を移して、大盡より先へ抜けて内に戻り、酒機嫌に内儀を呼びつけ、遊女の如く宵の口舌を思ひ出して、今更我を憎からぬ心中なれば、指を切るといひ出す。女房驚き、「夫婦となれる身の中、何れか此方の物にあらずや、つがもない事。」と氣疎い顔をすれば、亭主眼色變へて、「扱は此の男を振ると見えたり、さうした事なれば尙切らさねば一分たたず、左もなくば向後御目にかゝらぬ、只今爰を出てゆき、親の許へ身上りとやらをせよ。」と愈募りて出づれば、女心に悲しく、「去

りとは其方に物がついて狂はすか、指がなうては明日から仕事ならぬが、如何に女房なればとて、むりなる事を。」と泣き出せば、「そんな前方なる仕掛の涙などに、ふはとのる男にあらず、どうでも切れ。」といぢれば、相借家の親父共目を醒して、夜更けての高聲たゞ事にあらじと、夜中に家主を叩き起し、借屋中八人大屋殿を先にたて錢屋の戸を叩けば、女房涙ながらに表を明けて、「よい所へ御出で、大抵の女夫喧嘩にあらず。」と、始終を語れば、何れも我を折り、「冤角酒に酔はれしものならん、何卒それは宥め様の有りさうな物。」と、いづれも内に入りて、色々いはるゝをきかず、「斯様に郭中一杯に露顯致しては、尙々切らさではおかれず。」と、氣色變つて申せば、家主智慧をだして、「然らば其方を思ふとの誓紙を、内儀に書かすべし、是れにて堪忍し給へ。」と、様々に詫びれば、「然らば、各の仰せに任せ、堪忍致すべし。」と、女房に起請を書かせ、其の奥書に右の通り、内儀其方を思はれ候所、實正明白也と、家主を始め借家中連判して渡せば、是れ程慥かな起請は唐にも有るまいと、亭主悦んで取つて置きける。

第二 梅よりすいた萩野が一風

雪の肌は菩提の障り

當流分里の奥女、金使ふ人許りをよしとはせず、假令分限なる男も、前方なるを嫌ひ、徳のゆかぬ

男の名代になつて、一座の捌けるにあいたる事、勝手は冤もあれ世間は是れなり、今時新地の茶屋女さへ、不便をかけて小銀をとらせ、京郡内の著物をしてとらす男の事は、差しに逢うた時許り泣いて見せて、浮世男の名の高い者、軽口教へて歸るは、何の役にたたぬ事なるに、此の男にあうた事を、家毎に是非に咄しける。勤めの身は、内證の用に立つ男を、譬へば片面の耳がなくとも、いふ事さへ聞いてくるれば、澤山と愛しがる筈と思へど、勤めなればこそ嫌な男にも逢うてやられる、金でならぬ身ならば、不器量なる男は、美男によい事許りして取られて、無念度々なるべきに、有り難きは金の威光で、一代楊枝使はぬ口をもつて參つて紅舌を嘗め侍る。女郎もこんな男に逢はるゝ時は、よもや人間とは思ひては逢はれまじ。小判に逢ふと思ひ給ふ故に、酒の上にも迎ひ氣のない事と、随分世間へ出されぬ男の申し侍る。爰に天満に銀で自由自在に、天神を廻す男ありけり。生まれ付き不束なる上に、近い頃楊梅瘡の出た跡一面に潰えて、面は皮剥いた様になつて雪紙を見るに均しく、濱芝居の見世物にしさうな男と、人皆磯螺大盡と申しあへり。是れをよい事と心得、伽羅之助といふ替名をやめて、いそらと申せば喜悅致しぬ。或時酒染みて末社共好き機嫌の餘りに、屏風を圍ひて其の内へ旦那を押し込み、何れも屏風の口に立つて、「さあ〜今度海中で仕過し致し、龍宮城を夜抜きにして、始めて此の里へ出現致した磯螺と申す鳴物、毎日かかる物いへる女郎を二ツ宛喰つて命を速く隔

者の生捕、錢は戻りぢや、さあ太夫様方、奥は廣い。」と喚けば、「龜相いふな、女郎様方に奥の廣いは差合ぢや。」と、座中哄というて笑ひ、皆する程の事大盡を説いて太鼓共が慰み、「是れから磯螺に裸體で餓鬼踊所望ぢや。」といへば、「酒が過ぎたに。許せ。」といふを、「不仕付な。」と叱る。是非なく大盡裸になつて餓鬼踊をすれば、「旦那、踊の出来た祝ひに一角宛出さう。」と申せば、「踊は何篇も致さうが、是れは許せ。」と手を合はすを、「太夫様のごさる前で、ひけて見える。」とほやけば、爲方なくて親の借錢なすやうに、不承々に一角宛取らしける、是れ程裏腹なる事はあらじ。例へば妾に内儀の機嫌取つて給仕して飯喰はさるゝに似たり。何れも世界は廣し、随分取り苦しい氣を取つて、連添ふ女房の匿す事まで人中で言はさせ、其上嫌ひな酒呑んで、殊更大盡に悪い癖あつて、酒過ぐると其の儘悪理窟を申し出でられ、其の揚句に刃物三味、命勝負をこしらへて、五六度も御供申して、やう〜二朱一つ下さるゝ、是れにも忝い百程いうて戴くに、去りとは磯螺に付いて歩行く末社共、果報過ぎて、追付太鼓冥加に盡きさうなものと、中間寄せての是沙汰、かく面長なる大盡に逢はるゝ女郎、嘸や心愛かるべし。然し今時女郎の氣に入り大盡は、泣くばかりとつて勝手にならぬ事いふに及ばず、とても勤めの身なれば、二つ取りには紋日役日にへら使はず、勤めてくるゝ男が、氣骨が折れいでお爲によかるべし。随分洒落たる男自慢の人、大坂堺にも數多あれど、あじやりだてに皆になし、晝中

には揚屋の川を後通らぬ男多し。此の頃も難波一番の色男、始めて女房を迎へしに是れでは遊女と違ひ、一生の詠め者なるに、難波一番の悪女而も脇が臭く、ようも彼の様な物に添へて居る事よと、近所の人等我を折りしに、五十貫目といふ敷銀の光で、楊貴妃に見ゆると、氣に入る様に宵から寝て喜ばしける。町にてさへ此くの如し、増して小金で賣る身の、不男なりとて疎畧に思ふ筈なしと、後家に掛つて、身代仕直したる男の申し侍る。爰に西の國に匿れなき男、松の位を根引にせし、十八公といふ大盡、暫く當地に逗留して、扇屋の萩野を面白がり、四五會して何の事なく引抜き、都に住む所を求め、月雪の朝、紅葉の暮にも萩野を眺め、萩の下露濡れ深く、此の家にありと、少し自慢で宵は色川原の名取、器量も諸藝も打揃うたる、具足屋といふ子を手活にして、面白く酒呑んで、夜深くなれば、萩野うは風身に當てじと、釣夜著の下に抱いて寝て、結構なる夢の見盡し、目が醒めると夫婦起きて、紙燭燈し連れて臺所に出でて、棚にさし蒐り、卵子五つ、赤貝も煮る許りにして是れ幸ひと爐の火を起し薄鍋をかけ、何も彼も打ち入れて、此の甘き事どうもいへすと、舌打ちして、女房共かんは好いかと、差向ひにさしつさされつ、さまざまの戯れ、一しほ酔ひも面白かるべし。女郎請出しても、こんな事して暮してこそ、樂しみも深かるべきに、根引にすると其の儘組の布子著せて、よろづの鎧を腰に下げさせ、一文が掴み菜をねぎらせ、味噌薪までの世話さして、しかも昔かたりし人に

も遠慮せず、出でてあいさつするなど、何としても其の心は残る物を、世間構はずお内儀様にする事無分別の至りなり。去れば此の萩野、夕霧に次いでの上作もの、美しいといふ又比べものなし。或時座敷踊の仕舞、亂れ姿の暮方に、召し替への浴衣腰より下の一重ねも、今日の汗にとて、そこ／＼に解き捨てて、行水の御裸身、白くたへにして、彼の驪山宮の温泉を開かれし昔の品物も、中々此の君には及ぶまじ。去りとは此の里の男共、ようぞ命が有るぞ。是れに限らず、朝夕太夫達の〇〇せらゝる姿を見て居て、目を廻さぬは不思議ぞかし。此の夕暮に九軒へ出入する、小料理のきいた六兵衛といふ男、近き頃母親相果てしが、死骨を高野へ納めよとの遺言に任せ、浮世の事共忘れて、目に涙、手に数珠持ちながら、兩人ある子供が事はいひ残さず、火の用心と許りいひ捨て、大方は出家心になつて我が家を立ち出で、暇乞ひがてら留守の事も頼まんと、吉田屋喜左衛門方へ立ち寄りしが、萩野素肌の面影を見て、菩提の道を取り外し、扱もと思ふより〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇になりて、旅装束の前の方可笑しくなつて、人の見るも恥ぢて帯に袂み、漸として高野の麓に付けば、此の所の在名禿といふにつけて、太夫の裸身忘れず、尙々〇〇〇〇出づれば、母の死骨よりは一物に難儀して、御廟の橋渡れば、蛇柳忽ち萬の借錢乞と變じ、手に書出し腰に帳、財布かたけてあらはれ、大節季も今の事ぢやと喚く聲に、耳ない奴が聞き込んで、ぐなりとなつて、それよりは心靜かに奥の院に納めて下向いたし

ぬ。艸木心なしとは申せども、大晦日の苦しき事をばよく辨へけると、殊勝に存する。

第三 梅の花山にのほり詰める男

晝寝の料理好み、喰はぬ先に醒める夢

商人の高利を取りながら、元直で御座りますと、澤山さうに誓文をたつる。傾城の誠なき心から、起請書いて客をたらすも、品こそ變れ、夫れくんと身過ぎ、女郎に限りて偽り言ふ様に、悪口いへるは無理さうなり。既に我人老人は正直にして假にも諛つかぬものと、律儀に覺えて居れど、年寄程偽りいふものはなし。寺参りしては、今でもほつくり往生と願ひ、此の苦界にうかくとの長生き、一日も早く往生したしといはる、片手に、隱居の庭に柿の核を植ゑて、八年したらば孫共に、木練のと飽きさすべしと七明年なる事を巧み、常著る小袖も、兼房は弱きとて花色袖を好み、子供が元服したを見て死ぬれば、もはや此の世に思ひ残す事なければ、それからは人に飽かれぬ先に、一時も早う尊い所へ参りたしとの願ひ、程なく月日経ちて、息子成人して、元服致せば、あれに嫁をとつと、其の願ひもすらりと濟めば、孫を見てからの念願、孫が出でれば彦が見たし、兎角死にともないに極つた事を、いはれぬ口さきで往生をいそがる、諺が憎し。何故に天道次第にしては置かれぬぞ。持佛堂の佛も、毎日の看經毎に、往生したきとの虚言は、嘘をかしう思召さん。歴々の息子持ちし親

仁、町へ讓状をださるゝに、我等儀若し萬一自然何方にて相果て候ともと書かるゝ心底可笑しし。若し萬一を百二百かかれても、死なずに居る身ではなし、心見えて拙し、世間に此の類多し。喧嘩の咄などすると、俺が事ではないが、爰を切られてといへるは、愚かに聞ゆ。予が事といへば、そこに口が飽くべきか。しかも二本差した口から猶更見苦し。女郎のいひかたにしては、あどなくしてやさしう聞え侍る、此の前八木屋の最中といふ女郎、京屋の座敷に、堺の古手といふ大盡と、五月雨の日、しつほりとはなされしに、稻光頻りにして、九軒町も動く程の大神鳴、是れはならぬと戸障子をささせ、俄に蚊帳を釣らせて此の内へ逃げ込み、兩耳ふさいで大盡は汗を流し、引舟女郎に投節止めて、雲雷鼓撃電の文に節を付けて諺はせ、太夫にも伽羅を置いて、護神香を裾に止めて牀に入られよと、以ての外おぢられしに、最中は更に恐れる體なく閉し掛けし戸を明けて、此の鳴るの面白さ、自由にならば毎日聞きたいと、柄輕が顔して、虚空を眺め居られしを、神鳴より心玉の恐ろしき女郎と見限り、夫れより終に逢はざりしが、神鳴は蟲の業にて、すぐれて怖がる人と、又左もなきとが有る物ながら、先づは好かぬ者なれば、女郎衆は恐ろしからずとも、怖がらるゝ體がよし。總じて女の武邊だて見苦しき物なり。兎角女郎は優しうして、花車ながよし。すこし弱き様にいはうとも、詞數なく、高聲せず、身を恥づるを以て、色有る花ともいへり。如何になじみの大盡なればとて、敵と居

の面白さ、清貧は常に樂しむといふは、我々が事なるべし。」と、たはけ盡して皆にしける事はいはずして、寒い時分に破れ帷子をきて、過ぎし半太夫との口舌咄、今は無用の至りなりと、權五郎殿も片目ふさいで笑うて御座るべし。あの氣でなければ皆にはせぬ筈と、若い息子をもちし親父共が、意見の引事になつてはたしぬ。

第四 梅の花笠にふりかゝる時雨

子を捨てて色に迷ふ親仁の仕果

人の親の、子故に迷ふは常の習ひなれば、古めかして、色の道に迷ひ、心は闇にあらねども、不斷の大酒に足も定めず、晝中にもしるき所へ踏み込み、無性といふもの騒ぎくらし、あたらしやの金太夫にふかくなづみ、行年六十九歳まで分もなう通ひ死して、大分の借銀を一子に惜し氣もなく譲られける。此の息子迷惑なる親のあとを請取り、家藏諸道具分散にして、住み馴れし我が本町を立ち退き、次第に下り坂となつて、谷町に僅かの古道具店を出し、不目利の新助とて、常住掘かづき許りして、苦しき世渡りをせしが、流石親の子程あつて、ない銀を使ひたがり、透さへあれば新町に出掛け河波座の采女といへる、貳匁取の女郎に逢ひ馴れ、責めて親仁が今鹿戀かふ程つかひ残して置かれるば、又樂しみも深かるべきにと、過ぎ行かれし親仁の仕果を悔みぬ。かく子の事を思はずに、使ひ捨

てし親もあるに、又子を思ふ親ありて身に絹物をあてず、口には濃茶もしらず、鼻に名の木の香もきかず、色道に疎く秤目に賢く、桶の輪かへるも、かづらゆひが傍を離れず、古輪の切を非人と争ひ取り集めて焼木となし、すたる塵塚にて錢さしに拵へ、年來錢を連ぎ溜めて、數千兩の小判になし、取りぶき屋根も瓦にしかへ、赤銅樋をかけて、末々世倅が世話のなきやうにと、身の娛しみをこらへて、一子のために金銀を殖し、死去の節下寺町の旦那寺へ、五十貫目祠堂にあけて、外は釜の下の灰までも讓狀一ツに濟みて、誰か七つの内藏に、指のさしてもなく残らず受取り、四十九日の朝出家衆を申し請け、佛事仕舞うて夕飯より精進あけ、箸を下におくと宿をかけたで、新町に行きて、山口屋の亭主合點か、親父が所務分けしたぞく。」と、小判を逆手にもつて蒔き散らし、此の案内繁昌と喜ばせける。是れより心の儘の奢り、丹波屋の村雨に濡れ掛り、雨の日も風の日も精進日も構はず、毎日の里通ひ、よろづ花麗にやつて、名題の末社引揃へて九人、前後を守護し、東の門よりさゞめいて鳴り込めば、お先へおてきより紋付の二ツ提灯、揚屋から人橋かけて、盛砂せぬ許り、追付是れへ御なりと、九軒の山口屋には萬燈の如く火を輝かし、臺所は組板の音高く、摺小鉢なり止まず、井戸車も人も隙なく廻つて、外より見るさへ小氣味よし。不目利の新助は、阿波座の二匁としけり、腰輕になつて歸るさの慰みに、一返郭をめぐりしが、此の大盡の威勢を見て、去りとは人間なればあれな

り、偶色の盛りなる世に出生して、銀でなる榮花の自由にならぬ身と生まれける事無念の至りなり、何ぞ二匁取の女に戯れて、うかくと暮す事、人と生まれし甲斐はなしと、油店の筆を貰ひて、我大丈夫な身体となつて、太夫を自由にまはし、大盡と稱美せられ、浮世小路の駕籠に乗らば、此の橋を再び渡るまじと、四ツ橋の橋柱に書き付け、直に宿へ歸り、何の目當もなきに、明日の日早々より京へ心ざし、京橋より枚方まで駕籠に乗り、滅法界に登りしが、佐田の天神前にて、上から來る駕籠が、「替らうではないか。」と詞かくれば、駕籠の者、「何處へぢや。」と問ふ。「ハテ京橋へぢや。」といへば、「そんな隙なものは米の安い時も嫌ぢや。」とかぶりをふるを、雀けんこ打つてかへるに極め、「旦那様おりて下されませい、爰までとほりましたに、ちと御合力頼みます。」と、歎きをいふを不便におもひ、つまみ錢二十やつて、「替駕籠早うもつて來い。」といへば、小腰かめて、「何も駕籠に御座りませぬ。」と、少しの事にて悦び、先の人を乗せ替へて、大坂の方へ行けば、上より來りし駕籠は、乗手の男合力せぬと見えて、駕籠から打明けるごとくにして、「扱々きたない奴かな、少しの増しもなく、其の身は何を喰ふやら、牛のやうに肥えてをつて、肩も背もたまる事か。あんな奴が駕籠かきの油盗人といふ者ぢや。」と、物憎さうに跡から睨みつけ、「さあ旦那召しませ。」と駕籠を直す。新助の乗り様に駕籠の中を見れば、封じ文一つあり。「これは最前上から乗つて來し旅人の、取忘れし文なるべし、呼び返して是れをやれ。」といへば、「中に金さへ御座らば、狀一通やなどは、忘れをつたら大事か。其の上最早尻影も見えねば、引きさいて捨て給へ。」といひ様に小肩を揃へて昇ります。新助是非なく、此の狀を開き見るに、「十兵衛殿下られ候に付き、一書申し入れ候。彌御無事御勤め珍重に候。我等事昨晩上下共に息災にて歸宅致し候。然らば茶人の繕ひ留守の内に出來候て、此方に受取り置き候。近日春日膳さし下し候時分一所に遣はし申すべく候、將又此の度大和巡り致し候て、岡寺より多武峯に參れる道に、安部と申す里はづれに草堂是れあり、連衆のどをかわかし、立ち寄り茶を貰ひ喰べ申され候。其の茶椀今上方に賞翫致し候三島茶椀の、而も頃よきにて候故、如何様なんぞ掘出しもあるべき所と存じ、うそく見歩き候所に、佛壇の間の腰張、勝手口より三枚目の反古、慥かに定家の三首物と見申し候所、少しも違ひあるまじく存じ、早速仕持に貰ひかけ申すべく存じ候へども、連の内にもん勝なる慾人候故、態と其の分にて罷り歸り候。此の度引返し參り可申く存じ候へども、下向仕る間もなく、又罷り立ち候事も、近所の手前家來共の思惑、如何に候ゆる、我等は參り不申候。貴殿急に彼所へ參られ、住持の氣の付かぬ様に、少銀にて貰ひ被申候様に才覺可被成候。尤も慾の世の中、此の十兵衛殿などにも御沙汰御無用に候。此方にては何の義も不申候。急に御越し可被成候。慥か雷の岡などと申す古所の邊かと覺え申し候。道具屋太郎助殿參る、同太右衛門よ

り。」と読みも果てず是れ天の與ふる幸ひと、心を静め四五返繰り返して、讀んで見る程旨き事なり、先づ押し戴き懐中し、扱駕籠の者共にいひけるは、「我大坂に用ある事を失念して出でたれば、是れより立ち歸れば汝等に隙をやるぞ。」と駕籠を下さす。駕籠舁共は、「夫れはく御大儀な。」と笑止な顔はすれど、殻身で歸るを悦ぶ。新助は夫れより逸散に宿に歸り、妻子のなき身は心安く、俄に市を立てて諸道具残らず賣り拂ひ、何か取り集めて、金十一兩貳歩を腰に引付け、家主に暇をひて直に件の草庵へ尋ね行き、品よく住持に貰ひ受けて金子十兩相渡し、二色の道具取つて又大坂に立ち歸り、伏見町の道具屋へ、三島茶碗を金五枚に賣り離し、扱定家の三首物は京へ持ち上り、表具を致し、上京の有徳なる茶人の元へ、大分の銀にかへて、一夜檢校の如く、よい身となつて暫く西寺内に宿を借り、一兩年は色事やめて掘出しを心掛けしに、必ずよい時はする程の事心に叶ひ、二年半と申す秋の頃、五千兩といふ小判の數になして、故郷なれば浪花に歸り花、錦を飾りて親の生まれし本町の屋敷を二層倍で買ひ戻し、今ははや浮世小路の遊び駕籠に乗つても、餘り人に笑はる、程の身でもあらずと、女郎狂ひの志頻りなりしが、よく思案を巡らすに、五千兩の幅にては、太夫に掛つて、見事な騒ぎといはる、程にはならず、せめて一萬兩の身代にならば、太夫を買つても、可笑しからずと思ひ直して、夫れより北濱の若い者と組んで、米事にかゝりしが、仕合よい時は吹き付ける風空に、思ひの

外の上りを得、遂に願ひの如く一萬兩の身代となつて、さあ今こそ大盡といはれて、四ツ橋を幅廣に歩行きても苦しからず、あ、嬉しやと、四五年張弓の如く引張つたる氣、弛みしより俄に煩ひ出し、様々醫療をつくせども、年々氣をいりへらし、心虚といふ病のよしにて、幾樂與へてもいかなく露程もきかず、次第々に重りたれば、新助涙を流し、去りとは悔しや、是れほど短き命とらば、五千兩の時くわつと使うて仕舞ふべきに、無益の金を溜めて、佛臭い弔ひ事に捨ててのけん事、返す返すも悲しけれ。我生まれより已來、伽羅くさい〇〇〇知らず、三つ布團の上に枕も並べずして、結構なる夢を見ず此の儘死なば、閻魔の前にして、見る目かく鼻といふ粹に出合ひ、汝は前生にて草津の姥が餅を喰うたか、太夫と牀入りしたかと必ず問はれん。其の時知りもせぬ偽りをつかば、鏡にかけて顯はれ、掛替もなき下帯をはづされ、後の世に恥かかん事なんほう無念の至りなり。責めて息の通ふうちに、女郎買程の器量ある養子をせばやと、手代どもに此の趣を語れば、何れをも謹んで承り、「御養子をなされなば、幸ひ堺筋の甥子様か、平野の従弟子然るべし。」と、詞を揃へて申し上げる。「いやく、汝らがおもひ入れ我に違へり、甥も従弟も太夫を自由にする程の器量なし、然れば我が存念を達すべき様なし、唐土の堯王は九人の皇子をおきて、舜を太子に立て給ふ、只何者にもせよ分知りと其の者共にいはる、程の器量者を養子とし、親優りといはせし、是れ我が願ひの一つな

り。」とて、廣き大坂中を尋ねしに、茶碗焼出す高原といふ所に、風の神と相住して、新町の名ある太夫天神の姿を紙幟に畫き、其の身は古き破編笠をきて、橋々を以て廻り、「さあ〜丹波屋の小薩摩、明石屋の唐土、吾妻、紫、桂木、吉田、瀬川、奥州、小琴が、苦みのはしたを、古釘に替へませう。古釘に替へませう。」と、子供たらしめて其の日送りにする男、どうでも色知りの果てなればこそ、あの身になつても女郎のことは忘れず、昔をとへと呼び入れて、始めをきくに、「難波津に我がよしあしは御存知の事なれば、包むに及ばず、譲りを受取りてより、宿に一夜も寐ずして新町に通ひ詰めの男、太夫の金吾になづみて、算用なしに使ひ捨てて、此の今體。」と、恥かし氣なく語れば、新助枕を擡けて、「去りとは奇特な男、是れこそ色神の引合はせ。」と喜び、即ち養子と定め、一萬兩の金を残らず譲りて、終に其の身は過ぎ行きぬ。紙子大盡思ひもよらぬ跡をしてやり、遺言に任せ、再び新町に通ひて、時めく太夫に灸の蓋をさせる程にしこなし、諸分知りと末社も尊め奉り、女郎も方様ならずてはと、偽り去つて眞なる志堅まり、御腹次第に嵩高になつて、道中するも見苦し。願はくは此の里出て、お屋敷でお子様産みましたとの訴訟、大盡聞き届けられ、吉日を見て根引にすべき企て、諸事八百兩で埒のあく事、近頃心易き儀と、お敵の悦び大方ならず、里の住居も今二三日、太夫に名残の杯事、揚屋一家罷り出で、さいつさされつ、妹女郎禿まで肖りませんと、喜悅の酒盛賑かなる

最中に、此の世をさりし新助が聲天井に音して、「あの女郎請出す事無用々々、腹なる子は西横堀の四の二といへる間夫の男が種にして、汝が子にはなきぞ。切々中座して、用事かなへに雪隠へ行かれしは、廁屋を名代にして柴部屋へ外し、此の子種をつきいれられし、古い仕掛を喰ふのみならず、寐心の悪い女郎を受け出し、身二つになると作り氣狂になつて、汝にわかれ、間夫の四の二が方へ立ちのかんとこの巧みをしらす、鼻毛を讀まれし癡呆者、夫れ程のうつそりとは知らいで、養子にせし事冥路の障り、口惜しや〜。」と、姿は見えず聲許りして失せにけり。一座の者共肝をけし、惘れて空を見れば、女郎は赤面しながら、「近頃惡劫な幽霊ぢや。」と、天井を恨めしげに、見上げられしは理々。

第五 梅に名の鳥が啼く東路の別れ

男にも血の路の煩ひ、戀にまめな心

色里の商賣、年中抓み取りもあるやうに思へど、格別逢はぬ客あり、たまさかに鹿戀一つ買ふ男二人連立ち、まだ虎屋の梅花の油見世も出さぬ時分、出立ぐらるで揚屋にゆき、三つ取合はせのなんばん菓子一人に一斤宛に荒し、木枕鼓に番うたひ、腹のへるをかまはず、中食に切麥、程なく夕飯夜食、殊更言ひ合はした様に、何れも上戸なれば、中酒から汁椀で見知らし、納めまで是れで廻し、鼻紙入れば女郎の延用捨なく使ひ捨て、煙草盆の貰草まで打ちあけて取つて去ぬる客にも、宿の習ひ

とて花車が二度程も出て、「是れは手織でござりますが、其の儘絹の様な茶盤縞をめました。」と、輕薄いひける。「諸事丸取にしてから、揚屋の取は七匁ぞかし。是れ程合はぬ者はあるまじ。」といへば、是れ尤も金屋の金五郎、息災で居し時罷り出て申すは、「是れよりあはぬものあり。」「夫れは何ぢや。」と聞けば、「野郎の病中。」と申す。「夫れこそしれた事、商賣止めて居喰にする事、野郎にかぎらず、知行とらぬ程の者は皆あはぬ筈なり。まそつとよい事を申せ。」と打ち込めば、「是れは何れも聞き様が悪し。野郎の病中には、日比目をかけて、不便がらるゝ大盡ほどあはぬ者なり。其の故は、常に小兒心になつて、愛らしき事のみして、可愛がられた若衆、病中には白粉氣絶えて、赤み勝なる頬髭生ひ出で、其の儘島者を見る如くなれば、姿を恥ぢて誰人にも逢はぬ。」といふ。夫れは其の筈なり、色を賣る身は其の心掛尤もぞかし。高島屋の、あづま路、十死一生の時、凡夫の昔より不便がらるゝ、半風といふ大盡、病中五十日餘、雨の夜も風の日も缺かさず、一日に三度づゝの見舞、薬の様子食事の進みやう委しく尋ね、今一度の本復を諸神へいのり、庚申へ裸參りの代參をたて、住吉へ命乞の庭神樂をまるらせられ、身を擲つて祈られけれども、次第々々に頼み少なきよし、遣手が告げければ、一生の暇乞に對面すべき由、大夫方へいひ入れ給へども、「如何なく此の世を思ひ切つて居る上は、何方にも御目に掛る事致さず、重ねて申し届くるな。」と、去りとは心強き言分。妹女郎引舟、遣手の

欠米まで、口を揃へ意見申しけるは、「お馴染多き中に、半風様程誠ある御方はあるまじ。御氣色悪きとて引込み給ふより今日まで、五十日餘り一日も缺かし給はず、毎日三度の御見舞に、遂に一度も逢はせ給はぬ御事、餘りと申せばお心強き仕方、夢ばかり逢はせられ、亡き跡の事共、又は兼て御話し置かれし御袋様の事までも、直にお頼みなされおかれなば、愈御不便に思召し、何かにつきて宜しかるべし。ひら更今日は御對面あれかし。」と進め申せば、「さらく其方の思はくとは、大きな違ひあり。今半風さまの其のごとく、我事を大切に思召し、御心をつくさるゝも、我が身息災なる時の姿を愛し給ひて、思召し忘れ給はぬ故なり。然るに今かく病み疲れ、衰へたるを見たまはば、興さめて戀を醒し給ふべし。總じて色を以て、人に可愛がらるゝ者は、色衰へては愛薄くなる事常の人心なり。逢ひまして戀をさませませんよりは、あはで死なば次第に思召し出で、一邊の廻向にも逢ひぬべし。」と終に逢はず。惜しや勤め盛りに此の世を去りて、新町に花なき心地と行く人袖を濡らしぬ。惜しきかな、情あつて大氣に生まれ付き、風俗太夫職に備はつて、衣裳よく著こなし、一座賑やかにして、牀しめやかに、取り入る程よいこと多く、名譽思ひを殘させ、別るゝより早重ねて逢ふまでの日を、何れのお敵にも待ち兼ねさせ、末社共にも有り難きお言葉、何かに付きて此の君ならでとは、此の里へ來る程の者思ひをかけぬはなかりき。或時九軒の住吉屋にて、木五、朝原、柏正といへる今

出の三大盡、東路、唐土、八重霧、三太夫に手を揃へて逢ひ奉り毎日の騒ぎ。木五が連れし末社は作
 政とて、黒菊石のきんか頭、而もせいたんにして片足少し長く、何一ツ取得のない男なれども、恰好
 の人に變りて可笑しきと、頓瓢な淨瑠璃語るを興にして、何時も御供に連れらる。叔朝原に付き從
 ふ太鼓持は、白髮町の留平とて、厚鬢にして色白く、聲よく端歌の名人、女の好く風にて、殊更鼻の
 高い所、偽りなく、口拍子のききし若者、其の外末社は西の芝居の囃子方、一兩人打ち交つての酒
 事、樂しみといふは大抵の事、罪も報いも女房子の事も忘れはてて、面白がる中に、留平は此の内の
 君達に戀すると見えて、馬刀の吸物喉を通らず、思ひに胸を苦しめる體、唐土敏い女郎にて早速氣を
 つけ、竊かに密語きしは、「汝戀するを見受けたり。」といへば、留平横手を打つて、「扱は顯はれて恥か
 し、此のいつの頃よりか、方様の御事を思ひ染めまして。」と手をしめる。唐土大笑ひして、「鼻も動か
 さず、好うもくはない事をいへる男奴。我に執心偽りなくば、後とはいはじ只今御心に從ひ奉る。そ
 んな事は今から五六年も此の里の門松を見らるゝ、素い女郎にいはんしたが好い。泣かずに男に嬉し
 がるする程の女に、いかなく存じともよらぬ事、其方の思ひ人は鳥が啼く方。」といへば、「天晴見通
 し見通し。其の東路様になんともなりませぬ、責めて此の事通じてなりともあらば、又何時その時節
 もあるべき物を。」と嘆く。「夫れが定ならば、神ぞ此の戀我等請取り、明日の別れに腹痛むとて残り給

へ、お敵は好きにいひなし、逢はすべき。」と請合ひ給へば、うれしく、今の世の深き情知り様、此の
 君七代まで太夫冥加あれと、心中に願ふも理ぞかし。爰に作政は晝から浮々ともせず、日比嫌ひの
 念佛を、口の中にてほちくと申して、好物の酒も飲む顔して打ちあけるを、大盡は御覽じつけれ
 れ、作政が今日の風俗、まだ閒のある大晦日を案ずる體と見ゆる。近比小氣なる男奴、二十ばいまで
 は此のはなが合力して得さすべし。心安く春の來た心になつて騒ぐ可し。」との御意有り難く、「旦那は
 晴明はだし、ざつと是れで重荷がおりました。」と、一花は騒ぐ様なれども、又染々とめいりて、野邊
 へ近づく罪人の様に投首して片隅へよるを、八重霧立ち品に扇を引いて、勝手口に招き、「そなた東路
 さまに惚れたと見請けし我が目は違ふまじ。さもあらば只一度の首尾は、命にかけて取持つべし。」と
 深き御心入、とかう返答は申し上げずして、すゝり上げて男泣きにないて茶小紋の袖をひたす。八重
 霧愈不便増して、「然らば大盡お歸りの時分、心地悪しきとて跡に止まり給へ。何卒思ひ人に頼りま
 して心好く逢はして參らせん。」と、残る方なき御心入。「わたもちの愛染さま、まはり遠き勝曼のかね
 の緒、とりついて頼まうよりは、君が紅の内衣の紐に、頼みをかくれば濟む事。」と、提灯かけしを
 悔みぬ。斯くて二人の惚れ手共、互に夫れとはしらず、心々に明方を待ちて、此のいつよりか戀積み
 し、胸の思ひを此の曉に晴らす事よ、此の如く病人に藥がまはれば、死人なき世なるに、人皆戀に殺

されけるよと、仰せに任せ二人は俄に作り病をおこしける。連れられし大盡は、此の内證夢にも知らず、「何が中腹つた。」と問はせらるれば、留平は、「宵に喰べました蛸の手が胸に横はつて、太鼓持程あつて、腹がはつて痛む。」と申す。「今日の料理に蛸は使はぬが。」と、亭主不審さうな顔すれば、「何ぢや知らぬが、やれ腹を引き裂くわ。」とうめく。其の爲にこそと、柏正が連れられし道鐵といふ飛び上りの針立て、懐中より針を取り出し、片手に槌をもつて、「腹の蟲を残らず平らけ手竝を見せん。」と、酒機嫌に喚いてかゝれば、留平は驚き、「生まれ付いて針が嫌ひ。」と勝手へ逃げ入り、「作政は何とした、宵から浮かんだが。」と、木五懇に尋ねらるれば、「頭痛が致して欠伸が出て、目がまふ様で、どうやら死ぬる様でござりますが、つつきり血の道でござりませう。あゝ目がまふ。」と煮え返る。内儀心得て、俄に好い茶を入れるも可笑し。道鐵ぬからぬ顔して、「血の道は若衆にこそあれ。」といへば、「それは痔の道の事ならん。」と、笑ひだちにして太夫達に暇乞ひ、兩人の病人を宿の男に畧頼むとあつて、捨てて何れも歸り給へば、八つの鐘より夜明までの樂しみ、大分なりと悦ぶ事大方ならず、唐土、八重霧は、面々に頼まれし戀男共が思はく、詞に品をつけ情を込めて、東路に我が事嘆く様に頼まれければ、東路は二人がわりなき志を聞きて、「昔生田川に身を捨てし二人も、一人の女を思ふからの戀死、思へば何れを何れといひ難し。而し留平殿にあひます事は、もし漏れ聞えて、世の人の譏り嫌なり、是れはふつ／＼思ひ切つて貰ひましたし。作政殿事は思ふ仔細あれば、竊かに今宵許りは逢うて進ず可し。八重霧さま案内にて、追付我が牀へ政殿忍ばせ給ふべし。」とあれば、唐土むつとした顔にて、「世の人の譏りをおほし召さば、作政に逢ひ給ふも、留平に逢ひ給ふも、名の立つは同じかるべし。冤角取持ち手による戀、いと口惜し。」と不興して立ち給ふ。袖を控へ、「夫れは太夫ともいはれさんす、こな様には似合はぬ不粹なる御事、留平殿は器量よくして女の好く風、我が身とても嫌ならず、其の方に逢ひましては、此の首尾知らぬものは、此方から好んで逢ひもせし様に仇名たてられは、折角情知つて、逢うて進ぜた甲斐なく、淫者のやうに取沙汰せられんも、いひ譯六ヶし。又作政は不男にして、しかも女の嫌がる氣質、夫れも大盡ならば、慾で逢うたともいはるべけれど、太鼓の身なれば、是れ以て其の詮なし、男早りはせまいし、あの男に限りて、女郎の方から好んであふとは信じまいし、只戀のきかぬ男にあうてやるが情なり。」と、唐土にも點頭かして、夢許りの契りを込めて、此の世の思出をさせてやり給ふ深き戀知りと、通り行き給ふ跡の跡まで其の名高く、惜しきは此の君。

第六 梅の匂ひ吹き渡る大橋

戀は外になつて色宿は諷のつき所

平家の二番ばえ、宗盛といへる本の大盡、六條通ひの志はあれども、第一の太夫職祇王祇女は、親仁手活にして通はれぬれば、少しさしあひをくりて、是非なく磯せりにかゝつて、湯屋ぐるひをせられしが、其の頃のしだして、千枚形の肌著、黒羽二重に匿し裏、おなじ黒羽織に平といふ古文字の大紋、上繪なしにいたらせ、袴高く裾取りて、大小よしやが、りにほつ込み、臙富士といふ大編笠豊かに著て、懐紙も延は女めくとて、小菊の五つ折、爪楊子をさしこみ、奉書の反故包みに、名の木厚割、鼻紙入はさみしきとて、つれたる散切の禿にいれさせ、いんでんの横ひだ、金岡時代の筆捨松の高蒔繪の平印籠に、袋打の長緒、あまかはの二つ玉、二十六夜の瓢箪根付と、更に可笑しく、踏み捨ての桑染足袋に細緒の藁草履、鶴どの葎の細杖けしやうについて、喜三太といふ小者に、紫絞りの風呂敷に、替著物楊司の道具を包み添へ、替雪踏逆手に持たせ、踵にて尻を叩くほどに足を上げて、ひんくゝとあるかせ、難波瀬尾といふ至り末社を連れて、六原の門口より、斗鶏仕掛の人形の歩くやうに練り出し給ふを、其の時の若男六原流とて是れを學びぬ。よく内證知りし者のいへるは、宗州も今大盡顔したまへど、彼は元清水坂の傘張りの息子なり。不用ざる盛をやつて無用の奢り、追付内證はない大盡となつて、つひには八島の破れ口にあはるべし。總じての浮氣男、我より上手な人のする事を學びたがれども、ある袖は振りよく、ない袖は體の悪き。木綿羽織の胸紐しめたは、究屈

さうに見えて見苦し。天窗の物好きは錢の不用ぬ事とて、一年に二度程つゝ、置いて見たり剃り下げてみたり、撥鬢、厚鬢、絲鬢と様々に變れども、變らぬ物は日野の一つきる物、心は至れども姿をいたらず、權が廻らねば沖漕いだ事もならず、冬、氣は有るに任せて、夏の中程より身の廻りの物好、先は嫌な所有り、粹素男に限らず、帷子は紋付の薄淺葱に極まれり。何れ淺葱に黒羽織きる人に、草履取のなきは、結構の振舞に後段のなき様な物にて、跡の寂しき者にて、安う見えける。是れでも其の心には、大盡と思ひ、位をとつて、過ぎぬ酒に酔ひの醒める藥たべんと、紙入あけてねぢ服紗取り出し、一跡に八九匁ある小銀の中へ、錢一二文入れて、人には一分の音をきかしてがらつかせ、今朝も浮世小路の、五郎兵衛が鼻が平産いたせしに、はや一角振られたと、人間きよい僭上、羽蟻の涌く我が家の門柱は取り替へずして、まだ新しき柄頭を巻き直し、年忌前に、持佛堂の障子の破れしは僭らずして、夜歩きの盛に、提灯は薩張と張り換へ、而も我が逢ふ女郎の定紋を付けて、悦ぶ心にあらずでは、色ぐるひおもしろからず。如何さま僭上やめて諷つかず、二日寄合に町衆と物語りする調子では、なか／＼遊女狂ひ可笑しからず、せんしやうと諷つくで持つた色遊びなり。大盡は死なれたる親仁を世にある様にいひなし、是れさへ仕舞うてやつたらば、鑑請取つて其の時こそ、きつさりと物の見事な騒ぎを致すでござる、夫れまでは手の届かぬ所を堪忍といへる女郎は、無事で石碓引かるゝ母

親を殺し、隙が明いたらば一日なりとも世帯を見せ、悦ばしませうものと、不斷仕掛の涙ほしき時に溢す。雨乞に此の人頼まば、端金使ふ百姓も世の中に逢ふ可し。耳訴訟に大盡聞き兼ね、石佛代とて金子五兩はとりも直さず七夕前の小拂ひとなしぬ。今時の慰み座敷、うっかりとは遊ばれず、遣手が近寄れば、此のほど宿をもつたる移り聞きて、無心をいはぬ先に此方から「追付家見にまるるぞ、四つ橋に大分薪買ひ置きしに、木柵は拙者承る。」と、しかも束ね木三荷持賃共に、八匁二分五厘が物にて、高高に見せ、太鼓末社が近づけば汗はかけども、羽織をぬぎ置かず、不斷兵法の師をする人ほどに、油断なく心がけねば、女郎狂ひもならずと、悪賢き男の粹顔して、手下の若い者に語るを聞いて、近頃の御たはけなり、銀つかうて氣苦勞せうよりは、銀つかはずに、用心のよい我が内に益した事なし。大盡と色里で稱美せらるゝ程の身ならば、少し鼻の下の長いこそ壽命藥なれ、高が世間へ出ぬ遊び所なれば、利口ばつた方より、氣の付かぬといはるゝ程大様なるがよかるべし。色遊びには金を出し、談合事には智慧を出すべし。必ず内證の薄い大盡が、よろづに賢立をして、末社が詞の先を折つて、皆までいふなど、早呑込んで先練りを致し、骨牌の場で手目させぬやうに、八方へ目を配つて、心を許さず氣骨を折つて何が慰みになるべし。おのづから遊びも小さうなつて、可笑しからぬ事のみ多し。爰に家財かけて三拾壹貫五百目の大盡、北濱の根強い名題男と同じやうに連立ち

て、毎日新町へ通ふ千鳥と替名ついて、淡路町に匿れもなきせんしやうものありて、名題の男共が上に立たん事を思ひ、萬事嵩高に出でけれども、高が三十貫目内外の身代と、いづれも見透して、是れに逆らふ事なく、何につけても下手になつて、心の中で積つて、是れ遊びの外の慰みと、陰にて竊かに笑ひぬ。或時千鳥が申すは「何とやら羽織の長いは、醫者めいて悪く存じ、頃日拙者物好にて、仙臺縞の羽織を、成るほど短く致し、此の里へ著て参つたれば、早大坂中の若男共が、残らず羽織短う致した。諸事に味な思ひつき出せば、どうして知る事やら、早速世間へ廣まり、似せらるゝに困りはてる。」と、此の類のせんしやう、毎日二十度も申し出して、一座の痞へを起しぬ。其の中に頼田といふ家数もちし法師きき兼ねて、「總じて我が身一つの身體を飾るせんしやうは、致してからが高のしれた物好、只成らう事ならば、家買ふせんしやうをして見たい物。」と打ち込まれて、是れには流石の千鳥も音を入れて片隅へ屈みぬ。此の頼田といふ法師幼き時、都新在家の庄兵衛の婆の許に養はれて成長し、當世男となつて、長崎の鹿といふ大盡と、前の吉野の花を争ひ、遂に鹿に手折られ、此の里も面白からずと、京を捨てて難波の古郷に立ちかへり、生國なれども遂に新町を見ぬ事、我ながらあまりなるせんさくと、一元、二元、三元、四元とて、都より召し連れられし四人の末社共に、同じ紋所をつけさせ、何れも甲乙なしに、身を當流に拵へさせ、九軒に出掛け、井筒屋が廣座敷、太夫は大

嬉しがる例には、喜八定家に自然と心通ひ、日の暮紛れに勝手へついて立ち、ちつと鼻のほとりを舐めおきしが、今の便りになりぬと大笑ひに面白き夜を明けての御歸り、又近い内にや。

傾城色三味線 鄙之卷

第一 女郎の心中をついて見る鐘木町

千歳の松にかゝる藤の森の大盡

一三年あともまでは手前味をやつて、お茶のよいといひし、上林の蕪を自由せし身の、世に銀詰りほど悲しきものはなし。意見いふ人もなきに、獨りと止めたれど、揚屋の拂ひ分もなう仕散らかし、西島の道は絶えたれども、遊びつけし身なれば、たゞも居られず、宿は伏見へ屋根木見合に行くと、普請する銀があれば、色に仕揚げるなりをして、仔細らしく軒口を見上げ、どうでも來年までは待たれずと、好い加減な謔を申して、七ツの鐘を突く頃鐘木町へと心ざして、毎日彼の里の噂聞く耳塚の前なる、九右衛門が所へ立ち寄り、少しも早くと駕籠を急がせ、三枚肩にておさせける。人此の道にかかつて浮いて來る事科でなし。既に九右衛門が可愛がりし白犬、日毎に客の御供して、揚屋の座敷まで推參致し、女郎のあがり膳を戴いて、尾を振つて悦び、是れにあぢしめて、駕籠に乗る人あれば、喰ひかゝつた鯛の骨を捨てて、勇んで駕籠について、三里の所を熱茶一杯呑まぬうちに、京屋の七左

と羨ましく思へど、我が物になつて不斷見れば鼻につくが如く、手前に少しも心止めず、間近なれば朝暮十町目に通ひて、呑み掛け引掛け樂しみ此の里にありと、心の儘の榮華、何れあらばせいでは、さながら心若やぎて、千歳といふ女郎に、抑水上けの日より逢ひ染め、今なほ深く言ひ替して淺からぬ中となつて、女郎も此の人ならではと、物になる客を外になして、文の遣り繰りさへせざれば、何時となく逢ふ人絶えて、物日の寂しきこと、皆二三請けとり、至り穿鑿になつて、一人に片附き、千歳と少し浮名のたつに、心の強き女郎にて、世間何とも思はず、誓紙、髮切、爪指、入痣、身を裂くとは是れなるべし。この上は命を捨つるの外はなし、だん／＼憎からぬ志、風俗洒落拵へ、其の年も勤め盛り、女はさもなく、後付に咄き所あつて、○に玉の助けも及ばぬ祕曲自然と備はり、逢ふ人毎に戀を残り。或時二三絶えて二月餘りも行かざりければ、千歳は心ならず一日千度文して問ひ参らすれど、詞の返事さへなくて逢はぬ思ひに沈み、大方は涙で暮し、勤めも心に染まぬ所へ、二三が連の夜深法師といふ淺草邊の樂人、難波の人に誘はれ、大坂の色町見物に行く門出に、此の里へ立ち寄るを千歳早くも見つけ、格子より聲掛けて呼び入れ、二三が見えぬ様子を問へば、この法師も摩れ者にて、少しせかして慰まんと、けうとい顔して、「扱は貴様は二三が此の頃の事御存じないか、近ごろ夫れは運蔭なり。今は鳥原通ひに隙なく、よしうを手に入れ、五條の古手大盡と張り合ふ最中、

爰の事など如何なく思ひ出す事にあらず。あんな不心中物に、心を盡さるゝは大きな御損、さらりと氣を替へて、當分物になる客の心に入り給へ。」と、誠らしう葉を焼いて、塵も灰もつかぬやうに、にべなしにいひ立ちにして大坂へ下りぬ。千歳は聞くと胸を痛め、今など斯うした思ひをせうとは、夢々思はざりしに、さりととは聞えぬ御仕方、冤角是れまでと心中堅めて、最後の一句と文認めて、御返事次第に後とはいはぬ心底、古郷の親達の方へも、此の世の別れの筆を残し、萬死覺悟を極め、二三が返事を待つ時、まだ秋ながら素紙子を著て、深編笠に竹杖、便りなき風情して門口に立ちしを、「無用の非人の色好み、往來の邪魔ぢや、彼方へ行きや。」と、遣手がはしたなく申せば、此の男出て行くを、千歳ちらと見て、「今のは慥かに二三様なり。」と、人をして呼ぶまでもなく、徒跣にて表に走り出で、紙子の袖に縋り、顔を見て何かなしに泣き出し、爰は人目もあれば中戸の腰掛まで伴ひ、菟をとらして、先づ此の姿はと問へば、二三恥捨てて顔をあげ、「今爰に来るは死ぬる程苦しけれど、今朝油屋より届きし文を見るに、我が身の上悪し様に、何者か其方が耳にいれ、事なき恨みの返事もあらずば、今宵も知れぬ剃刀業との、覺悟極めたる文體に驚き、其方の命の程心元なく、淺ましき姿を恥ぢず、斷りに許り参つた。扱我事は假初にせまじき夜遊びに、身代残らず打ち込み、手と身になつて今日は暮せども、明日過ぎる便りなき身となれば、俄に思ひ立ちて、越後の村上に母方の伯父あ

れば、是れを頼みに罷り下るなり。然らば日頃互に申せし事も、勤めの障りにもなればなる。今よりは、我等死に失せし者と思ひて忘れ給へ。更に恨みに思はず。」と、紙子の糊の解ける程涙を流し語れば、「扱々かかる事とは知らずして、恨み申せし段々御許し給はるべし。さうした事にて中絶え申すは世にある習ひ、日頃の御心には似ずして、氣の弱き御事、假令身を捨て命をかけて、逢ひませいで置かぬ女なり。浮世の習ひ、沈む瀬あれば浮む瀬あり、御身上の潰れし事さのみ御嘆き有るまじ、只御身の恙なきこそ嬉しけれ。冤角命は物種」と様々諫めて、宿へ斯くと知らざるれば、元より馴染の宿と申し、殊更下々までも御蔭を忘れず、是れはと一家驚き、先づ二三様を四疊敷の靜かなる方へいれまし様々の待遇、流石京近き所なれば、下々までの心和かに、情ある心遣ひ、千歳身にしては数々嬉しく、先づ御杯と心よく呑みかはし、紙子脱がしまして、肌馴れし下著を著せまし、三味取り寄せて、何時よりは調子高く唄うて、昔になして勇める心、魂にこたへて嬉しく、「扱もく今日首尾以前に變らぬ志、身に餘りて満足いたした。此の上は妻女にしても偽りなき心底頼もし。誠は其の心根を見て引抜き、一生宿の眺めものにせんため、身を棄して來れり。」と、一年の所を數百兩に替へて請出し、宿にも満足致す程悦ぶ物をとらして、萬事首尾よく仕舞うて、随分世を樂自慢して、夫婦よつて毎日の酒事、命を延ぶる千歳も、過れば毒に極まつて、夜晝の〇にかへつて命を縮め、二三日は終に此の世を去りて、千歳が嘆き、即座に髪切り、昔の姿はなくて、今は墨染に行ひすまして、いまそかりけり。

第二 戀の焼きつけ柴屋町の門立ち

見知り越しの悪口いひがち高名袴とがめ

東山は青葉茂りて、梅も櫻も何時しか根に却り、番の風も吹き納まりて、袴は今を盛りに千團子にぎはひ、取分け子持の鼻共が祈る神とて、三井寺は綿拔の袷見せかけ、都よりの詣で車にせき合ひ、是れも變つて面白しと、三條の西に伊三といへる男、お出入の米屋吉六とて大津に知邊ある者と連れて、大橋より駕籠に乗り、札の辻にて下さし、是れより三井寺へ歩ますして、先づ柴屋町に立ち寄り南の門より入れば、京より僅か三里の違ひで、端女郎の風俗格別變りて、著物しだらくに帶緩くし、白粉へける程厚く塗つて、善惡共に三味線を握り、少し顔を背けて、何やら一節宛呻らるゝ。立ち寄る人を見れば、何れもいかつらしき男、大脇差差すもあり、懐に花捻ち匿し、假染の車にも詞咎めして、情らしき事はなくて、喧嘩構へもむつかし。戀も遠慮も無性闇に鐵砲放つ如く、出づる儘の悪口、花鳥様かき餅は好きやら、鐵漿が剥けて見ゆると、然も近付さうなが見知り越しに仇口。さりとは喧ましさも、嬉しや比叡の私雨に四方へ逃げ散る。いざ雨宿りがてらと揚屋に立ちより、何かな

きものはなしと、因果經にも説かれたる由、物知れる出家の申されしも、思ひ當れり。

第三 木辻鳴川に深入りする色男

二千兩皆になして今口過ぎに一文の傾城買

奈良の京春日の里に諸分知るよしにて、假初ながら心安い色ぐるひとても、奢ればかのゆくものぞかし。京大坂のお上家な遊びもしらす、意氣張りといふ事も知らず、面白からぬ酒に長じ、我儘いうて、冤にも角にも捻上戸、百萬が厨子といふ町に、若草屋の香助とて、木辻鳴川に大事にかける箱入の大盡、此の里の名取り秋篠といふ女郎と深くなつて、三年半に二千兩の身代揉み潰し、住宅を賣つて退く時も、如何なく氣を死なさず、其のま、昔里通ひせし衣裳にて、靜かに町を練つて立ち退く。あの氣でなければ、あの様にもならぬ筈と、近所の親仁共指さしをして笑へば、香助見返り、「己が銀は遣ふまいし、身が物好でする事を、無用の指さし、色遊びの面白いといふ事を知らず、一生黒米の打込み茶を呑み、所が奈良漬の香の物を、煩はねば喰はぬなりをして、鱈の刺身に生諸白、呑んで来た男を誘はるは推參なり。」と、少しも憶せず、手前よい時に引きかきし秋篠を供に連れて、三條通で色里で附合ひ、心安くなつての上、兄弟の約束せし三笠屋の常といふ大盡、まさかの時は見捨てじとの詞を頼みに、落付随かと安堵してこの方へ尋ね行けば、此の男も算用無しの色狂ひに、身代崩

れて分散となり、門口に負せ方より厳しく番を付け置く折節なれば、主人に逢ふ事もならぬ首尾にて頼む木の本に雨もたまらぬ、三笠屋の當手も違つて、偏に盲目の杖を失ふ如く、心は闇となりて、くらがり峠の麓に、我が幼少の時少しの間里に行きし五郎作といふ百姓の方を思ひついで、爰に嘆きをいうて、半年餘り住みしが、如何にしても居喰には仕難く、一稼ぎかせいで見る氣なれど、何をせうにも元手なくて、いろ／＼思案して見れども、俄に鋤鋤の荒働きもならず、夫婦談合して、近郷の麥秋を心當に、柏の破れ三味線才覺し出して秋篠に弾かせ、其の身は彼處此處切り抜いて覺えし文彌節の淨瑠璃を語り、口過ぎの爲に大和巡りを致し、百姓の家々にて、半分は諺を語れど、聞きてが律儀なれば、あら痛はしや、すてんどうじはでも合點して、一攫みの麥になる事、天道人を殺し給はぬとは、こんな事をいふべし。往來の人の其の事となく笑へば、扱は彼奴めは一節なる奴かと、随分覺えし所を語り直せど、誰足止めて聞く者もなく、耳梨山を過ぎて、かつらご池といふあり、故ある事にやと里人に問へば、「昔三人の男ありて、一人の女を思へり。其の女の名を蔓兒といひしが、三人の思ひいれも切なりければ、従ふべき方をおもひ煩ひ、此の池に身を投げしより名とせり。」と語る。扱も其の女素人かな、三人の男どもに随分物遣はして、どうやらなるやうでならぬ仕掛して、もがかし、かたひしに身體片附けてやれば、手薄き奴からそろ／＼愛想つかして、思ひ切る者なり。戀も情

も古は律儀にして、ようも只は叶へてやつた事ぢや。但し業平時代には、男が大切で女の方から物遣つて逢ひし事か、天晴そんな世に逢うて死にたしと、今日の身の上は案じはせいで、何の役に立たぬ事を思へば、昔全盛の春も過ぎて、夏來にけれど冬袋束、汗に濡れて、日當りに背中ほすてふ、あまのかく山といふあたりに、歴々の匿れ家、表向は萱の軒にして、中戸より中の綺麗さ結構さ、滅多に奥ゆかしく、内を遙かに覗けば、飯炊く女も里びずして、數多それ／＼の召使ひ女、紫の後帶目にたち、是れは天の岩戸の如何なる大盡匿れ給ふ屋敷ぞ、手力雄の神力あらば、あの奥の杉戸引き開いて、取つて置ききの女體の姿拜みたし、嚙面白かるべし、爰はいけもせぬ淨瑠璃所にあらずと、秋篠に随分間の手味を弾かせて、頭を振つて投節を唄へば、腰元らしき女、なにやら承りて表へ出で、「奥様の仰せらるゝは、何やら夫婦の人に問はせられたい事ある由、苦しからぬに奥へ通り給へ。」と兩人を伴ひ、うち晴れし大座敷へ連れて行き、爰に暫時待たるべしと、二人を置いて勝手へ入りぬ。「是れは何とも合點のゆかぬ事、若しは夫婦の生肝でも取つて妙薬に入れる合點で、こんな奥の間へ引入れし事か、同じくは甘い物喰はせて置いて、兔も角もしてくれば、先づ食悦だけの徳なり。」と、世に連れてさもしき心になつて、夫婦息もせず畏まる。所へ最前の腰元いで、「こなた方は何ゆゑ斯様の淺ましき姿にはなり給ふ、先より奥様物の隙より御覽なされ、賤しからぬ男女、若しは色事にて斯

くはなりはつるや、様子を尋ね見よとの御事にて是れまで招き申せしなり。自然戀より品下り給はば詳しく昔を語り給へ。男つき女の風俗、兩人共に一風あれば、定めて外の事ではあるまじ、戀であらう。」と威しつけて申せば、「近頃奥様又は各まで目高なり、成程此の様になりしも連れたる女故。」と申す。「嚙やさうこそあるべし。奥方の御慰みに、有様に話さるべし。あれなる御簾の中にてお聞きなされるれば、ちと調子高く語るべし。」といへば、呑助畏まつて、蓬げし鬢など撫で付け、「今更申すもお辱しい事ながら、私事幼少より有りたいた儘に暮し、十七の春より木辻に通ひ初めて、様々の奢り募りて、此の秋篠を受出し、我が宿で遊ぶは地女と語ると同じと、身請せし女を其のまゝ、彼の里に連れゆき、毎日の騒ぎ、其の時分は親仁堅固にて、さま／＼意見をいたし、追付物貫ひになるを見る様などいはれしが、其の詞に違はず、今袖乞致すも、親へ孝の爲。」と語れば、御簾も動く許りに數多の女中の聲して、哄と笑うて後、御簾を上げて、乳母めいたる年構への女、十二三なる美しき男の兒の手引いていで、我を指さして、「あの人をよう御覽じやりませ。大旦那様は境でかくれもなき分限者で御座りましたが、新町の始めの夕霧にかゝつて御身代を潰し給ひ、お前様のお四つの年、お袋様と置き捨てにして、西國へとも申し又は江戸へござつたとも聞きましたが、今に御行方がしれませぬ。然れども手代衆此の家督を潰す事を惜しく思はれ、お前を取り立て御家相續せんとて、境の屋敷は祖父様の

御支配なされ、菟角瓜の蔓に茄子はならぬといへば、此の子が成人の末も心元なし。只色事の自由なる、大坂近くに置く事、千里が野邊に虎の子を養ふが如し。先づ此の子二十歳になるまでは、傾城町のない、人家稀なる里住居さすべしと、御袋様と御一所に、此の里に流され者の様にしておかせらるるも、傾城狂ひの病を恐がり給ひての事なり。是れ長松様御成長あそばし、堺の屋敷へ御歸りなされたとて、必ず傾城狂ひを遊ばすな、傾城狂ひ致しますと、あれあの男が様に、夏も綿入著て、米貰ひになります。よう見ておいて、こんどまで忘れさせ給ふな。」と、穴のあく程指さして「熟と和子に見せまして、夫婦ともに大儀ぢや。最早よいに、去んでたも。」と、御簾の中へ這入りぬ。呑助夫婦呆れて、「是れは格別なる所思違ひ。」と、少しは腹がたてど、強請るべき手掛りもなく、すごくと爰を立ち出で、其の後女は呑助に暇貰ひて尼となり、昔の名によりて秋篠寺の邊に草を結びて庵とし、二六時中の勤め怠らず、後世を祈るのほか餘念なし。かかる佛縁あつて、よい出家になり場を、何の末に頼みもなき身の坊主を嫌うて、十銭溜れば、直に酒にして、呑助が今の姿の見にくさ、何をかして今日を暮すぞと見れば、同じ様なる破戸漢共を語らひ、大佛殿の新始めの羣集の場に筵を敷き、辻打太鼓始まりくと聲をたてて、見物集まれば、「扱お断り申します、只今仕りますは、木辻鳴川流行女郎全盛のなりふりなり。買手の大盡一座のしこなし、同じく酒振り口舌の詰め聞き、ならびに太

鼓持のそり様、一角貫うて悦ぶ身振、其の外色町にあるほどの事は、細かに氣をつけて致します。今程は京都に坂田藤十郎、大坂に嵐三右衛門と申しまして、傾城買の藝の名人がござりますれど、それは狂言體で、私共が様に、手金を皆女郎に遣ひ上げて、大分元手をいれおきました。正身の我が身の上の有つた事を致して御目にかけます。」と、世盛りの時分の木辻狂ひをして、様々の遊びせし事を今仕て見せて口過ぎと、呑助は大盡になれば、おやまの九平次は鳴川の女郎になる。ひの木玉の權平は末社の左吉になり、物にかゝりの虎右衛門は、遣手の久米になつて、間夫狂ひを改め、とれぬ客を鼻で待遇ふ所、女郎は物前に無心の長文章案する體、又は退きさうな客を取り止める時、恨みいふ内に芥子かいで、俄に涙の溢しやう、爪を離すに細小刀にて二枚にへいで、痛まぬやうにはなつ仕様、大盡は参りもせぬお伊勢様を謹の相手に頼み、堅固なる長活の嫉を殺し、又は雪隠の屋根葺く程の事を大普請するなど、いろくりに身抜きして、盆正月を請取らぬ前置の偽り巧み、粹になつて遊びの面白なる最中に、手前薄くなつて派の利かぬ所、親の意見聞かずに追ひ出さる、身振、または身代皆になして、住み馴れし家を立ち退く思ひ入れ、見る人爰がよう似たと、大笑ひするも、理、家賣りて退きし事は次第に悔しく、身に染みくと今も忘れねば移る筈なり。扱編笠を脱ぎて、何れも歴様御持合せが御座りませうならば、少しの露を打たしやりませう。昔は是れが面白うて此の體に